教化と江戸文學

東大出版社

教化と江戸文學

三田村鳶魚著

東大出版社

大東名著選

教化と江戸文學

三田村鳶魚 著

36

教化と江戸文學

三田村鳶魚 著

大東出版社

¥1.80

學文戸江と化教

著魚鳶村田三

…36 選著名東大…

社版出東大

序

五六年前から是非書きたいと思つてをりましたのが、恰も機會を得て急に稿下いたしました。誠に近來での滿足、此くらゐ喜んだことは、筆持つて過しました四十年間に曾てないのでございます。餘りの嬉しさに心忙しく、云はうとした言葉が盡せず、書かうとした意旨が悉せません。殊更に言語文字の外に、嫋々たる餘韻を殘すなどゝ申す古風な思はせ振りをいたしたでもなければ、御時世に斟酌して饒舌を憚つたのでもなく、さりとて用紙の乏しい此頃ゆゑ、儉約したのでもありません。或は讀んで分り憎いかも知れないが、畢竟嬉し過ぎたゝめに面喰つた祟りが忽に出て來たまでのこと、昨日までも生若いところが、肩が凝るの凝らないのと、爺や婆の云ふやうな誂えを、恥しげもなくしてゐた報いで、幾分か苦しむで讀むも惡くあるまい、若し因果の恐しいことを此際些少でも心附けば、實以て私の書いた難文の御利益も驗著なものでせうとは、自分ながらも驚入つた申分なり。

手近いところで申せば、東京が江戸より何程結構であらうか、それは比較を絶つてをります。其比較にならない江戸にして、八代將軍吉宗の主意を發揮して、時世の人心を維持したいと、寶曆年間に教化運動を起した志士仁人がございました、その教化運動が近世文學を兩斷して、上方文學と立別れ

て、江戸文學を成立させました。江戸文學の成立を考へます時に、切に當時の世態人情を心配する餘りに、教化運動を起しました志士仁人に想到することを禁められません。わけて近年は寶曆の教化運動を寤寐の間にも忘れ兼ねます。若し何でさうした心持になるかと問ふ人があるならば、方々は何故に日本精神を尋ね廻つてゐるかと返問いたしたい。明白に知れてゐる日本精神を何で探し物にする、戰場に花と散る軍人は、思慮分別の暇もない處に、天皇陛下萬歳と叫んで、雄々しくも神になり佛になる、あれが日本精神なのだ、探さずとも尋ねずとも、紛れやうもなく、隱れる筈もない、臣民としては忠の外に何物もありません。此事は往ぬる明治二十三年十月三十日に賜はりました教育勅語に宣せられました、君臣父子夫婦兄弟朋友を五倫といひ、これに依つて教を立てる。名教として、教育勅語は五倫についての盛旨から出たものと拜せられます。その前（明治十五年十二月）に幼學綱要を頒賜される際の勅諭に、

彝倫道德ハ教育ノ主本、我朝支那ノ專ラ崇尚スル所、歐米各國モ亦修身ノ學アリト雖、之ヲ本朝ニ採用スル未ダ其要ヲ得ズ、方今學科多端、本末ヲ誤ル者鮮カラズ、年少就學、最モ當ニ忠孝ヲ本トシ、仁義ヲ先ニスベシ、因テ儒臣ニシテ此書ヲ編纂シ、群下ニ頒賜シ、明倫明德ノ要、茲ニ在ル事ヲ知ラシム、

と宣らせられ、畏しくも教育の根本に聖慮を勞し玉へるなり。しかのみならず、明治十九年十一月五

日に恭しく元田侍講が書ける聖喩記にも、

朕過日大學ニ臨ス、十月廿九日 設クル所ノ學科ヲ巡視スルニ、理科、化（學）科、醫科、法科等ハ益々其進歩ヲ見ル可シト雖モ、主本トスル修身ノ學科ニ於テハ曾テ見ル所無シ、和漢ノ學科ハ修身ヲ專ラトシ、古典講習科アリト聞クト雖モ、如何ナル所ニ設ケアルヤ、過日觀ルコト無シ、抑大學ハ日本教育高等ノ學校ニシテ、高等ノ人材ヲ成就スベキ所ナリ、然ルニ今ノ學科ニシテ政治治要ノ道ヲ講習シ得ベキヲ求メント欲スルモ決シテ得ベカラズ、假令理化醫科ノ卒業ニテ、其人物ヲ成シタリトモ、入テ相トナル可キ者ニ非ズ、當世復古ノ功臣、內閣ニ入テ政ヲ執ルト雖モ、永久ヲ保スベカラズ、之ヲ繼グノ相材ヲ育成セザル可カラズ、然ルニ今大學ノ教科、和漢修身ノ科有ルヤ無キヤモ知ラズ、國學漢儒固陋ナル者アリト雖モ、其固陋ナルハ其人ノ過チナリ、其道ノ本體ニ於テハ固ヨリ之ヲ皇張セザル可カラズ、故ニ朕今德大寺侍從長ニ命ジテ、渡邊總長ニ問ハシメント欲ス、渡邊亦如何ナル考慮ナルヤ、森文部大臣ハ師範學校ノ改正ヨリシテ、三年ヲ待テ、地方ノ教育ヲ改良シ、大ニ面目ヲ改メント云ツテ、自ラ信ズルト雖モ、中學ハ稍改マルモ、大學今見ル所ノ如クナレバ、此中ヨリ眞成ノ人物ヲ育成スルハ決シテ得難キナリ、汝見ル所如何、

前詔後勅に反覆し玉ふ聖旨を拜すれば杲日よりも明なり、故に此時元田侍講が奉答せし語を提學する

までもなし。

斯れば東京の大御代とは霄壤の差ある江戸にして、尙ほ且つ德川八世ありしを忘れ難し、吉宗は實に名將軍なり、然れども江戸市民、敢て江戸市民といふ、名將軍の盛意を遺却せるが如し、之を悲しむ者あつて、慣はぬ筆を執つて談義物を草し、時艱を救はんとし、衆俗を敎化せんとせり、是に於て奎運、東に遷る、輕文學豈に輕からむや。

感ずることの深く、思ふことの多き、悔む所は我才の短く、我筆の鈍く、況や狂喜に紛れ、暴歡に亂れて、心內平ならざるをや、何をか云ひけむ、何をか書きけん。

昭和十七年五月の一夕

鳶魚生

教化と江戸文學　目次

一、廢頽の極に達した人情本……三
二、時代に伴ふ下漸の傾向……六
三、儒者の理窟倒れ……九
四、諸道中興の時どころか……一二
五、無爲の時節……一五
六、貨幣改鑄による世の中の變化……一八
七、目につく金持の新陳代謝……二二
八、學校を以て世法を直す……二四
九、衣食足つて禮節を知る……二七
一〇、驚歎すべき學問の進歩……三一
一一、鳩巣の感孚論……三三
一二、薩州侯獻上の六論衍義……三五
一三、主眼は實驗實效……三八
一四、歌は手に合はぬ鳩巣……四一
一五、假名書の本の效能……四四
一六、新井白石の歎息……四七
一七、宋儒の嫌ふ術の字……四九
一八、學よりは術の流儀……五二
一九、徂徠の賞罰論……五五
二〇、親子孫の時代の違ひ……五八
二一、すべてが現金覿面に……六一
二二、百年餘も續いた爭論……六四
二三、飛んでもない講釋……六六
二四、しやべる神道……六七

二五、無法な坊主の辯舌……一一
二六、芝居がかりの惡對說法……一四
二七、衣を着た豆藏……一七
二八、教化地に墮つ……一〇
二九、奢侈贅澤でない結構……一三
三〇、當世追從第一……一六
三一、下層まで行渡る金廻り……一九
三二、御話の無い二十年間……二二
三三、記錄化された流言蜚語……二三
三四、隨筆雜著にも講談にも……二六
三五、心中から駈落へ……一〇〇
三六、廢頽せる男女の道……一〇三
三七、景氣のよかつた高利貸……一〇七
三八、胃病のせゐではない……一一〇
三九、寶曆と明和との變り加減……一一六
四〇、談義物の中心人物……一一九
四一、奇談も談義物も同じ心持……一二
四二、大阪生れの京住居……一二五
四三、遺つてゐる繰位牌……一二九
四四、志士仁人は風顚漢……一三三
四五、雨森芳洲の歎服……一三五
四六、先憂の人佚齋樗山……一三八
四七、たゞ一點の相違……一四一
四八、ひろがつた讀者層……一四四
四九、上方と江戸の振替り……一四七
五〇、讀者を引寄せる方便……一五一
五一、佛教に對する大々指摘……一五五
五二、儒を表にする立場……一五八
五三、日本橋の御高札は法律大要……一六一
五四、假名本の推奬……一六四

五五、男立狂言の惡對趣味……一六
五六、皮肉を極めた名文……一七
五七、讀み方を教へる思はく……一六
五八、談義物から生れた穴……一八
五九、寶曆の言葉吟味……一八六
六〇、言語につれた進展……一八九
六一、惜め得ぬ兩人の連絡……一九三
六二、反省を促す天狗會議……一九四
六三、布袋夢枕の言葉……一九七
六四、危い「教訓不辨舌」……二〇〇
六五、こじつけも洒落も……二〇二
六六、味方でない「教訓反古溜」……二〇四
六七、古風と當世風……二〇六
六八、廻つて持つ大提灯……二〇九
六九、讀本に繫る筋目……二一二
七〇、反對と見せた「返答下手談義」……二一四
七一、尤もな「なづみ」の指摘……二一七
七二、やはり一ツ穴の貉……二二〇
七三、活を入れられた三教論……二二三
七四、江戸文學の根本……二二五
七五、貨幣改鑄による動搖……二二七
七六、飛んでもない大腹中……二二九
七七、覺醒させる逆說の效果……二三二
七八、思ひもよらぬ勸懲の流れ……二三四
七九、引合に出した豐後節……二三六
八〇、突止められぬ連絡問題……二三九
八一、教化する側への影響……二四二
八二、先師尊敬の普寂律師……二四五
八三、古人憂慮の迹……二四五
索引……二四九

教化と江戸文學

一、廢頽の極に達した人情本

近世文學と私どもは申して居りますが、世間で云慣されてゐるのは、江戸文學といふ概稱になつて居ります。それはつぶさに申しましたら、江戸時代文學とでも申すのであらうかと思ひますが、私は從來近世文學なるものを、上方文學と江戸文學といふ風に眺めて居りまして、江戸文學なるものは寶曆を堺として分けてゐるのです。文學といふものを小說だけで申しますのは、如何なやうにも思はれますが、江戸文學の場合に於きましては、談義物といふ一種の小說によつて勃興致しましたので、寶曆以來の文學のすべてが、殆ど同時に江戸を中心とするやうになつて參りました。それ故に小說であるところの談義物を先づ捉へて、江戸文學――近世文學を談ずることが出來るのではないかと考へるのであります。

江戸文學の廢頽といふことは屢々云はれて居りますが、上方の西鶴、自笑、其磧などのことは差措きまして、將軍の御膝下に於て泣本が出、續いて人情本になりましたのは、まことに廢頽の極に達したものであります。爲永春水が天保十三年六月に刑せられまして後、二十六年たつて幕府が瓦解致し

ましたので、心ある者は左様の事柄を見過すわけには參りません。人情本といふうちに最も人に知られて居るのは「梅暦」でありますが、これが天保三年に出て居ります。その前年卽ち天保二年に曲山人の「娘節用」――例の小さん金五郎の話が出まして、大當りだつたものですから、それを見かけて直に「梅暦」が出るやうになつたのです。春水はこれを振出しとして、その後十年餘の間に續編、續續編といふやうな意味合で、辰巳園、惠之花、英對暖語、梅見船等と引延し、其外にもいろ〳〵人情本を出し、それが盛に行はれました。江戸文學が廢頽の極に達したと思はれる人情本は、天保度を以て最盛期としたものであります。

天保改革以前の江戸の廢頽といふものは、實に甚しいものでありまして、彝倫道德の學は全く無いわけではありませんけれども、男女の道は廢れてしまつて、一般の婦女と特殊な婦女――商賣人、それ者、黑人と云はれる者と、地女、素人と云はれる者とが、見分らないやうになりましたから、鼠色のやうな女性ばかりになつて居りました。當時已に無兵の亂と云はれて居つた位で、弓も鐵炮も擊ち合ふわけではない、從つて無血ではありますけれども、戰爭以上の亂劇であつたとされて居ります。その亂劇の模樣といふものは、とてもこれでは堪らぬと今日からも思はれるほどの有樣が、まざ〳〵と人情本の上に現れて居る。然もそれを平氣で面白い讀物にして、讀んで樂しむ者が多かつたのです。

この樣子を見ますと、男性も二本させば士、無腰になれば町人といふ風で、恰好だけのものになつ

てしまふ。容體が變るだけのことで、それ以上に何の變化も無い。町人も士も心持は同じやうになつてしまつたのです。それにつれて婦女も亦た娘であるか、女房であるか、女郎であるか、藝者であるか、茶屋女であるか、見ただけではわかりません。たゞ容體、體裁の上から、あゝいふ髷を結つてゐるから女房、あゝいふ著物を著てゐるから藝者といふ風に見分けるだけで、心持の方は別に變つてゐない。これで男女の道が正しく行はれる筈も無ければ、世道人心が維持されて行く筈も無いのです。

近い例で申しますと、明治、大正、昭和の世の中に、その時代々々でよろこんで讀まれた小說にしても、右に述べた算盤で彈いて見たらどうなりますか。いづれ時世の渦紋の中から出るものですから、已むを得ぬと云へば、それに相違ありませんが、現に謠曲の或物は上演を差控へる、差控へなければ禁止されるといふ事になつてゐる。そんな古いものでなくても、長唄、常盤津、淸元といふやうなものゝ中にも、同じく差控へなければ禁止される、演奏不可能になつてゐるものがいくらもある。もつと手近い流行唄でも、叱られたり、差止められたりする目前の有樣を見ますと、咎められなければならぬものゝあることはよく知れます。時代違ひの世の中に生れた謠曲にせよ、細棹の淸元や常盤津にせよ、話は同じことでありまして、そこに世道人心の隆汚、危微の根があるのではありますまいか。こゝに江戸文學の生立ちを說かうとするのも、そんなこんなの心持が無いわけではありません。

二、時代に伴ふ下漸の傾向

さて今日の文學史には往々忘れられることのある談義物、これは一向に面白からぬものとして扱はれて居ります。十數年前までは通俗的修養書、何か然るべき御尤も千萬なことが書いてある、面白くない、煙つたいものといふ扱ひを受けて居りました。それは今日の言葉で申せば、一方に社會教化といふ役目を負擔して居つた爲で、面白くないといふので何程潰されて居りますか。潰して袋に貼られてしまつたのは二十年、三十年前の話、屏風や唐紙の下貼りにされることも珍しくない。幸に潰されずに殘つたものも、古本屋の棚の隅に積込まれて、誰にも顧みられず、埃だらけになつて居つた。併しさういふ待遇を受けながらも、もと〳〵施本にしたものでもないのに、まだ〳〵大分に殘つてゐるところを見ますと、その當時には盛に行はれてゐたものなのが知られます。

それも讀まずにたゞ突込んで置かれたのでは仕方がありませんが、讀んでその時世の事を考へて見ますと、如何にも修養の意味の濃いものではありますけれども、そのうちには巧みに滑稽や諷刺を盛込んで居りまして、當時の人から見れば、隨分面白く、快く讀めたものだらうと思ひます。それは穿ちとか、穴とかいふ種類のもので、徒に人の弱點を衝いて凹ませるわけではない。後來の中本の中の滑稽、例へば「膝栗毛」とか「八笑人」とかいふものが、刺の無い薔薇であると云はれる傳統が何處

から來たかと云へば、やはりこの談義物から出てゐるのです。

特に近世文學の特徴である趣向の下漸、公家や武士を離れて庶民を趣向とすることは、已に上方文學がやつて居りまして、それが爲に平民文學だの、町人文學だのと云はれて居りますが、江戸文學は更に歩を進めて、細民文學――熊さん、八さんのお長屋文學になつてゐる、それも談義物に端を發してゐるかに見えます。談義物は四里四方乃至五里四方と云はれました江戸の市街地の範圍、八百八町と汎稱されて居りました幅員から産み出された文學なのです。修養といふのは讀者の方から申す言葉で、著作者の方から申せば教訓、教化でありますが、談義物を讀んで見ますと、それが庶民教化を目がけたものであることはよくわかります。相手を極めて教訓、教化することは、勿論談義物からはじまつたわけではありません。元祿末あたりから、目ざすところをしつかり分けて、教訓、教化をしようとする樣子が際立つて見えて參りまして、例へば鍋島論語の「葉隱」は武士といふものを目指し、石田梅巖の心學は町人を目指して居るといふやうな按排で、談義物に於ても庶民を教訓、教化することを看板にしてをり、書いてをりますことも其處へ仕向けてございます。

世間の教訓、教化といふことを申す段になると、直に坊さんが念頭に浮んで參ります。その時に教化を役目にしてゐる坊さんの方はどうかと申せば、山寺佛教から町寺佛教にひろがつて居りまして、それが江戸時代の初から著しい傾向になつて居つた。もう享保近いところになりますと、更にそれが

顯著になつて居りますが、その中でも一番手廣くやつて居つたのが本願寺で、淨土宗、日蓮宗なんぞもだん〳〵景氣づいて參りました。その結果として山寺の方は次第に寂れてしまひましたが、これは民間の財力の片寄りを思はせるものでもあります。御寺といふものが參詣場になりましたから、少しも餘計に人を引付けたくなつて、勢ひ談義とか、說法とかいふ宣傳敎化の方面に力が入つて來る、從つてさういふ方に力を入れる宗門がだん〳〵榮えて來るのです。これは別段に申上げるまでもない、よくわかつてゐる姿でありました。

又儒者の方を見ましても、學問がだん〳〵と末廣がりに下漸致して參りまして、日に〳〵開けて行く一方である。德川一世が慶長度に奬學の策を立てまして、それが寛永度に一息ついた。それが又寛文度に勃興して元祿に及び、更に享保、元文の際に至つて、改めて頭を擡げて居ります。その惰力は安永、天明度に及びましたが、又寛政度に出直つて幕末に及ぶといふ有樣で、その經過を眺めますと、だん〳〵に下漸して居り、民衆に向つて開けて來てゐることは歷々たる事實であります。德川一世が慶長度に奬學の事を考へたのは、戰國末の知識尊重の風を繼承されたのですが、大いにそれを煽る力がありまして、次第に諸大名を動かし、學問大名も出來れば、本讀み侍も出來て、一般武士の上層にも讀書に耽る人が出て來るやうになりました。

それが寛文度になると、ちらりほらり浪人學者が出て來る。浪人學者はもつと早いところにもあり

ますが、その數から申せば、寛文度にちらりほらりといふところがよからうと思ひます。然るに元祿を過ぎて享保度になりますと、民間に學者が輩出して來る。まことに盛な有樣でありました。

三、儒者の理窟倒れ

ところで、こゝに談義物に就て書いたものがありますから、それを御目にかけませう。

……今、人の巾著を切、小盜みをするごとき、いやしき者に聖賢の道を敎へんとて、林家の御儒者衆、晝夜手分をして四書五經の講釋したまふ共、急には道に入難かるべし、所を上に聖慮をめぐらされ、六諭衍義の假名物を仰付けられたる成べし、かくまで御仁政の御事なれ共、至て愚なるは六諭衍義のかなを讀辨へぬも有ぞかし、下手談義の最初に芝居の事有、是が兼々愚僧が常に云事也、今江戸中、貴賤男女の師となる物は芝居なり、つくづく見るに武家方にても若い侍衆は、澤村宗十郎や坂東彦三郎が風儀をいきうつしに似せらるゝも有、女中は屋敷方、町人共に瀨川菊之丞が身ぶりをまなび、談義僧は市川海老藏や松本幸四郎が聲色をつかひ、又髮結床、洗湯の出合に、忠臣の孝子の貞女のと云聞取咄しも、芝居より外に出所なし、かくのごとくなれば、下手談義に書たるごとく、芝居にて婬亂不禮の狂言を止て、孝弟忠臣の模樣を面白く作りたらば、林家の御儒者方の手分をして、さとし玉ふよりも其入ること速なるべし。（太平國恩俚談）

これを見ますと、吉宗將軍は何故に「六諭衍義」の和解を出したか、どうして庶民の教化に就て乘出さなければならぬとまで思はれたか、といふことが大略ながらわかるやうに思ひます。それをどういふ風に教化されようとしたか、又どんな時世だから教化を必要とする成行になつたのか、時世を救解することは必要ではあるが、先づその由つて來るところを明かにしなければならぬ。これは決して物數寄や遣樂ではない、もつとさし迫つた事情の下に乘出されたのですから、それには教育を第一にしなければならぬといふことは、吉宗將軍でなくても誰も先づ氣がつくところだらうと思ひます。

當時として教育に氣がつくことになりますと、學問は讀書を根本とする。戰國以來の學問は坊主學問でありまして、その末々になるところのものには寺子屋といふ名前さへ殘つてゐるやうなわけで、庶民教育などといふものは、何れの政府からも手を著けられず、放任されたまゝになつてゐたのです。それを吉宗將軍が、御自分の腹案によつて新に手を著けられようとする。「六諭衍義」の和解ばかりでなしに、あゝいふ假名書の教訓書を拵へられる意味はそこに在るのです。

談義物の第一に出ました「下手談義」これは寶曆二年の刊行であります。前に引きました「太平國恩俚談」の中に、何程林家の御儒者達が骨を折つたところで、小盜みでもする泥坊を急に感化出來るものではない、いくら平假名で書いた教訓書を出されたところが、それを讀む人間はまことに少い、それよりも芝居の方がいゝ、芝居を利用してその感化に當てた方がいゝ、といふことがありましたが、

芝居は無筆の目學問といふやうなことが云ひ出されて、それが又吉宗將軍の御旨意を徹底させる意味の考按であつたのです。

學問といふことになりますと、それを受用する前に必ず議論が先に立つて來る。教化と云へば感孚といふことが無ければならぬ。感孚の無い教化などは、あるべきものでありません。議論の無い學問と同じことで、無いものねだりになつてしまふ。かういふ場合にやたらに宗教にかじりつく人がありますが、宗教には信仰が無ければならぬ、と云つて信仰は手で拵へるわけに行かず、命令したつて出來るものでもありません。

當時の閣老であつた水野和泉守、名を忠之と申されましたが、この人などは大の儒者嫌ひで、あんな理窟ばかり云つてゐるのは困りものだ、と云つて恐しく嫌ひました。尤もこれは水野ばかりの話ぢやない。松平信綱なども、唐の話に屈託するには及ばない、御國には御國の流義があり、御當家には御當家の流義がある、あんな理窟ばかり云ふ儒學によらんでもいゝ、といふことを云つて居る位で、儒學はとかく理窟をこねるものとされて居つた。それはさうでせう、この時分の學問の大筋目を申せば、やはり宋學が代表的なもので、いろ〳〵理窟はこねますけれども、さて實行はと云へば、理窟倒れになることが多いといふ有樣でありました。

吉宗將軍が學問が御好きでなかつたといふのも、この理窟倒れになることが御厭だつたので、儒者

が理窟ばかりこねるのを、廻りくどく面倒に思はれた。それよりももつと實行の出來る事、早く利いて來る藥方を希望されたので、むづかしい理窟をおぼえるよりも、物事の理合を何人にも呑込ませたい。さういふ樣子が見えるからなので、吉宗將軍が學問が御好きでなかつたといふ批評に就ては、よほど考へて見なければならぬと思ひます。

四、諸事中興の時どころか

吉宗將軍は各宗の宗意安心を御尋ねになつたことがあります。これは現在でも上野に、實觀僧正が再往答申した記錄が殘つて居りますが、天台宗だけではありません、本願寺にもあり、高野山や東寺にもある。各宗共にあつた按排ですが、それなら各宗の宗意安心を聞かれて、宗敎によるかといふと、さうでもない。神儒佛の三道に對し、勸善懲惡といふことがすべての働きであり、效用であるといふ風に見て居られる。三敎一致と云つても、勸善懲惡といふところで一致させてゐる。それは又三敎の利益を悉く受用されるところのことで、偶然だつたかも知れませんが、この勸善懲惡といふことは、聖德太子の十七憲法の中に出てゐる言葉なのであります。

成程、勸善懲惡ならば、わかり易くもあり、手近くもある。これなら實行すると云つても、別にかけ離れたことでなくなる。常識的に考へて、不思議とか何とかいふ事に亙らずに、誰にでも直ぐ話が

わかるやうにする。それには儒教を表にするのですが、儒教なるものは五倫五常を押立てゝ說かれたものです。が、もう少し向うへ乘出すと佛教の功用が出て來る。その佛教は專ら三世因果を說いたもので、五倫五常を說くのも三世因果の現れだとする。これは我國に先づ儒教が來て、その次に佛教が來たのですが、その時の天子がこれを御採用になつたといふことも、さういふ意味から御捨てにならず、御採用の上に御採用を御重ねになり、在り來りの神道を併せて三教といふことになつたのです。

佛教を表に御立てにならぬのは、專ら三世因果に搦まれて、來世を願ふやうにばかりなる。君臣、父子は一世限り、本尊樣は未來永劫なもの、といふ風に心得違ひをする者が無いとも限らぬからで、これは勿論誤用ですが、さういふ誤用の掛念があるから、佛教は表に立てられないのです。それから吉宗將軍は孝子とか、忠僕とかいふものを表彰することに骨を折つて居られる。これは勸善懲惡の生きてゐる、丸どとのやつだから、盛に孝子や忠僕の傳記を刊行させました。これを十分表彰されなければ、御自分の思はくを達する機會が無い。「仁風一覽」などといふものが出來てゐますが、これは今日で云へば義捐をして、窮民を救つた人の名を擧げて一冊にしたものです。さういふものを拵へるやうに導かれ、さういふものゝ出來ることをひどく喜ばれた模樣であります。

一方では又、金銀は融通するものだから、天下の寶なのである、若しそれを私藏して置くやうなら天下の寶ぢやない、さういふ風に世人に受取らせるやうに仕向けた。それまではさうではなく、民間

の義捐は全く個人の思ひ〳〵のものであつたのを、今度は打揃つて災害の救濟をするやうにしたのは、享保度からであります。其時分の言葉に、握り屋の金持のことを「持乞食」、資本を運用せずに、大事に貯へてのみゐる者を「金の番人」と云つて居りますが、さういふ風に世情を導くに就ては、吉宗將軍が隨分心配されたものであることは申すまでもありません。

「莘野茗談」などは「享保の頃は諸道の中興といふべし」と云つて居りますが、これは德川八世が賢將軍であるといふのと同じく、たゞ御譽め申上げるだけではいけない。吉宗將軍の新に企畫された事柄は、なか〳〵容易なことではありません。如何にも世の中の切換へ時であつたには相違ないが、その時の世間の樣子はどうかといふと、松崎白圭などは寛文延寶度から元文延享度までの世態に就て、次のやうに書いて居ります。

或ものゝ云、寛永の初より、寛文延寶におよんで、質朴の風殘り、士民業をたのしみしが、元祿の世は君威甚だ盛にありし、正德に及で華麗世にみち、享保の頃より困窮して、元文延享には天變打續きけり、時氣は移りけるものにこそ、國の初の昔より、大名には小性五人十人あらざるはなし、旗本にもやゝありしが、いつとなくやみて、有べきものとも思はず、女色のはびこるゆへにこそ、亦相撲の男、諸家に盛なりしが、これも絶はてぬ、あながちにかのありしをしたふにあらねども、その頃はかゝる類ひのものは、世にみちても、諸國ゆたかにさかへたりしが、今は目

立ふしもなくなりし、さてその困窮はむかしになぞらふべくもなし、弓馬刀槍の技藝など次第に衰へ、商家に諸家の重臣、手を束ね、國の仕置を打任する類ひやゝ多しと聞ゆ。（窓のすさみ）

何れにしても此頃は殊に貨幣の幅をする時であり、しかも世間は困窮の時であります。諸大名、諸旗本も困窮すれば、百姓町人も困窮する。なか〳〵諸道の中興などといふやうな樣子の時ではない。それですから松崎白圭などは、頻りに時世を歎息してゐる。どうしたらいゝか、殆ど思案に困るといふ樣子が見えます。

五　無爲の時節

そこでこの頃の落書を見ますと「無爲賦」といふのがある。元文五年に拵へた落書ですが、それにはかういふことが書いてあるのです。

夫れ物の拘はらざるは物の情なり、天狗の鼻長しと雖も象の鼻には如かず、船饅頭の彩色は比丘尼の素顏に如かず、神道者は高天の原を稱すと雖も柴庵の鉦の音には如かず、儒者は縊頭巾の勿體ありと雖も醫者放シ目貫に如かず、餌差の棹長くして、アレ指いた、誠に鷹の食となる、善い哉〳〵、菖蒲に似たる杜若あり、孔子に似たる陽虎あり、三升あり、希紅あり、柳は綠、花は紅、女郎の裾は長く、客の羽織は短し、長薯蕷あれば束薯蕷あり、吾れ譽れば人毀る、人譽れば吾毀

る、人間萬事此くの如し、智ある者は憂名立つ、愚者も亦た然り、唯だ無爲にして安じ、處々に春は花を弄び、秋は月を見る、可愛の物かな〳〵。（原漢文）

この時代の人は自失してゐる。大井川流れ越しといふ風で、成行きに任せるより外は無いと思つてゐたことは、これによつてよく見られますが、これではとても世道が立ち行くものではない、人心が萎靡するばかりであります。そこで何とか救解の手をつけようとするが、改革とか、刷新とかいふ時ではないやうに見える、何とも始末のつかぬ時であるやうに感ぜられるのです。太宰春臺なども、

當代も元祿以來、海内の士民困窮して、國家の元氣衰へたれば、只今の世は萬事を止めて、偏に無爲を行ふべき時節なり。（經濟錄）

と云つてゐる。春臺が「經濟錄」を書いたのは元文度ですが、この無爲といふことは「君子の道は因循を樂んで改作を重んず」といふ流義で、この時代にはこれが一番多かつたのです。併しその惰力と云ひますか、それに乘じ、情勢に乘じて何とかせずにはゐられない、差迫つた現在の困窮は、手のつけられぬやうな時世ではありましたが、猶且つめい〳〵に策論を書いて、何とかしなければならぬといふ心持を見せてゐる。決して拱手傍觀してゐたわけではありません。

荻生徂徠は「經濟錄」より前に「太平策」を書きまして、その中で「ナマジヒノ事ヲセンヨリ老氏ノ道ヲ行ヒ、文帝ノ治メ、聖人ノ次ナリト知ルベシ」と云つてゐる。やはり無爲より外に仕方が無い

時だといふのです。併しながらそれでも猶大略の機會が無いでもない、四代將軍の治世の末、即ち寛文、延寶の頃、或は五代將軍の初、即ち天和あたりが改革、刷新の機會であつたのだ、併し何分捨てては置けぬところの目下の困窮を救ふ道は、制度の建替へより外に無い、それも亦享保、元文の間に於ては、まだ〳〵爲すべき事があらう、と云つて居ります。

茂卿ガ愚存ニハ嚴廟ノ末、憲廟ノ初ヲヨキ時節ノ至極トス、夫レヨリモハヤ三四十年過テ、世界ノ困窮ヨホドツヨク、高位ノ人ニ愚庸多ケレバ、モハヤナリガタク思ヒ侍ル、然レドモ世界ノ困窮ヲ救フノ道、外ニナク侍ルユエ、右ノ在レ安レ民、在レ知レ人ト云ヘル二句ヲ受用シテ、下タナラシヲシテ見クランニハ、今二十年バカリマデノ間ハナルベキ事ナリ、且近年瞑眩ノ大藥ヲ用ラル、コレハ或儒者ノ工夫ヨリ出デ、物價貴キユエ上下困窮ス、物少ケレバ貴ク、多ケレバ賤シク、金多キユエ金賤クナリテ物貴シト見テ、金ヲ半ニスル術ヲ建立シタルト承リ候、一手段アリテ面白キ術ノヤウナリ、サレドモ聖人ノ大道ヲ知ラザルユエ、物價ノ貴クナリタル根源ヲ知ラズ、其根源ヲ治セズシテ、中途ヨリ無體ニ金ヲ半ニシタルユエ、其後ノ序ヲ失ヒ、瞑眩ノホドハカリガタシ、藥アタリノホドヲトクト見スエズシテハ療治ヲ施シガタシ、只今ナドナラバ先ヅ新古並ベ行ヒテ、引替ヲ停止シ、根本ヨリ治スベシ、今四五年モ過クランニハ、世界カタツリニナリテ騎虎ノ勢ニナルユエ、仕遂ゲズシテハカナハヌナリ、サテ其上ニ藥アタリノホドヲ了簡シテ治法ヲ

施スベキコトト思ヒ待ル也、トカク制度ヲ立替ルト云フハ、至極ノ大儀ナル故、深遠ニ思慮ヲ廻ラシテ卒爾ニハ行ハヌナリ、又コレヲ行フニ至リテハ、ソロ〳〵タネン心ヲ用ヰテ二三十年ノ間ニハ是非トモ行ヒ遂ゲデハ却リテカナハヌコト也。(太平策)

徂徠の「太平策」にしても「政談」にしても、皆吉宗將軍の仰せを受けて差出したもので、當時としては根本的でありませんでも、一番行ひ易かりさうな事を申上げたのです。文中に「瞑眩ノ大藥」とありますのは、元祿度に悪質に改鑄して通貨を膨脹させ、享保の新金で俄に收縮させた、その膨脹も急激なら、收縮も急激であつて、その爲に世の中が愈々むづかしくなつたことを指すのです。「或儒者」といふのは新井白石のことで、徂徠は現在の困窮の根ツ子は貨幣政策に在ると見てゐる。新しい貨幣も古い貨幣も一切卽ちいゝ貨幣も悪い貨幣も、これを廢してしまはずに、共に興に使つて行く。貨幣を縮めないやうにして使つて行くのがよろしい。かういふことを第一番になさるやうに、と云つて居ります。これが行はれて、遂には文字金銀と申すものが出て來たのです。

六、貨幣改鑄による世の中の變化

この時の通貨の事を申しますと、元字金銀の出ましたのが元祿八年で、乾字金銀の出ましたのが寶永七年、その次の新金が正德四年に出て、文字金銀といふのが元文元年に出た。前後四十二年ほどに

なりますが、この間に四遍改鑄が行はれてゐるわけです。四度目に改鑄された文字金銀は、草文金銀と云ひまして、文政二年まで續きました。隨分長く用ゐられた貨幣ですが、この文字金の出て來ることを思ふと、徂徠の云つたことが大分役に立つてゐるかに見えます。

享保の改革を譽める者は、吉宗のことを名將軍と云つて感心する。儉約政治ばかりを押へて、何も彼も手順よく進んだものゝやうに考へる。この間の世の中の樣子がどうあつたか、それにどういふ風に對處して行つたか、といふことは一向に顧みられぬやうな次第であります。別けても世間で氣をつけて居らぬ庶民教育の釐正、江戸教育——近世教育の體制がこゝではじめて出來上つたといふやうなことは、殆ど知られて居りません。幕府がはじまつて以來、百二十餘年たつて、この大企畫が行はれたのですが、それは吉宗將軍が痛切に、その必要を感ぜられて、さういふことになつたのです。

太宰春臺は、御當家の末は盜賊の亂世になるであらう、といふ豫言をして居りますが、吉宗將軍はそれほどに思はれたかどうかわからぬとしても、とにかく目前の有樣に感動されたことは、疑ふ餘地もありません。この享保の時世に就て御話をする時に、私はよく「我衣」の中の一段を引證するのですが、これはその結末の文句が簡明に時世を云ひ取つてゐるからであります。

寶永前までは諸色高直に賣るも、買人さのみぬかれたりとも思はず、用の辨ずるを喜び、高直に買ながら却て下直なりと思へり、是は公儀の御金、下へ多くさがり、武家町人百姓ともに金銀多

き事なれば、出れば又入、出入間もなく金銀の手廻るゆへなり、享保三年御公儀御倹約嚴しく仰下され、之に依て自然と公儀へ御金、納つて出ず、下に自然と金銀逼迫して、皆商ひも薄く、年々せまり、次第々々に金をへらし、一年々々と見合す内、元手もなくなり、さて倹約すれども及ばず、これによつて買ふべきものも調へずして、間に合せる時代なり。（我衣）

この天和、貞享の町人の心持と、享保以來の町人の心持とを比較したところなどは、實に面白いと思ひます。それほどまでに、人心が著しい變化を致して居つたといふことは、頗る考ふべきことでありまして、享保度が不景氣であつたといふことは、倹約政治の效能が現れたに外ならぬのです。大抵なものに書いてあるのは、倹約政治の甘い方の效能が現れたことだけ述べたものが多いので、そのうちで最も强く、最も覿面に苦い方の效能を見せたのが貨幣政策なのですが、それに言ひ及したものは全く無いとも申されませんけれども、言ひ及したものゝ乏しいのは、甚だ遺憾であると云はなければなりません。たゞ不景氣を歎じたものはいくらもあるが、もう少し蹈込んで何か云ひさうなものだと思ふのに、一向云つたものが無いのです。

「太平國恩俚談」の中に、元祿の通貨膨脹に出會つて萬兩分限になつた米屋が、享保になるまでにすツてんてんになつて、裏店（うらだな）住ひに落込んだ者の話が書いてあります。その中の何箇所かを、手短に撮み出して見ませう。

元の字金銀の吹替より米穀の俄上りに千兩程してやる。

通貨膨脹の物價に及んだ形勢、一夜分限の馬鹿儲け、謂はゆる成金です。

乾金通用になり日々米の大上り、元祿以來、六斗前後を中分としたる相庭、上る程に〳〵尾張米二斗八升、御くら米百廿六兩といふ事になりぬ。

天井相場の出現によつて、彌ゝ成金が景氣立つ、さて其反動、

寶永正德の間、九年に十一度の類燒、町並何れの店も元の主の持傳へたるは一軒もなし、此男も隨分ひちをはつて見たれども、ほうど行つき、小屋がけも漸く葭簀圍にて、思按最中に町中土藏造りに致すべしとの仰出され、地主も近年の火事損にて普請成難し、土藏造りなり離き店衆は、早早立候へとの事、左なくとも迚も爰には居難き仕合なれば、少々の殘り物賣拂ひ、取集め百四十兩有しを持て、麹町七丁目に三間口をかり、仕付たる商賣なれば呑米店を出しけるに、新店なれどもなか〳〵よく賣れ、此體ならば先口過はなるべしと悅びしに、享保年中になりて乾金御ふきかへ、慶長金のくらゐになりしかば、米穀俄に大下り、地廻り米二石四斗の賣買、御くら米十八兩になりて、武家方の御難儀、商人の困窮、前代未聞なり、米屋の利潤、乾金の時、一升もふけても二匁餘にあたりしに、此節一升もふけて二分五厘になりければ、此男が何程汗水ながしてはたらいても水も呑れぬ仕合。

かういふ體裁ですから、裏屋に追込まれた者も少くありません。「我衣」にあるやうに、間に合せる時代でもない。なか〳〵間に合はぬ時代になつて來たのです。

七、目につく金持の新陳代謝

殊に享保になつて火事が多くなつたことは、隨分甚しい話でありまして、これは寶永、正德よりも享保の方がぐんと殖えて居ります。享保度は放火犯人の最も多かつた時代ですが、それは米價の亂高下があり、凶年の爲もありますが、通貨政策との關係が最も覿面でありました。それが爲に元文元年には、御定値段といふやうなことをして、米價制限を致しましたが、それも遂に失敗に了り、米價の釣合といふものは、元文の文字金銀が出て漸く落著いたのです。幕府はそれまで大いに苦しんで、いろ〳〵の政策を立てましたが、いづれも效を奏せなかつた。

一體元祿の改鑄といふものは、幕府の財政の爲にしたとのみも云はれぬ、他の事情があつたことゝ思はれます。しかし海外への影響よりも、國內の影響が恐しい有樣であつたのです。慶長金の一兩を元字金にすると二兩になる。德川一世の立てた金四匁に對する銀六十匁といふ均衡は、この時破れてしまつたので、物價が倍になるのは當り前なのです。この事に就て書いたものが無いでもありませんが、一番手短でわかりいゝのは、例の淺野、吉良の喧嘩でせう。

あの噴嚏の根本はどういふことかと云ひますと、京都から下られた勅使の饗應役をつとめるのに、天和三年に赤穂侯が初めて勤めた時は四百兩で濟んだ。それが元祿十年に伊東出雲守がつとめた時は千二百兩かゝつてゐる。そこで元祿十四年に赤穂侯が二度目につとめる時は、中を取つて七百兩で濟せばいゝといふことでありました。併し一兩の小判を二兩に使ふ時世ですから、天和の四百兩はこの時八百兩でなければならぬ。こゝのところの差があつた爲に、いろ〳〵な事が間違つて來て、前の通りにしなければいかん、舊例の通りにやつて貰ひたい、といふ吉良の主張と矛盾を來したのだ、と小宮山南梁翁は云つて居られますが、此等の話が元祿以後の貨幣價値を說明するのに、一番いゝ例だらうと思ひます。今まで一兩で暮してゐた家が、今度は二兩がけて前の通りやつて行かなければならぬのです。

通貨が膨脹致しますと、どうしても通貨に片寄りを生ずる。持つてゐる方へ片寄るので、貧富の懸隔が際立つて强くなつて參ります。元字金を引詰めようとした乾字金の出た寶永、正德の際には、成金が皆凋落しまして、商家に分散する者が多いといふ、ひどい有樣になつて來ました。その有樣を趣向にした浮世草子が、いくつも出て居ります。又さういふガラの時代には、吝嗇であると云はれるほどに、つましくして行かなければ駄目なので、儉約方法といふべきものが浮世草子の新趣向になつて居ります。この貨幣の膨脹、收縮の際に、十軒あつた金持は七軒になる。七軒あつたのは五軒、五軒

あつたのは三軒といふ風に、金持は新陳代謝しながら、その數が減つて來る。その代り數の少い金持は潰れた家の分まで併せて參りますから、だん〳〵大きなものが殘ることになるのです。

通貨膨脹以前は、穀が貴くて物が賤しかつたのが、穀物が賤しくて諸色高となつて來ました。從來のやうに穀と物との釣合が取れなくなりました。これは貨幣が物價の尺度にならなくなつたので、この際に於て京の富豪は殆ど潰れてしまつた。京の富豪は享保までのものと見ていゝのです。そこで今度は逆に物が金の尺度になる有樣で、物を持つてゐても安心が出來ない、殊に貨幣價値が激減しては、從來よりも餘計に金を持つてゐなければならなくなり、蓄積を多くするために、爲さゞるところ無きに至るのは當然の話で、町人どもには限りません、武門の金看板でありました「不義は御家の御法度」などといふ言葉も、片付けなければならぬ事になつた。綱吉將軍が殺生が御嫌ひだつたから、不義の成敗を御止めになつた、といふことだけが原因をなしてゐるわけではないのです。

富豪の新陳代謝と相俟つて、上方名物の心中の流行があります。あれは急に不景氣になつた時に出て來る現象でありまして、それが上方に蔓へた時分に江戸へ來た。江戸の世の中が上方と同じやうになつて、士達の方にもなか〳〵手嚴しく利いて來たのであります。

八、學校を以て世法を直す

諸色高直といふことは、一概に奢りの爲とのみ解するわけにも行きません。物資の豐贍であつた癖がついてゐますから、如何なる場合でも引緊つた暮し向はしにくい。そこで生活費がだん〳〵多くなりますし、物資の豐だつた時としては、粗製品の供給よりも精製品の供給が多くなる。受用する方から云つてもさうなる便宜があつて、そこのところは便宜を以て便宜に墮すといふ言葉の通りだと思ひます。そこから考へると、物と金とが衝突してゐるやうに見える。大體が不景氣なのですから、商ひは薄い。買手の方から申しても、貨幣が安いから購買力が鈍つて來る。享保度になりますと、薄利多賣で生産を澤山にして、どん〳〵安く賣らうとするけれども、肝腎の品物が捌けない。晝夜稼いで見ても、已に多くなつてゐる生活費を何ともすることが出來ない。さういふところから惱みに惱むので、享保度の困窮は容易なものでなくなつてゐたのです。

何れにしましても、さういふ場合に學問といふことを思出すのは、一向珍しくない話でありまして、この時に先立つて水戸の儒者の森儼塾は、悪貨の壓に行はれる寶永年間に「護法資治論」を著して居ります。それは學校を以て世法を直して行かぬ以上、僧侶をよくすることも出來ないし、教化の役に立てることも出來ない、といふ説であります。

夫レ世法、教ヲ失フトキハ則チ佛法亦偏邪ニ從フ、是ニ於テ儒佛各異端ノ弊ヲ免レズ、今釋教ヲ正サントト欲セバ、須ラク先ヅ世法ヲ正スベシ、世法ヲ正サントト欲セバ、應ニ學校ノ設クベシ、人

人ヲシテ其知識ヲ明ニシテ、偏愚ニ陷ルナカラシメン、凡ソ邪法邪說、亂臣賊子、偏愚ヨリ起ラズト云フコトナシ、夫レ偏愚ノ本ハ學ヲ講ゼザルニ在リ、而シテ道理ヲ知ラズ、是非ヲ辨ゼズ、是ノ故ニ學校ヲ設成スルハ國政ノ第一ノミ。（護法資治論）

この森儼塾の說は、享保度の世の中に於ても參考とすべきものでなく、昭和の今日に於ても考ふべきものでございませう。或は享保度よりも、寧ろ現代人の猛省すべき事柄ではないかと存じます。學校の敎化で世法を正しくして行くことをしない、又それが出來ないといふことでは、佛敎には限りません、如何なる宗敎に依賴しても駄目です。然るに學校による敎化を措いて、その補充といふか、代用といふか、さういふ方面に宗敎を使はうとする人が少くない。これは昔を今に引かけた、面白い間違ひであります。

さういふ議論がある時に、吉宗將軍は何を考へたか、これは學校の敎化によつて世法を正さなければならぬ、五倫五常といふものをしつかり覺えさせ、十分に受用させなければならぬと思はれたが、當時は學校の設備も無く、庶民の敎育は全く放任されて居つたのです。時世を見かけて大急ぎで手を著けようとするのに、その設備さへ無かつた。吉宗將軍はこの時にやはり學校によらなければならぬと思ひつかれたので、その樣子は「兼山祕策」によつて手短に眺めることが出來ます。吉宗將軍及び室鳩巢その他の儒者の意見は、大體これに傳はつてゐるのです。

……小柳町に九歳に成申候竹松と申小兒、父盲目に成申を靑菜など賣候て、毎日二三十錢程を得て、小米を買、粥にいたし父を養申候、其身は去年以來、豆腐の糟を給居申候、其段上達候て、先日町奉行所へ召され、銀子など下され、町の者に仰渡され養育候樣にとの儀に御座候、九歳とは申候得共、七歳計に見へ申由、是等も前代未聞の孝子と存じ奉り候、飯田町の名主江塚五郎兵衞と申者、町人にて學文好み、人品實體にて、其邊にても人々譽申者にて候、先日町奉行所に召され、是も御褒美にて御座候、箇樣の者も出來候へども、又侍には盗賊これ有り候、此日も追はぎなど致し候由、承り申候、何とぞ上の御德化あまねく下へ及候て、風俗改り候へかしと存じ奉り候。

この困窮の世界の中、苦しみの底にもがいてゐる時、しかも民間に親孝行な者や、結構な人物が居つた、然るに武士の中には泥坊を働く者さへあつた、といふことが御耳に入つた趣が、享保六年十二月の鳩巢の手紙の中に書いてあります。庶民教育の考慮に先立つて、然も士のふしだらが吉宗の將軍の御耳に入つては、尙更教化を急がなければならぬ、といふ御心持になられたらうと思ひます。

九、衣食足つて禮節を知る

それに續いて又鳩巢を御召しになつて、直に意見を御聞取りになつたことが書いてある。これはそ

の翌年度の書面であります。

上意（吉宗將軍の）には左様に急度手をつき罷在候ては中々成間敷候、手もあげ候て申上げべく候、總て其方共の類、存寄御尋ね遊ばされて候ても、何も御尤〳〵と計申上罷在候に付、何とも御相手に成られ難く候、其方（鳩巣）事は存寄殘らず申上候に付、御心得にも成候、夫故切々御前へも召させられ候旨御意に付、兎角申上げべく様も御座なく、有り難き上意、冥加に相叶申旨御請け申上候處、此間誰相識共申候は、旗本中風俗惡敷罷成候間、是は學校建立いたし、急度教を立候はゞ、宜しかるべき旨頻に申候、此儀は如何存候哉と（將軍）御尋に付、（鳩巣の答）憚りながら學校の儀は御無用に遊さるべく候、聖人の御言葉は萬世の手本にて、如何様の時節にも合はさる事は御座なく候、指當り論語に民は富し候て扨教ると御座候、教は風俗を改申事に御座候、且又齊の桓公は周末の覇王に御座候、桓公の宰相に管仲と申人は、政務に事の外長練仕候て、御當家にて土井大炊頭、松平伊豆守抔の様に、千歳の後迄も手本に仕程の者に御座候、此管仲も衣食足て禮讓を知るなど申候、人世の大本は衣食の二ツに御座候、近年御旗本中、衣食に足り申さず候故、教の所へは參り候儀にて御座なく候、然處今の時、學校等の御沙汰御座候て二圓心服は仕らず候、却てあざみ笑ひ申すべく候、恆の產これなきに恆の心あるは士の事と孟子に御座候へ共、只今の士、中々行儀にてもこれなく候、（こゝまで鳩巣の言葉）學校の儀は物識共すゝめ候故、

是も捨て難く、其方へ尋候事にて、申通の趣に候へば、入らざるもの（將軍の言葉）と上意に付、畢竟結構なる思召よりに御座候間、二三年も過ぎ、何卒其時節到來の儀も御座あるべくと存じ奉り候旨御請け申上候。

此學校の儀は、定て林大學頭か木下平三郎より申上たる物にてこれ有るべく候（鳩巣の推量）

近時迂濶の至極、出家の吾宗旨を崇敬の脇ひら見ずに、寺院建立の心と同斷とて御咲（將軍が）成され候。

時勢を見て直に文教の興隆を思ひつかれ、德化を布かうとする。御尤もの次第ではあるが、その前にもう一ツなさらなければならぬことがある、と鳩巣は御答へ申して居ります。卽ち學校を興隆される前に、何とかして困窮を救はなければならぬ、腹ぺこではどうにもなりません、といふことを、學校興隆に關する諮問に對して答へてゐるのであります。この中に管子の言葉を引いて、人といふものは衣食を缺くと爲さざること無きに至る、といふことを主張してゐる。管子は齊の桓公をして覇業を成さしめた人で、「衣食足つて禮節を知る」といふのは、誰もおぼえてゐる有名な言葉です。これに反して人間は禮義、廉恥を後廻しにすべきものでない、といふのが儒者の說で、衣食を先にして行くとすれば鳥獸と異らぬ、生存第一とすることはいけません、といふのが儒者の方の納りどころになつて居ります。

さうはいふものゝ凍餓の問題はゆるがせにすることは出來ません。「麿は死しても穂を啄ず、武士は喰はねど高楊枝」などといふのは延寶頃までの話で、享保にはもう昔のものになつてゐる。この時分には武士の身の上にも名節などは見ることの出來ない時世でありました。そこで又吉宗將軍から再往の御諮問がありまして、鳩巣はそれに對する御答へをして居ります。

昨日（享保七年七月六日）御登城（鳩巣）の處、取次を以て御尋成され候は、御旗本中、年少の者など、弓馬の儀は申に及ばざる事に候、學問も深き事これなく候とも、小學四書は素讀も仕得申程に心懸候樣に遊ばされ度候、馬など差當り自分の用に立ち申程乘候へば能く候、只今迄の樣子、其處迄も參らず候、唐にて士の及第など仕候法、委細御聞遊ばされ度候、相考へ申上べくの旨にて、委細長り奉る、考合せ追て申上べく候、指當り存寄り候は、學問の道は畢竟上より行はれず候ては、下々發起申べき樣御座なく候、只今御學問御數寄候樣に御座候へども、御眞實に御勤遊ばされ候御樣子は相見申さず候、上、箇樣の體にて下々感發仕るものにては無御座候。

これは別に深い學問を旗本達にさせようといふのではない、一通りものがわかるやうにして遣したいのだ、といふことを云はれたのです。實に旗本等に物の道理を心得させたいと思はれて、林家の昌平坂の講舍と高倉屋敷とで、儒者等に講釋をさせて、貴賤の來聽を許されたのに、一向人が集らない、吉宗將軍が切に此等の諮問を度々されたのは、先づ手近い武士の向學計劃が不成績であつたからでも

ありませう。

一〇、驚歎すべき學問の進歩

この時分の武士の學問は、旗本などでも氣の毒千萬なもので「小學」や「四書」の素讀も出來なかつたらしい。さう云つても、今日の人にはどの程度かわからぬかも知れませんが、享保七年から百三年後の天保三年に佐藤一齋の書きました「初學課業次第」を見ますと、大凡どんなものであつたかといふことがわかります。

素讀

○小學　○四書　○五經

句讀ノ次第、斯ノ如クナルベケレドモ、總テ童蒙ノ記憶シ易キ四書ヨリ始メ、五經カ小學ニ移ルカタ便ナレバ、必シモ次第ニ拘ラズ、授クベシ

句讀ハ多ク貪ルニアラズ、唯覆讀ヨリ力ヲ得ルモノナレバ、兎角習讀シテ暗誦スル程ニ至ルベシ、然ラザレバ五經終ルトモ、獨看出來ガタキナリ

春秋ハ授ケザルモ可ナリ、四書ノ唔咿ト、ノフ程ナレバ、春秋ハ自ラ讀マルヽナリ、或ハ左氏傳ニテ授ルモヨシ

外ニ唐詩正聲、汝陽三體詩、文章軌範正編ナドヲ旁ラ授ケテ、諷誦サスレバ、年長ジテ文章ノ一助タルコト之ニ過グベカラズ

「小學」や「四書」等の素讀が濟みますと、今度は四書の講釋を聞くのが當然の順序ですが、素讀といふのは讀むだけで、文義に渉つてどういふ意味合ひのものかといふ研究をするわけではない。その讀むといふだけのことですら、この時分の旗本にはむづかしかつた。讀むことが出來ない位ですから、文義などの話は出來るわけが無い。天保年間から振返つて見ると、其處は大變な相違であります。

それが寶曆になりますと「兒訓唐詩選」とか「童用三體詩」とかいふものが續々刊行され、假名もついてゐれば繪入にもなつてゐる、講釋付の獨案内ともいふべきものですが、それが果して子供達に讀ませる爲のみのものであつたか、或は大人用をも兼ねてゐたかも知れません。若し寶曆の大人が學問を心がけて、兒訓童用本で習ふとしても、享保の旗本に比べれば大變な進歩です。二十餘年間にそれだけ進んだのは、非常な開け方と云はなければなりません。「唐詩正聲」とか「汝陽三體詩」とかいふものはどういふ位置に在るか、「初學課業次第」に書いてある通り、それを子供にも課したものであるとしたならば、實に天保度の學問の開け方は驚を入つたものでありますが、その時代は人情本の盛に行はれる時だつたのです。

そこで又考へて見なければならぬのは、鳩巣が上から率先して學問を好むのでなければならぬ、教

化はどこまでも感孚を以てのみ行はれる、感孚のない教化はございません、と申上げてゐる事です。とにもかくにも寛政までの間、世情に拘らず、士は四民の儀表として、恒産無くとも恒心無かるべからず、といふところまで押切つて參つたといふことは、吉宗將軍の思召をひろめて行つたものと見なければなりませんが、幕末は學問の開けた割に、教化が行はれてゐない。これは最初に時世を救解する爲に學問を勸める力が多く、感孚によつて教化の行はれる力が少かつた爲ではないかと思ふ。それだから世道人心の上に、頗る面白からぬことが出て來るので、この處は迂遠なやうでも鳩巣の感孚論——一體にこの人の說は迂遠なところがあるのですが——を大いに玩味して見る必要があるのです。

これは吉宗以來歷代の將軍も、その時々の閣老も、それ以下の吏僚も、そこの用心を缺いて居つた。そこで學問は知識となり、受用如何を問ふこと無く、學者は物しりになつてしまひましたから、知識はひろまるけれども、教化が無いのであります。

一一、鳩巣の感孚論

それから吉宗將軍は命令を以て學事を奬勵しようとしたかに見える。それにも鳩巣は反對して居りますが、さういふところは大分考へ方が違つてゐたやうです。さすがに賢將軍で、聽くべきことを聽かないではありませんが、その事に就ても鳩巣は次のやうに書いて居ります。

學文と申物は自分に心懸申さず候ては、御威勢を以てしひて致させ候ては、何の益もこれなき事に御座候故、急度仰渡され候事は、御同心にこれなく、たゞあなたより自然にすゝみ候樣になされ度思召候の由、先日御近習の衆を以て仰聞られ候、是も御尤の儀に存じ奉り候、去れ共唯今の風俗にては、彼が方より自然と學問心懸け申樣には罷り成り難く候、少し仰渡の筋これなく候ては、如何と存じ奉り候旨、私共より重て申上候、如何御料簡遊ばされ候哉、其後量り難く候。（浚新祕策）

吉宗將軍は更にその邊を熟考なされ、命令でなしに自然と好學の風を起さう、といふ思はくになつたのですが、鳩巣は感孚論を執つて動かない。鳩巣は又、學問は强制なさることはいけないが、默つてゐて用の足りることでもない、學問奬勵の聲は御かけにならなければいけません、と申して居ります。さういふところから「六論衍義」の和解や大意が出ることになるので、强制しないでも四民の心が學問に向ひ、事理を辨へ、知識した事は履踐するやうにしたいといふ爲に、將軍はいろ〳〵苦心されました。勿論この時代の學問と云へば儒學で、それには又派別があります。徂徠派もあれば仁齋派もあり、闇齋派もある。林家の流儀もあり、王陽明を奉じる者もあつて、それ〴〵一派をなしてゐる。併し吉宗將軍はさういふことには貪着されず、一概に彝倫道德の學問と見て居られます。鳩巣は、學も下にはやり申樣に遊ばされ度思召され候體に存じ奉り候へ共、これ以て御自分に御好み遊ば

され候御様子はいまだ承り及び申さず候。（浚新祕策）

などと云つて居りますけれども、とにかく學問は勸善懲惡の作用があり、人は人たるの歩みをすべきものと見て、そこに誘導しようとなされたものゝやうに思はれます。

一二、薩州侯獻上の六諭衍義

「有德院實紀」の中に室鳩巢の「明君家訓」を吉宗將軍が見られたことが書いてあります。

室新助直清いまだ處士にてありし頃、武家の教ともなるべきことゞも、國字もてかきつらね、明君家訓と名づけたる書あり、（はじめ楠諸士教と題すといふ）直清、京にありしほど、書肆こふて梓にのぼせて世に行ひしかど、此書もとよりものゝふのいましめにて、今の世みやびをこのむ人人のもてあそびぐさとすべきものにもあらざれば、誰みはやすこともなく、十餘年をへて、享保六年の春の比、代官小宮山友右衛門昌言が子木工之進昌世、ちなみある近習の人に其書を贈りしかば、其人ふと宿直の日もて參りしを聞しめして、とりて御覽ぜられ、諸士の心得べき事どもを、よくも聞えやすくかきのせたり、汝等常にこれをよまば、もの學ぶたよりともなるべきものぞと仰られしかば、近習の人々をしなべて募り求めけるほどに、忽世に普くもてはやされしかば、府内の書肆ども相はかり、直清が序をこひて卷端に冠らしめ、ふたゝびこれを刻するにいたれり、

やがてまた御覽あるべきよし、近習の人より直清につたへて淨書せしむ、この書今なを奥の御文庫にあり。（有德院實紀附錄）

思ひもよらず假名書の教訓本を見られたわけで、それが面白いといふことになつた。成程、緣は異なもので、春臺門下の小宮山昌世の手から出た本で、鳩巢の書いたものを御覽になるやうになつたのです。併し吉宗將軍と假名書の書物との因緣は大分古いので、まだ紀州に居られた時分に、高瀨學山や榊原篁洲に命じて「論語抄」、「孟子抄」などといふ、國字解みたいなものを拵へさせておいでになる。さういふことも考へ合せられて、かういふ讀み易い本をあてがつたならば、自然と皆が學問の方に進むやうになりはせぬか、學問をしてものがわかるやうになれば、惡い事もしないやうになるだらう、その學問に向はせる、今日の言葉なら知識欲を刺激するとでも云ひますか、それには假名書の書物がいゝといふことに氣づかれて、おゝさうであつたと、本當に膝でもたゝかれるやうな按排が見えて居ります。

丁度そこへ持つて來て、薩州侯と琉球の話をなされた時分に「六諭衍義」の話が出ました。

其頃松平薩摩守吉貴に琉球國の政治文學のさまざまも御尋ありしかば、薩摩守より彼國の風俗ども聞えあぐるとて、程順則が著したる六諭衍義を獻じたり、其書、初學のものにたよりあるべしとて、室新助直清に譯せしめらる、しかるに多くかの國の俗語にて書しものなれば、かの國の俗語

をよく解したるものに命じ給はんにはしかじと答へたてまつる、是によりて荻生惣右衛門茂卿こそしかるべけれどて、やがてかれに命ぜられけるに、日ならずして譯したてまつる、後直清、御前に候せしに、この書出してしめしたまひ、世の風敎のたすけともなるべければ、國字に解すべしとの御事なり、直清うけたまはりて家に歸り、和解三冊につゞりて進覽す、其體裁はのこる所なく、感じ思召すといへども、かくては詳かなるに過て、わらべなどには辨へがたかるべし、今少しさとしやすきやうにあらたむべしと仰あり、重ねてこれを刪りかれを改め、二冊となして御覽に備ふ、これにて文意もはやく聞え、御旨にもかなひたれとて、市井の塾師石川勘助某をして、これをかゝしめられ、直清に序跋を加ふべしと仰あり、やがて其詞をつくり、御前にもち出てよみけるに、かたじけなくも御筆を添給ひ、遂に町奉行に下し梓行せらる、さて勘助をば大岡越前守忠相の廳にめして褒銀など下されける、かくて府下のわらはべに手習さする事をすゞはひとするものゝ數を尋ねられしに、八百人にあまれり、其中に名の聞えたるは、勘助をはじめ十人ばかりなりしを、いづれも町奉行廳によびて、新刻六諭和解各一冊をあたへける、これかの塾師等が無益の事かきて、わらはべにさづけんより、これらのことかきてならはせなば、童敎のたよりともなるべしとの御旨とぞ聞えける。（有德院實紀附錄）

「六諭衍義」が大變御氣に入つて、薩州侯から原本を獻上させたのですが、それを假名書に改める時

分に、原本が俗語を澤山使つてゐるところから、支那の俗語に通じてゐる者に和解させた方がいゝといふことになりまして、荻生徂徠がその命を受けた。徂徠に申付たのが享保六年九月十五日で、同じ月の二十二日には、もう上木の命令が出て居ります。恰もこれは「明君家訓」を御覽になつた前後の話でありました。

三、主眼は實驗實效

「六諭衍義」は清朝の康熙帝の教育勅語ともいふべきものでありますが、范鉉といふ儒者が、その六項目を俗語で敷衍した。卽ち孝順父母、尊敬長上、和睦鄉里、教訓子孫、各案生理、毋作非爲、かういふ條文なのであります。これが普通の彝倫道德を說いた物でありますと、この簡條書に就て忠僕、孝子、貞婦等の例話を擧げて置くところですが、「六諭衍義」はさうでなしに、一々法律が摘載してある、これが又吉宗將軍の心持に大變叶つたのです。

一體この將軍は法律に心を寄せて居られて、支那、日本の法律を調べて居られた。德川家になつてから代々の法令を類聚して、江戸ではじめて法典編纂の業を興したのも、この吉宗將軍なのですが、その法典を編纂させる最初に當つて、六諭の六項目の順に編纂せよ、といふことを命じて居られます。寬保になつて出來上つたものを見ますと、さういふ風にはなつて居りませんが、元文律などには吉宗

將軍の最初に命じた時の姿、六ツに分けるといふ面影が窺はれる。殊に元文律を漢譯して「和律」といふ名で殘つてゐるものを見れば、最もよくそれがわかるのです。

さういふ法典の草按は「法律類寄」といふ名で今も殘つて居りますし、德川家代々の法度を集めた「法度書」といふ十五冊物も傳はつて居ります。吉宗將軍は法律を公表して、いゝ事、惡い事がどういふものかといふことを、皆に呑込ませたらいゝ、といふ御考へだつたらしいのですが、それは實際に行はれなかつた。吉宗將軍の心持から云ひますと、道理だけで世道人心を維持することはむづかしい、どうしても信賞必罰といふことで、勸めもすれば懲しもする、所謂罰利生で行かなければ、とても行はれるものでない、といふことを深く思つて居られる。それも尤もな話で、力を以て天下を制した幕府としては、さうなるのに不思議は無い。儒者達の理想とする王道蕩々といふやうなわけに行かぬのは當り前の話なのです。云ふことを聞かぬ子供には拳骨、おとなしい子供には御褒美、といふ風に、賞罰を以て人心を導いて行かうとする。恩威並び行はれるとでも云ひますか、そこをきび〳〵とやるのがいゝやうに思つて居られたらしい。

この事に就ては徂徠の云つてゐることがありますが、賞罰には彝倫道德による賞罰と、法律制度による賞罰とがある。實驗實效といふ方にばかり吉宗將軍の目が光りますから、この二ツの何方に傾くかといふことは、直ぐわかるわけです。その最も近い例としては、たゞ話をして聞かせれば、喜んで

聞きに來さうなものだが、林家の講釋や高倉屋敷の講釋は、誰が聞きに來ても差支へ無いことになつてゐるに拘らず、どうも聞きに來手が少い。ところが吉宗將軍が狩に出かけられた時、田舍の寺子屋で御鷹場法度を手本にして與へてゐる手習師匠があつた。

其年（享保六年）十月廿八日千住驛の邊の御狩に、嶋根村といふ所に吉田順庵といへる村醫あり、そが家に童子どもあつまり、手習してゐたりしが、わたらせ給ふと聞て、みなにはかげにかくれ、手習の草紙机など引ちらして有しかば、何を手本にかきてあたゆるにやとて、御覽じければ御鷹場法度なり、公法を童にしらしむる事、奇特なる事なり、村々へもよく申聞せよと仰ありき、次の日伊奈半左衞門忠逵を召て、彼順庵に白銀十枚を賜はり、さて六諭衍義大意一部を下され、この後は村の子どもにこれをかきてあたへよと仰下されしとなり、其書の帙、表紙までもうるはしくなして賜はりしとぞ。（有德院實紀附錄）

「六諭衍義」の和解をして世の中に公布させようとする吉宗將軍の心持としては、手習師匠が法度書を書いて、子供の手本に與へてゐたといふことは、全く思ふ壺ですから、これは大喜びだつたに相違ありません。それですから、この話は「德川實紀」の本文にも附錄にも書いてあるのですが、更にこの事のありました月、即ち享保六年十月に代官地頭に對して觸を出させてあります。

この月代官地頭の輩へ令せらるゝは、前の年令せられし條約よく欽順すべき旨、あらかじめ農民

に曉諭せるよしなれど、下民は一度曉諭せしのみにて、委しくさとさざれば、その旨記憶するものまれなるにより、法律にそむき、罪科に處せらるゝもの多く、剰へ身の過失をもしらざるものあり、よつて僻遠の地にも筆道の師などあるべきより、僧俗巫祝をかぎらず、その師たるものよく曉諭し、講習のひま〳〵をもたしき令條をはじめ、五人組帳又は教導の便ともなるべき事をば摸本にかゝせ、あるひは誦讀せしめばしかるべし、近き比、郡代伊奈半左衛門忠達が所治、武藏足立郡淵江領嶋根村の醫順庵といひしものを褒賜せられたるにて、盛慮にも應じたる事は推して知るべし、各考へ其地の風習に應じはからふべしとなり。

よほどこれが御氣に入つたらしいのです。

一四、歌は手に合はぬ鳩巣

殊に嶋根村で外の法度を習はせずに、御鷹場の法度を習はせたといふこと——千住の近所は八筋の御鷹場の内でありましたから、そこの村民に御鷹場の法度を習はせる。これは土地柄から云つて、知つて居らなければならぬ法律です。まことに氣の利いた遣り方であるから、この意味を推し廣めて、その土地々々の寺子屋でやらせたい。それには五人組帳に前書といふものがある。さういふものを手本にさせて、御條目に何とある、書物に何とあるといふ風に、一々受用するところを適切にして、迂

潤に讀んだり習つたりさせぬやうにする。論語讀みの論語知らずが出來ないやうな教育をさせたい。從來は寺子屋といふ名を見てもわかるやうに、教育事項の如きは主に坊主がやつてゐたので、坊主の思想を中心とする教育であつたのを、法律中心の教育に振替へる。その法律は彝倫道德と提携したものでなければならぬ、といふ考へであつたのです。

尤もこれは吉宗將軍の理想でありまして、支那でさへ道德と法律とはかけ離れてゐるのですが、吉宗將軍は兩方を離れさせぬやうに仕向けて居られる。少し位無理であつても、さういふ風に考へて、大體そこから割出して行きますから、寺子屋で與へる手本も、その土地々々の地理とか、その人〳〵の職業とかいふもので、大方分れて行くやうにする。これは作事往來とか、問屋往來とか、百姓往來とかいふものもありましたし、又男女を分けるやうになつて、同じ國盡(くにづくし)でも「女國盡」といふものが出來て來る。だん〳〵さういふ道順を辿るやうにしたのです。

これは一般の四民を教化させるといふ上から廣がつて、今日で申せば國民學校の國定教科書のやうなものゝ上にまで考へ及んだのですが、吉宗將軍は又一方で、徂徠の點をつけた「六諭衍義」だけではいけないから、鳩巣に命じて假名書の大意を拵へさせる。それでもまだ不足で、「五倫名義」とか「五常名義」とかいふものを拵へさせて居られる。最初は文章に書かせるより、皆に口づきのいゝやうに、歌にした方がよからうと考へられたが、鳩巣は歌が不得手であるといふので、遂に文章になつたやう

なわけなのです。今日ならば唱歌にするといふことも御考へになりさうな氣がしますが、さすがに當時はそれまでは行かなかつたのでせう。後に鳩巣が「大學詠歌」を作つて、三綱領、八條目を歌にしてをりますのは、御仰せを受けた思ひ出なのでございませう。五倫五常名義の寶曆刊本には附載されて居ります。

享保八年九月のはじめつかた、室新助直清に、慈鎭が五常の和歌五首をしめし給ひ、この歌、五常のあらましにかなふやいなやと御たづねあり、直清答へたてまつりて、大かたのことはりは聞え侍るに似たれども、深き心は一首の歌にいひつくすべきにあらずと申す、さらば五常のことはりの通じやすからんやうに、各二三首ばかりもよみてたてまつれかしと宣ひしかば、直清年若きほどより、古歌をずして感ずる事少からず、今もなほ數百首を語記し侍れど、もとより其道を學ばざれば、新によみ出すことはおもひもよらぬことなり、と答へたてまつりける、さらば人々五常の道理をさとりやすかるべきやうに、國字もて作りてまいらすべしと仰あり、よりて直清、五常解をつくりて重陽拜賀の日に獻じけるに、五倫解を作りて進らすべしとの御事にて、これをも書てたてまつりけるに、御覽ありて、御旨によくかなひしとて、右筆の組頭本目權左衞門親良にかゝしめて、大納言殿（後の九代家重）の御かたにまいらせられ、朝夕御覽ぜらるべしと仰つかはされしとかや。（有德院實紀附錄）

それと程遠からぬことですが、細井廣澤が「いろは」の無常を示す言葉ばかりで、子供に教へるには不適當であるといふところから、四十八字の無同字歌を作りました。それは「きみまくら」と云つて居りますが、その文句はかういふのです。

きみまくら、おやこいもせにえとむれぬ、ねほりたうへてすゑしける、あめつちさかゆ、よをわひそ、ふねのろなは

これに漢字を當てれば「君臣親子夫婦兄弟群、井鑿田種末繁、天地榮世、勿佗舟之櫓繩」といふことになります。廣澤がさういふものを作り出して見ても、實際にはやはり行はれませんでしたけれども、これも吉宗將軍の心持が影響してゐるものと思はれます。こゝまで來れば小說、戲曲まで手をひろげさうなものでありましたが、さすがの吉宗將軍もさう廣くは行かなかつた。たゞそこから考へると、談義物はよく〳〵思案して拵へたものと云はざるを得ぬ次第であります。

一五、假名書の本の效能

併し享保度には手習師匠の方ですと、御手本が先に立ちますから、教科書の繪入といふやうなことはしてゐない。當時は手本と讀本とを一ツで濟せてゐたので、そこまで行つては居りませんけれども、さういふことを全然考へてゐないのでもなかつたやうに見えます。湯淺常山が「文會雜記」の中に書

いてゐるのを見ると、やはり繪入の小學讀本が出て來る間際のところまで、考へてゐた人があつたやうに思はれるのです。

子ヲ敎ヘルニハ、トカク訓蒙圖彙ナドヲ渡シテ、カタ一方ニ繪アリテ、片々ニ文字アルナドニテ、見ナラハセ、面白クナルヤウニシテ、タイクツナキヤウニサスル事第一ノ事ナリ、八ツ九ツニモナラバ、一字二字ヅヽ偏ツクリヲ習ハセ、此方ヨリセメテ讀ナドメツタニサセズ、トカク繪アル書物、又ハ軍書ナド見セテ、ヒトリ書物ヲ好ムヤウニスルガ肝要ナリ、十三四ニモナリテ、少シヅヽ見識モ出來タル時、理窟アヒニテ云聞セ、ヒトリデニ學問ニトリツクベキヤウニスベシ、此方ヨリムリニセリツケテスレバタイクツスル也、草木ノ成長スル花ナドヲ先ヅ折ルヤウニスルハヤクタイモナキコト也、己ヒトリ聞テ學問ズキニナルヤウニシカクベシ、草木ノ繁茂スルヤウニ心掛ベキコトナリ。(文會雜記)

尤も常山のは延享度に書いたものですから、早くそれほどの工夫をした人があつたか無かつたか、わからぬやうなものですが、それとても必ずしも子供の學事といふばかりではない、一人前の人間に對しても、訓蒙圖彙等のあつたのを見れば、それだけの用心をしてゐる者のあつたことは考へられます。たゞ少し時間を置いての話であるだけに、享保當時にしつかりさういふことを思ひついた者があつたか無かつたか、斷言出來ぬだけの話であります。

一方では吉宗將軍が御讀みになるといふことで、假名書の本を澤山集められ、御側近く御置きになつて、御自分も御覽になれば、小姓その他近習の者にも讀ませるやうになされた。その集めた本といふのは、貝原の「愼思錄」「農業全書」「八訓」「和漢事始」、熊澤の「集義和書」「集義外書」といふやうなもので、よほど後々まで奥の文庫に澤山殘つてゐたさうですから、大分御集めになつたものでせう。

吉宗將軍は例の實驗實效主義で、享保十四年から吹上に染殿を拵へ、昔の色目を染めさせて、その成績によつて「式内染鑑」といふものが出來て居ります。「延喜式」の縫殿部に昔の染方が少々書いてありますが、多くは失はれてしまつて、どういふ染料で、どういふ方法で染出すかゞわからない。それを内藏式の方にある原料などで調べまして、染殿を建てゝ以來、年々に黄櫨色でありますとか、或は紫、紅、二藍、蒲萄、朽葉、山藍、縹綠などといふやうな色目を染出しましたが、茜染だけは茜草の製法が失はれてゐる爲、當時は蘇芳で染めたやつを茜染と云つて居つた。ところが本當の茜染の染め方が「農業全書」の中にありましたので、京都からその職の者を呼寄せ、だん〳〵丹精なされた結果、縫殿部にある染物の大半が出來るやうになりました。その色目を集めたものが「式内染鑑」といふ成績になつたのです。

これは染色の方の話ですが、とにかく古い書物を集めて御讀みになると、それだけで滿足されず、直に實行に移られる。さういふ學風と云ひますか、或は將軍の氣風と云つた方がいゝかも知れません。

一六、新井白石の歎息

儒學の事に致しましても、どうもたゞ仁義道德の講釋や、大極無極の理談だけでは、吉宗將軍は氣が濟まない。高瀨學山や深見玄岱、その子の有隣といふやうな人達によつて、律學のいろ〳〵なものを御調べさせになつたのにも、今申した氣風といふか、學風といふか、さういふものが現れて居ります。この吉宗將軍の時代に、徂徠及びその一派の經濟學が頭を擡げて來るのは當然の話で、徂徠學は其人の在世の頃より歿後にかけて盛でありました。寶曆前後が最も優勢だつたやうに見える。それは「政談」や「太平策」に將軍の勝手のいゝやうに述べてあるからだけではないと思ひます。

當時は又菲薄先生の青木昆陽なども出て居ります。舶來の藥種に對して、その輸入や代價や分布を考へ、和藥の採集を思立たれる。それが凶年の食糧の役に立つやうになり、更にひろまつて物產學といふものが出て來る。それが本草研究の働きと申しますか、さういふ風に働いて行かなければ吉宗流でない。若し單に唐人蔘、和人蔘にとゞまるとすれば、將軍の喜ばれる筈が無いと思ひます。そこにつゞかゝつて行きますから、丹羽正伯、野呂玄丈、植村左平次、阿部友之進といふやうな人達が、さういふ方面に名を顯して來る。殊に稻葉若水などが天下に名高くなつて來るのであります。

農功の方にしても、直に水利の吟味になる。新田の開發、堤防の改築といふことになつて、民間か

らも田中丘隅左衞門、川崎定孝のやうな者が現れました。蓑笠之助などは能役者の中から出て來た。農功に就て最も大切なのは曆學であり、その曆學に最も必要なのは數學である。その方面には野田文藏、建部堅弘といふやうな人物が出ましたし、天文の方と致しましては、澁川則休、西川正休、中根白圭といふやうな、江戸時代に有數な學者が出て參りました。その中根白圭の主張によつて、蘭書の禁を緩めるといふやうなことも起つて來る。天文の爲に蘭書の禁を緩くしたのが、醫者の方の役に立ち、大いに醫學を助けるやうなことになつたのです。

吉宗將軍は渾天儀を作り、更に簡天儀を作られまして、測午表を拵へ、日晷を作られた。神田に司天臺を作らせるといふことまでやつて居られる。曆法を改めることは、考へられただけで出來ずにしまひましたが、とにかくすべてがさういふ風になつて行つた。新井白石が西洋の天文地理に精しいことを歎じて、後世我國を擾す者は必ず西洋の學であらうと云つて居りますが、これは太宰春臺が、御當家の末は亂世になるであらう、と云つた言葉と思ひ合せて考へなければなりません。

さういふ按排でありましたから、醫學は無論この時に盛になりました。從來醫者は京都修行といふことが大切であつたのが、享保度からだん〳〵寂れて來まして、京都へ修行に行くことが無くなりました。その當時としては、數原通玄、河野通休、橋元孝、村田昌和、多紀元純、丹羽正伯、望月三英といふやうな人達が輩出しましたが、それに續いて元文の頃から頭を上げて參りましたのは、解剖で

知られて居ります山脇東洋、これは「膽志」といふものを書いてゐる。その方の續きが半井伯玄、この人は「膽覽」といふものを書いてゐる。それから「五臟明辨」を書いた吉見南岡などといふ人物も出て居ります。

後藤艮山、香川修德、香月牛山、稻生宣義、かういふ人達になりますと、醫にして儒を兼ねた儒醫といふ風であります。吉益東洞の如きは後世派の醫說を排して、古方家と稱して居ります。その他産科に賀川玄悅のやうな人もあり、此等の人々が享保時代に現れて、舊來の和氣、丹波兩家の外に、めい〳〵新に門戸を張つたわけであります。

一七、宋儒の嫌ふ術の字

享保六年に大坂の古林見宜を江戸に呼びまして、林良以の宅で難經の講釋をさせました。その聽衆が二三百人もあつて、とても入りきれぬところから、儒者が講釋をしてゐる高倉屋敷の方に移して、時間を分けて講義をすることにした。これが江戸で醫學の講義をするはじめで、後の醫學館が出來る基をなしたわけであります。

この古方家と申しますのは、只今の言葉に致しましたら、實驗醫學とでも申すのに當るかも知れません。古方家が盛になつて參りました後、後世派と古方家との間に折衷派といふものが出來ましたが、

享保度は大體に於て古方家が盛で、藥物を主として治療する。病は癒すけれども、命は醫者の與らぬことだ、といふのは後藤艮山の言葉ださうですが、自然さういふことになつて來たのです。從つて病症の症の字も、病だれでなしに言扁の証の字を書く。診察するのにもさういふ氣持で、病氣の證據といふことが主になる。抽象的診察法とでも云ひますか、已証未証などといふ言葉があつて、病氣をせぬ前に於て癒す、病氣の起らぬやうにするといふことでなしに、病氣が起つてから療治する方の流儀になつて參りました。

さうしてそれが又解剖とか、藥物の吟味とかいふことになつて來るので、どうしても蘭法の方へ走るやうになつて來る。古方家が享保度から日本の醫界に勢力を持つやうになつたのが、遂に明治になつて洋風の醫者ばかりの世の中になつてしまつた。その最近の傾向を與へたのは、享保度の古方家だつたのであります。

そこで面白いことは、宋儒は術といふ字を嫌ふ。道術、心術、學術、法術といふ風に、いくらも術の字のついた言葉があります。甚しきに至つては、三皇五帝の術だの、孔子の術だのとさへいつてあります、その術の字を宋儒は非常に嫌ふのです。術といふのは邑の中の小さい道だと字引に書いてある。術は道也、道は業也とも書いてある。儒は大道を治めるところのものだといふ心持から、小さい道を嫌つたのかも知れませんが、宋儒はひどくこれを嫌ふ。ところが日本では儒術も道術といふことと

を盛に云ひまして、徂徠派などは術といふ字を少しも嫌ひません。漢代の儒者も威張つて術の字を使つてゐる。この術といふ字を宋儒の嫌ふわけ、徂徠派が又そこを押切つて使ふ、この間にも面白い心持があると思ひます。

宋儒の嫌ふのは、術數などと云つて、如何にも構變でもあるやうな意味に書かれるのが厭だ、といふ顏をしてゐる。術數の術といふのは、理から事に移つて行く姿であり、方法でもある。理といふことは數なので、數は理の目盛(めもり)である、といふことになつてゐる。だから術數と云つたところで、蝦蟆の妖術とか、切支丹バテレンの術とかいふものではないけれども、術といふことにのみ屈託して行くから、かういふ懸念が起るのも尤もだ、といふ風に私どもは見て居ります。

支那では數が重んぜられぬといふわけでもありません。「禮記」に勾弧とか、方圓とか云ふことがあり、その後に點竄とかいふことがありはある。それが重んぜられてゐないでもないけれども、西洋の幾何學とか、代數學とかいふやうに擴まりもせず、それ程に用ゐられもしない。術といふよりも學といふことが重んぜられて居りましたから、學と術とを竝べて見る場合、支那では學の方に傾き、西洋では術の方に傾く。これは慣に弊風でありまして、何方に傾き過ぎてもいけないのですが、どうもさういふ風に見える。さりとて算學があれば算術は伴はんでもいゝ、といふわけではないが、さういふ傾向の差別が、東西學問の相違を來す有力な原因であらうかと思ふのです。

一八、學よりは術の流儀

そこで大いに考へて見なければならぬ事は、この實驗實效を尊ぶ、學よりは術の方に重きを置く吉宗將軍が、伊勢と日光とは崇信するけれども、その他に對して信仰を持つてゐなかつたことです。全國の神社佛閣から年毎に獻ずる御札や御守も止めさせてしまふ。上野や芝で行ふところの幕府の法事も半減する。神社佛閣の普請といふやうなことにも、なか〳〵澁るやうになつた結果、寛永寺の普請に就てごた〳〵を生じ、たうとう法親王樣が急に御引退なされる、といふやうな事柄さへ出來する有樣でありました。普請金を出すのが厭だから、富闇の興行をさせてもいゝといふ風になつて參つたのも、慥に吉宗將軍の肚から出てゐる。勿論幕府の財政が苦しいから、さうなつたのには相違ありませんが、吉宗將軍の衷心から申せば、その尊崇信仰の念は、代々の將軍と少し違つたところがあつたものだらうと思ひます。

吉宗將軍が陽明學と朱子學との違ひを鳩巣に質し、鳩巣がこれに御答べした、次のやうなものが殘つて居ります。

陽明が學はいか樣の事に候哉、朱子とは如何の違ひにて候哉、たとへば大學の明明德の事など、朱子と陽明との相違を、それにて只今申候樣に御意御坐候故、私申上候は事長き儀に御坐候間、

唯今有增を申上候、朱子の說は明德と申すものは、聖人愚人共に天より受候て替儀は無之候へ共、聖人より以下は氣質人欲と申もの有之候て、明德を昏まし申候、唯今是を明に仕べく候はゞ、善の善たる道理を窮め、惡の惡たる道理を窮め候て、善惡の筋を委敷存知候て、さて私欲を去り、元來の明に復り申に御坐候、其故致知格物を最初の工夫に仕申候、致知格物と申は念慮の上より言行の上に至迄、事々物々の上にて、其理を窮め、我知を盡し申候儀に御坐候、然處に陽明申候は、人ごとに明德具り候へば、事物の上にて一々究め申に及不申候、左樣に仕候はゞ却て外に心はせ候て實を失ひ可申候、只私欲をさへ去り申候へば、自然と明德は明に罷成候間、千萬專らに私欲をさり申修行にて候由申候、ちよと承候處は手短にて尤なる樣にきこへ申候へ共、昨今平人の上にて頭より私欲を去り可申と存候ても、道理の筋を明に不存候ては、私欲と存ながらも道理に力なく候て、中々除き申事罷成間敷奉存候、朱子の學に從ひ候て義理の筋を明に仕候はゞ、次第に道理を見付申候處愷に罷成候て、私欲を去り申儀も可罷成奉存候、先大略朱子陽明の相違、此處にて御坐候由申上候處、得と御合點遊ばされざる御樣子に御坐候故、私重て申上候は、明明德は陽明が申樣に修行仕候ても、少しは功を得可申候へ共、新民の工夫に罷成候ては、天下國家の事、其事に卽て一々其理を明に不仕候て、只私欲を去り申工夫ばかりにて如在なしに、ひたと道理に違ひ可申と奉存候、新民も本來明德の內に御坐候へば、新民の事相違有之候なば、明德も

實は未明と申物に御坐候旨申上候へば、其にて御得心被成たる御様子に御坐候、其後は御意も絶え間有之候故見合候て、其儘御前を罷立申候。

併しこんなことを申上げたところで、果して將軍にわかつたかどうか、鳩巣の云ふ邊のところは、將軍にわかつてゐなかつたのではないかと思ひます。一體が學派の別なんていふものに貪著はない、勸善懲惡でさへありやいゝぢやないか、といふ大まかなお考へなので、實際はその邊を綿密に諒解してゐなければならぬのだけれども、さうは行かなかつたらしい。寛政度に異學の禁を出さなければならなくなつたのも、まことに已むを得ぬ成行きであると思ひます。しかも鳩巣は此時の言上が、心底に殘つたものと見えまして、あの駿臺雜話は、全部の徹頭徹尾、格物について平話で誰にも分りよいやうに書いてをります。それも畢竟陽明學を拒否する心持からでございました。

一九、徂徠の賞罰論

とにかく吉宗將軍は、たゞ覿面な成績を求める、といふ風にのみ考へて居られましたから、どうしても功利に墮ちる。さうして徂徠流儀の仕向けをよろこばれるやうになる。前にもちよつと申しましたが、賞罰に二ツの傾向があるといふ徂徠の意見は「護園談餘」にかう書いてあります。

善ヲ勸メ惡ヲ懲スハ風俗ヲ正スノ道ニテ、賞罰ハ國ノ大權也、ソレニ古ノ賞罰ト刑名法家ノ賞罰

ト二派アリ、刑名家ハ信賞必罰トテ、下ヲヒヤウリテ世ヲ治メントスル也、功アル時ハ相違ナク信ニ賞シ、罰アルトキハ一寸モノガサズ必罰スル故、人々功ヲ勵ミ、罰ヲ恐レテ罪ヲ侵サズ、何事モスミヤカニテ成功ハヤシ、一段ヨシト見エル、サレド惡ヲセザルハ罰ヲ恐レ、法ヲ遁ルヽマデニテ、不義ヲ知ル善心ニテナケレバ、法ニフレヌ惡事ヲバ用捨ナクスル也、又功ヲ勵ムモ忠義ノ心ニテハナク、賞ヲ得ンタメナレバ、一過ノ手ギハヲ專ラニシテ後ノ災、國家ノ大計ヲ省ミズ、論語ニ君子刑ヲ懷ヘバ、小人惠ヲ懷フト云ヘリ、上刑罰ヲ以テ下ヲオドシテ治メントスレバ、下ハ上ヲ欺イテ恩惠ヲ得ントス、互ニ敵ヲ計ル樣ノ心ニテヤスキ心モナシ、秦ノ國、刑名家ノ賞罰ヲ用ヒテ、一旦天下ヲ得タレドモ、幾程ナク亡ビタリ、後ノ世モ和漢共ニ此賞罰ヲ用ヒタルハ皆世運短シ、近クハ甲斐ノ信玄ナドモ學問モアリ、武材モアリ、サシモ强國也シカドモ、幾程ナクヤミ〳〵ト亡ビ、忠臣モ義士モナカリシ、ヒヤウリテ治メタル故ニアラズヤ、賞罰モ此ノ如クナレバ、禍ニコソナレ、治メノ益ニハナラズ、聖賢ノ世ハ撫育ヲ先トシテ、罰ヲバ止ムヲ得ズシテソ用ヒラレシ、書ニ文王德ヲ明ニシ罰ヲ愼ムト云ヘリ、文王君德厚カリケレバ、誰モ明白ニ見テ知ル也、德ヲ明カニストハ是也、サテ大學ニ文王ノコトヲ引テ、君トシテハ仁ニ止ルトアリ、文王ノ御德ト申スハ仁ナリ、愷悌ノ君子ハ民ノ父母也ト云ヘリ、父母ノ心ニテ下ヲ治ムルガ君德也、父母ノ子ヲ育ツルニヒヤウリノ不實アルベキヤ、喜ブモ怒ルモ皆實心ナリ、サレバ仁君ヤムヲ得

ズシテ行ハル、罰ハ恨ル人モナク、世ノ戒メニナル也、上父母ノ心アレバ下ニ子ノ心アリ、上下親子ノ如ク信實ノチナミアラバ、賞罰ヲ以テヒヤウリナルコトイルマジキ也、サテ罰ヲ愼ミ玉フコトハ、罰ハ凶德ナリ、我身ニウケテイヤナルコトナレバ誰モキラフコト也、キラフコトヲ表ニ立テ、下ニ臨ムハ下ニウトマル、道也、臣背キ民離ルレバ國亡ブ、故ニ罰ハ國家ノ大事ナリ、ツツシムト云フハ大事ニシテ容易ニ行ハヌコト也、罰ヲ以テ治ムルハ毒藥ヲ以テ病ヲ治ムルニ似タリ、其病ハ愈テモ、毒氣遍身ニ廻リテ遂ニハ身ヲ亡ボス也、罰輕ケレバ上ヲオソレズシテ、國威立ジト思フハ淺シ、離心アル下々ヲ罰ヲ以テ治メントスルハ、杖ヲ以テ火ヲ打ツガ如シ、イヨ〳〵モユル也、上下父子ノ睦マシミアレバ、上ノ憂ヲ下ニモ憂ヘ、上ノ悅ビヲ下ニモ悅ブ、上下一體和合シテ吉祥コソアラメ、兇惡ハアルマジ、其中ニ道ヲ背キ、義ヲ忘レ、惡シキ振廻スルモノアレバ人共ニ惡ム所ナリ、其時コソ止ムコトヲ得ズシテ罰スベキ也、スベテ世ニ君子ハスクナク小人ハ多シ、賢者ハ少ク愚者ハ多シ、視ルニ隨ヒテ咎メナバ朝ヨリタマデ氣ノ休マリハアルマジキ也、小過ヲ宥シ、賢才ヲ擧ルトアリ、仁恕ノ心アラバ人ノ過ヲ視ルコト少ナカルベシ、サテ道ハ一ナレドモ、身ノ居ル所ニ就テ差別アリ、人ノ君トシテハ仁ニ止リ、人ノ臣トシテハ敬ニ止ルト云ヘリ、忠ヲ勵ミテ賞ヲ思ハザルハ臣ノ義ナリ、忠義ヲ悅ビ、勤勞ヲ感ジテ、褒賞ヲ賜ハルハ君之道ナリ、凡人情與フレバ喜ビ、奪ヘバ怒ル、得ルコトヲ好ミ、失フコトヲ嫌フハ、則生ヲ好ミ、

死ヲ惡ムノ天性ニシテ、君子小人ノ差別ナシ、サレド君子ノ義不義ヲ憂ヘテ得失與奪ヲ顧ミズ、義ニ隨ツテ行フハ學問ノ力、禮義ノ德ナリ、ナベテ世ニモチヒガクシ、器量アレドモシラレズ、不肖者何ヲ以テハゲマンヤ、大德ハ大官大祿ヲ受ケ、小德ハ小官小祿ヲ受クルハ聖賢ノ道ナリ、田祿財寶アタフル道ナクンバ王侯ノ寶ニアラズ、殷ノ紂王ハ身ニ寶ヲマトヒテ燒死シ、鉅橋ノ粟、鹿臺ノ財ハ皆人ノ寶トナル、王侯財ヲ好メバ必災ヲウク、仁者ハ財ヲ以テ身ヲ興シ、不仁者ハ身ヲ以テ財ヲ興ストイヘリ、又財聚ルトキハ民則散ジ、財散ズルトキハ則民聚ルトイヘリ、用ヲ節シテ人ヲ愛シ、財ヲ散ジテ民ヲアツムルハ保世ノ道ナリ、賞行ハレズンバ國必治マラジ。

吉宗將軍にしたところで、賞罰が二ツあるやうになつては困る、といふことを知らずにゐたわけでもない。さういふことを心がけてゐないわけでもなかつたでせうが、そこに緩いところがある。成績の擧ることを急ぐ。病症を病証と書くやうな心持からは、どうしてもさういふ風になり易い。徂徠は賞罰の二ツあることを說いて、古聖王の賞罰、刑名家の賞罰と云つて居ります。罰を表に出してはいけない、賞を行はなければ治るわけのものぢやない、人君は父母の心を持つてゐなければならぬ、明德を明にしなければならぬといふのですが、そこの辨別は讀み較べて見ればわかる。刑名家のやうにはつきりしてゐないのは、徂徠の學問が心法を問はぬ御流儀だからです。心法にばかり屈託するのも偏頗だが、心法を問はぬのもまた偏頗なのです。さういふやうな變革がこの間にあるので、實に化を

革めるとでもいふべき時でありました。

二〇、親子孫の時代の違ひ

さういふやうな時に當つて、困窮してゐる時世を救解しようとするのでありますが、例の四維と申します禮義廉恥、それによつて世道人心を維持して行くには、自肅によらなければならぬ。無論皆の心持を四維の方へ引付けることはあるにしたところが、それはやはり自肅といふ形になる。孔子も云つて居られる通り「之を導くに政を以てし、之を齊ふるに刑を以てすれば、民免れて恥なし」で、この言葉はよく〳〵玩味しなければなりません。たゞ自肅せよと云つたところで自肅するものではない。勸善懲惡といふことにしても、法律を以てそれに臨む。享保以來の世の中を法律の世の中と云ひまして、何事も一々證文、證文といふ按排式になり、人證より書證が物を云ふやうになつて、大分模樣が變つて來た。それにはよく民を教へて置かなければならぬ、といふ心持で、法典編纂を終つたら、それを隱して置かずに皆に見せる、といふ考へで居られたらしいが、刑の裁量を知らせて置けば、此罪は是ほど、彼の罪は彼程と計らつて、知つて犯す者の出るのを掛念して、餘ての思召の通りに行かなかつたのであります。

とにかくさういふ風で法律の世の中にしてしまつた。やはり實驗實效で、泣く子には拳骨、おとな

しい子には御菓子といふ風に行く方が、めのこ算用で明白でいゝやうな心持でありました。要約して申しますと、老子が虛無恬淡を振廻して、如何にも手離れしてゐるやうでありますが、一方では長生久視といふことを云つて、とぢめるところを明にしてゐる。我身體、我生命といふところを持つて來て括りをつける。さうすれば別に飛離れたものでなくなるのです。儒者にしたところで、修身齊家治國平天下といふことがあつて、たゞ誠心誠意だけではない。「道學眞妄圖」といふものに、

性の中、本より五常(仁義禮智信)を具して、緣に應じて發用する處、儒者これを見て學となす、殊に知らず此發用の體、もと非修の道なることを、故に用は體より起り、學は道より出づ、元一つにして二に非ず。

大惠云く順序は人に在り、性に在らざる也、夫れ學も亦た順なり、是猶人に在り、性は順背に在らず、故に學ぶべからず、然れども人學ぶべきの志を起さゞれば、學ぶべからざるの性を知ることを得ず。

苟も我れ道を學修せんと欲するものは、是れ分別妄心也、苟も仁をなさんと欲し、義をなさんと欲して、仁をなし義をなすものは、皆是れ妄識の所行にして、性起の五常に非ざる也、夫れ性より五常は、道の德相にして、元來性中に具足せり、緣に應じて發用すれば、自然に五常等と成る、卽ち仁を欲せざれども仁、義を欲せざれども義なり、緣息めども失せず、其性湛然たり、苟も性

起の五常を得んと欲せば、須らく直下に眞性を見ること一回すべき也、若し之を見んと欲せば、須らく謂はゆる非修非學を修すべき也、苟も修めて非修を得、學んで非學を得れば、何ぞ啻だ五常を具するのみならんや、即ち格物忠恕、一以て之を貫く、乃至恆沙德相、具有せざるなし。

とありますが、かういふやうな詮議は一向に拋擲されてゐたのです。

吉宗將軍が實驗實效を求められて、世間を引立てようとされる、それがうまくさし響いて居りましたから、諸道の中興といふ有樣になつて來たのでありますが、洪水が川の瀨を變へて流れるやうなものです。今日までも江戸時代の話をする時分に、享保までは昔の風が遺つてゐたと云はれて居ります。その事は又あの眼の高い徂徠が見遁す氣遣ひはありません。

治世ノ人ノ樣ニ世ヲ賴ミ、人ニスガル心ナケレバ一分ヲキハメ、男ヲ立テ、死トモ堅固ニ死タキト、死後ノ名マデヲ思フ故、心持自然ト剛直也、明日ノ命ヲハカラネバ、居處什物ノ思ヒモナク、甲冑ヲ枕ニシ、艱難飢寒ニ馴ヌレバ飲食色欲ノ念モ淺ク、言葉ノ合ハヌヲ恥トスレバ、心ニ起ラヌ虛言ヲイハズ、風儀質素ニシテ、夙ニ興キ、夜ニイネ、役義ヲ堅固ニ勤ムル、是戰國良士ノ風俗ナリ、昔ノ餘風ニシテ近頃マデハ其人モアリシ。

この徂徠の云つてゐるところに就て見ますと、享保の末に七十歳の人は寛文の生れで、戰國時代の人物ではありません。然るに近頃まで戰國良士の餘風が遺つてゐたといふ、戰國の生殘りがゐたのは

寛永度までの話で、その人達の子供が元祿時代、享保度はもう孫になつて居ります。孫と申せば直接その時代の人の薫陶を受け、感化されたのではない。もう三代たつて居りますから、本途の移り香みたいなものになつてゐたのです。

近い例で申しますならば、明治の末に七十歳の人は天保の生れで、江戸の教育を受けた人です。明治時代の中頃までは、天保時代の人が事に當つて居りましたが、大正、昭和になると、安政、慶應の人すら少くなつて、大體明治生れの人が活動することになる。そこに明治と大正、昭和との違ひがある。只今では明治の中頃に老人であつた人の、子乃至孫の時代といふことになつて居ります。享保と寛永、元祿との違ひは、畢竟親と子と孫との違ひでありまして、それだから徂徠も餘風と云つてゐる。その餘風がありましたから、いくら吉宗將軍が新しくしようとされても、全く新しくはなりきれぬものがある。享保度といふものは格別な一種の時世であつたやうに、あとからも眺められるし、實際さうであつたらうと私どもも考へるのです。

三、すべてが現金覿面に

その時に又面白いと思ひますことは、佛教方面に於きましても、淨土、日蓮兩宗の町寺にいろ〳〵な話がありますが、その中でも時世の反映した著しいものとして、かういふ出來事があつた。享保四

年に淺草の堅福院に居りました祖惠といふ日蓮宗の坊さんが、信者から一箇月三文づつの掛錢をさせ、さうして貧乏人が新しく宗門に入ると、十兩づつの金をくれた。これが爲に江戸中に大變信者が殖えて參りました。中にはその十兩が欲しかつたんでせう、旗本衆などにも、この祖惠の新しい信者になつて處分を受けた者があり、祖惠も遠島になりました。

尤もこれはその前に、日敎といふ日蓮宗の坊主がありまして、生田五郎兵衛と謀つて六高人講といふものを拵へたことがある。やはり淺草の北馬道にゐた人で、この方は又毎日何程づつであつたかわかりませんが、毎月錢三百六十貫目づつ上つたと云ひます。元祿四年の話ですから、その時分の錢相場で勘定しますと、九十兩といふことになる。その上つた金を、自分の信者で借りたいといふ者があれば、どん〳〵無利息で貸してやる。これが非常な勢力になりまして、江戸中に信者が殖えて參りましたが、寶永三年十二月に至つて處分されました。祖惠はこれを少し模樣替へして、貸すのでなしにたゞくれる、といふ事にしたのですが、掛金とその應用によつて信者を殖す。御利益は覿面である。その時分の金で十兩貰へるのですから、錢の無い者は信者になるわけです。

この祖惠のやつたことを考へて見ますと、吉宗將軍は丁度祖惠を捕へた前年に、金銀の貯蓄を禁じて居ります。金銀といふものは融通すべきものだから、私に貯藏するのはよろしくない、と云つて法度を出してゐる。饑饉に對する義捐者の連名を記した「仁風一覽」を刊行させたところから見ると、

祖惠のやつたことは頗る面白い。如何にも現金だ。此等が現金といふ言葉を使ふのに最もいゝところでせう。寶永と享保とでは、世の中の模樣も大分變つて居りますから、日敎よりも祖惠の方が實效も擧つたことゝ思はれます。

それから又享保九年の八月には、攝州高野川原新田村の淨土宗の尼で、智善及びその弟子の諦念等が、「難信燈佛說」といふものを板行致しまして、凡夫が忽ち成佛する修行をさせた。これも亦覿面、現金なものであります。この時の書類が後年の御藏門徒に傳へられまして、その祕書が今日まで幾分か殘つてゐるやうな次第であります。

富士講なども大分古いものですが、あの四代目に月行忡朗といふ人があり、その弟子に食行身祿、月心光清といふ二人がありました。身祿の方は伊藤伊兵衞と云ひまして、享保十八年六月十七日に死んでゐますが、その弟子の日行靑山といふ者が、元文元年に同行を組立てまして以來、大變盛になつて居ります。富士講の先達は貞享頃からありましたが、この身祿の遺方は、たゞ加持祈禱をするだけでなしに、祿は自分の身の內に在る、だから自分の商賣を骨折つてする、それから世の中を大切にする、自分の心持と行とによつて、世の中は安樂に渡れるものである——かういふことを唱へまして、働かうと思へば自由に働くし、自分の一身に苦勞の無いやうに、世の中を暮すことが出來れば實に有難いわけだから、日々感謝で送らなければならない、といふ風に說いて參つたのです。二宮尊德なども

もこの身祿の富士講に入つて、その感化を受けた人であります。享保にはかういふものも起つて居ります。

三二、百年餘も續いた爭論

祇空が深川八幡の社地へ祇敬靈神として祭られたのは、享保十二年の秋でありました。祇空は吉田家に由緒があるといふことですが、この人の書きました「溫泉茗談」などを見ますと、その教化の筋も大方わかつて參ります。この人は「一宿客」といふ印を用ゐて居りますが、どこへ行つても一晩しか泊らない。祇空なども民間教化につとめた一人であります。

常盤潭北は享保五年に「民間分量記」を出して居りますが、この人などは儒者とも違へば佛者とも違ふやうな事で、大いに民衆の教化を行つて居ります。それから美濃派の盧元坊などは、俳諧といふことによつて民間教化を試みてゐる。潭北や盧元坊などによりますと、やはり早速に成佛する、直に得脫することが出來るものだ、といふ方に力が入つてゐるやうに見えます。さういふ風に——今日の言葉で申せば宗教的に感化致すのにも、ちよつと說き方が從前と違つて來てゐる。一ツには時世からさういふ風にもなりましたらうが、吉宗將軍の仕向けも亦大いに與つて力がありはせぬかと思ひます。

僧侶が假名書で法話を刊行致しますことは、從前からいくらもあつたのですが、それらのものが概

してどういふ風に說くかと云ひますと、覿面に利益がある、安心が得られるといふ點に重きを置いてある。安心といふことをわかりよく云へば落著です。何といふことは何といふところに落著くか、といふ風に說いて來る。さういふものが多いのです。

儒者の方の假名書もこの際に多く出て居ります。これは從前も坊主ほどではありませんが、何ほどかありました。そのうちで三輪執齋の「四言敎講義」は、享保十二年に出來て居りますが、この人の書きました「正享問答」の中に「先手習の師を求め、手跡をならはしめ、幷六諭衍義の解、四言敎の解などよみきかせ」といふことがあります。自分の書いた本を兒童に讀ませよといふところに「六諭衍義」を持つて來たところを見ますと「四言敎」を書いた心持も、やはり吉宗將軍の心持のさし響いたものであることがわかります。併し、他の本にはかうまで明かに影響を書出して居らぬだけの違ひで、心持は皆同じであつたらうと思ひます。

それですから享保十五年に吉川龜庵が「本朝異學問答」を書いてゐる。これは宋學以外の學問の行はれるのを心配して書いたものですが、太宰春臺が「辨道書」「聖學問答」「六經略說」などを出したのもやはりこの頃です。殊に「辨道書」の如きは、老中の黑田豐前守に提出したもので、享保二十年に出版されて居ります。この「辨道書」の指摘といふものが、神道家の方に大きな影響を與へて居りまして、この書に就てはその後も引續き百年近くも論議されてゐるのであります。江戸時代に出まし

たもので、その爭論が、これほど長く續いたものは他に無いと存じます「辨道書」の駁論の一番先に出たと思はれるものは、鳥羽義の「辨辨道書」で「辨道書」の板行された翌年、即ち元文元年に出て居ります。これに引續いて幾つも「辨道書」の駁擊が出たのであります。

三、飛んでもない講釋

かういふ風に引立てられたと申しますか、引立てたと申しますか、各方面とも競ひ立つて居ります。又砲術、馬術その他武藝一般の事、刀鍛冶からはじめて一切の職人衆の方面にまで、かういふ風儀が起つて來たのです。それだけ賑かであつたに相違無いから、見やうによつては諸道の中興と見えたでせうし、又えらい人も惜にねましたから、それで中興と見えたかも知れません。

そこでだん〳〵假名書の本さへ出て參るほどですから、讀むといふことよりも、聞いてさへゐれば用の足りる講釋の方は、筆よりも口の方が皆に手近い感化を直に與へさうなものであるが、林家の講釋も高倉屋敷の講釋も、一向人が來ない。ところが菅野兼山といふ者がありまして、この人の講釋は大變な繁昌でありました。大橋訥庵へ幕府から敷地を賜はつたので、後々までそこに塾が殘つて居つた。この人は佐藤直方の御弟子ですから、闇齋流のわけですが、その講義の樣子が「麗澤祕策」に、享保八年の現狀として書いてあります。坊主などに對しては隨分惡口したものらしい。儒者の排佛は

寛文度までで、その後はいくら悪口を云はれても僧侶の方で相手にしなくなつた。それは儒者が攻撃したところで、自分の信者から尊ばれなくなるやうなことが無い爲で、必ずしも佛教の信仰が厚くなくなつた爲ばかりとも思へません。とにかくこの時分は坊主が相手にならなかつた時なのです。が、その兼山の講釋の模樣を鳩巣の書いてゐるのを見ると、實に飛んでもないことである。

菅野彦兵衛講堂存外聽衆も多く御坐候、但し佛老の非を甚敷誹り申候て、出家など聽聞に罷出候ても居申事も成り難き程の事にて退出仕候、講堂の床に大懸物をかけ置申候、其繪は衣冠正敷貴人と見へ申候者一人畫き、側に沙門に繩をかけ引居、扨又釋迦と阿彌陀の像を泥水へ投入申體を畫かせ置申候由、是は定て守屋大臣にて之あるべく候。

成程、こんな事をしたら俗受けはしたでせう。それから考へると、林家や高倉屋敷の方は、こんな耳ざはりには行かない。だから聽衆が來なかつたわけでもある。して見ればどんな聽衆がどんな氣持で聞きに來たか、考へられぬでもありません。

それと共に神道がこの際、更に頭を擡げて來たやうに見える。それも口から起つた——著述によらないで口でしやべる神道講釋によつて、神道が急に賑かになつて來たやうであります。

二四、しやべる神道

神道も口から起つたのでありまして、著書も著書でありますが、講釋もなか〳〵盛で、その講釋によつて門戸を張り、多數の弟子を擁して居りました。中には實講をやつてゐる人もあつたのです。

一體神道が急に頭を擡げるやうになりましたのは、例の東照大權現勸請の一件で、天海と吉田家との間に爭があつた。それから道春の兩部神道の攻擊、理當神道の主張といふこともあつて、それが大變な刺戟を與へたわけです。それに引續いて儒者の排佛といふものが、寛文前後に最も甚しうございまして、儒者、佛者の爭が嵩じてゐる最中に持つて來て、儒者は儒者同士、佛者は佛者同士の內輪喧嘩がなか〳〵甚しいものでありました。さうして大體に於て、神道の研究も佛教に指南されて行くのと、儒教に引張られて行くのと、二分れになつて來たのが、こゝで儒々佛々の內輪喧嘩の爲に、すつかりどつちやになつてしまつたのであります。

かねて三教一致論が無いわけでもなかつたのですが、それは口だけのもので、事實に落著したところが無かつたから、現實を捌いて行く段になると、どうも弱いところがある。一言一行の上に就て吟味して行く、修身齊家とか何とかいふ問題になつて來ると、そこが甚だ鈍いのです。神祇四姓（安倍、卜部、大中臣、白川）といつて、御家柄のがありますけれども、この御家柄の神道といふのも、やはり儒佛を取入れたものではあつても、明白に取入れたものによつて落著を示してはゐない。儒によつたのか、佛によつたのか、どこをどう取得にして、どう決著したのか、一向わからぬのです。四姓の

神道なるものも、概して云へば神拜祭式に屈託するばかりで、人事の現實には極めて疎い。おまけに例の祕書だとか、切紙傳授だとかいふことにのみなり行きますから、愈々以てどういふところが落著の場所か、窺ふことが出來ぬやうになるのであります。

そこで享保度に頭を擡げた神道は、神祇四姓から出たものであるかといふと、どうも振合が違ひますし、そのひろがつて參ります場所も、神官神職だけではありません、一般民間にひろがつて參りまして、銘々個々に落著を得ようとする傾きがある。この時分には神道者が門々に立つて、鈴を振つて講釋をして歩くといふやうな風にまでなつて來て居ります。つまりしやべる神道です。この頃の神道の派別はどうなつてゐるかと眺めますと、著名なものが十七八もあつたやうですから、知られないものが其他にもあつたでせう。

その十七八もある中で、江戸で講席を張つてゐる、最も名高いところのものを擧げますと、跡部光海、友部安崇といふやうな垂加神道の人達、稻荷神道の方には羽田東滿があり、その後を繼いだのが浦鬼主です。それから神田圖書、淺利大賢、その伴の信賢、この淺利大賢などは、石地藏を風呂場の蹈石に使つたさうです。江戸で初めて神道といふことを、一般に向つて說き立てたのは橘三喜、その後を繼いだのが武笠丹波、それから横山當榮、石出帶刀、依田徧無爲、といふやうな人達も居りました。多田南嶺なども享保の末に江戸まで出て來て講釋をして居ります。江戸の話ではありませんけれ

ども、上方の増穂殘口なども實講をやつた。この人のは風流講釋と申しまして、面白をかしくやるのですが、佛法叱といふわけで、坊主の惡口を盛に利きました。

さういふ風に、お品のいゝのもあれば惡いのもありましたが、神道講釋なるものゝ模樣はどんなであつたかと云ひますと、佚齋樗山といふ人の書きました「田舍一休」の中に、こんなことが見えて居ります。

近き比神道者と名乘、社人のはてと見えて、我等の近在に來り、被を少し讀て、そのあとに百姓の身持、人情の變化、親族朋友の交り、下人の使ひやうまで、神道に引かけて其情をよくいひとり、如此なれば神の御心にもかなひ常に守り給ふ、神明は邪をげからはしと嫌給ふゆへに、邪欲の心にてはいかほど祈りてもかへり見給はずと、至極口あひにてむだことまじりに說ども、いふところひとつとしてあしき事なく欲がましきこともなし、故に村里の野人感化して、猿のやうなるあらゑびす、邪心やはらぎたる者おほし、弟子に成て傳授を受度といふものあれば、只正直にして邪心をさることを語る、ところの代官名主等迄喜ぶこと限なし、おしき事には學問もなく平生の身持凡人なり、彼等實にして行粧正しくば人の信もいよ〳〵篤かるべし、いまの談議もせめて彼神道者ほどの益あらば人も侮るべからず、功德も大成べし、人皆佛性をそなへたる者なれば善に感化せずといふことなし、をしへやうあしく手前の欲を先に立るときは人信ずることなし、

人も亦靈明あり。

これで大體どんなものであつたか判ると思ひます。これなどは大分穩當に書いてありますが、聞手がどんな人達で、どんな方面に歡迎されたかといふことも察することが出來る。それが後にはだん〳〵寄席稼ぎをするやうになりました。篤胤の講本などを見ましても、寄席稼ぎをする連中のやうに卑しいことはありませんが、それ等よりも伊吹廼舍先生はお品がいゝにしても、どんなであつたかといふことを、窺へぬでもないと思ひます。

五、無法な坊主の辯舌

こゝで注意すべきことは、この時分の神道講釋は、いづれにも教學だけでなしに修行がある。神道に修行といふことを大切にするのは、伊勢流の特徴でありまして、そこから云へば享保前後の神道は伊勢流に傾向するものだとも云はれます。又例の五部書などはきつと使つてゐる。或は五部書を正面から引込むことをしないでも、それに連關しないものは無いやうです。その修行といふのは、神號と申して神樣の御名を唱へる。祝詞を讀む。一萬度、十萬度の祓をする。安坐巡行などといふこともある。さういふ修行がついてゐるのです。

それから轉じて佛教の方を見ますと、町寺といふものは早くから布教第一でありました。我國に於

ける辯舌は僧侶からはじまつたのですが、殊にこの頃になりますと、淨土、日蓮兩宗に凄じいおしやべりの坊さんが澤山ゐまして、この兩宗の喧嘩腰の法談說法が、その當時の大きな興味にもなつて居つた。儒者だの神道家だのといふものは、僧侶のやるほど馬鹿げた事はしてゐなかつたやうですが、井上金峨の云つてゐるのを見ると、儒者の方でさへなか〳〵飛んでもないことをやつてゐたらしい。

今時一種の講說の惡むべきは唐詩明文など講ずるに、玄宗は梅幸、貴妃は路考、元美は十郎、□□は五郎などゝて、泣く所は泣聲、恨む態(ヲヂ)にて、黃色な聲に成りて、辰巳あがりにさはぎ立て、聞くものを笑はせ、頤(オトガイ)を解くと覺へて居るものあり、甚しきは經を講ずるに聖人の言を侮り、顏子は孔子の龍陽(ワカシュ)にてもあるらんなどゝ、出でまかせに出來口に云ふ、斯の道の賊あるなり。（病間長語）

儒者の講釋などと云つたところで、闇齋派の切口上のやうなのばかりではない。大分怪しいのがあつたのです。菅野兼山のやうな談義僧もどきのもあれば、淺利大賢みたいに石地藏を蹈石に使ふやうなのもあつたのですから、儒者や神道家にも大分怪しいのがあつたことは慥です。「地獄樂日記」の中にも「法華坊主は談義の上にて念佛無間と惡口し、淨土坊主は日蓮の木像を縛り上げて、たゝきながらの談義」と書いてありますが、これは大坂にゐた了海といふ淨土宗の坊さんのやつたことなのです。この了海は近松や海音の淨瑠璃の中にも出て來る人で、當時江戸の天鏡と並んで、なか〳〵口才のあ

る人でありました。天鏡といふのは例の祐天上人の弟子なのです。この坊さん達のやつた荒つぽい辯舌の影響を、儒者も神道家も受けてゐるやうに思ひます。

それですから太宰春臺は、

譬へバ今ノ世ノ淨土宗日蓮宗ノ中ノ卑劣ナル談義僧等、愚俗ヲ誑惑シテ佛法ニ歸セシメ金銀米錢ヲ取ントテ、釋迦ノ法ニモ祖師ノ教ニモ無キ虛妄ノ事ヲイヒ、狂言亂語シテ鄙俚猥褻ナル事ヲイヒテ愚民婦女ヲ欺クガ如シ。（聖學問答）

と云つて居りますし、田中丘隅も亦、

大學の一卷も知らず、大藏名目の上卷だに更によめぬ程の若僧等、何事を云やら、上手下手の評判を專らとし、其心、佛法にあらず、偏へに狂言役者の聲色、其身ふりを覺へて是を賣る事のみ修行す、近年の談義說法は偏に佛法の理に構はず、只商事に似て兎に角利の有事をのみ工夫す……只此商の爲に其家々の學問に疎く、小僧よりひた物、此事のみを心として、かな書の談議本色々の口車のはなし本など買集め、町々油見世の言立て、役者の口上を學問の第一と下心に聞習ひ、是を修練すると、弘通者說法者抔とよばれて濟ものをと目あてにすることそ口惜けれ。（民間省要）

と云つて、いづれも坊主の無法な辯舌を指摘して居りますが、これは誠の無い話だつたのであります。

二六、芝居がかりの悪對說法

何に致しましても町寺といふものは、町人百姓相手に布教するのですから、淨土、日蓮兩宗の人達も殊にわかりのいゝ、面白がりさうな事を云つたので、念佛と題目だけで落著するといふ、まことに簡易な立前のものだけに、何も彼も手短にやつてのける。談義說法の上手下手といふことが大體の眼目でありまして、幽玄な、高尙な事などは說いたところで、一般の人には耳遠い、又そんなことでは決して興味も起らず、興味が景氣を拵へて行くわけにも參りません。

そこへ持つて來て、その頃の民間の元氣者、といふよりも寧ろ無法者であつた競組、これは手子の者とか、爲の者とか、ガエンとかいふやうな、いづれも鼻ツ張の强い連中です。幕府の火消役所の役場中間、幕府の小普請方の人夫、さういふ者がやたらに力み廻る。この連中は又綽名して「コリヤ又組」などと云つて居ります。この者どもは悪對を得意として居りまして、その悪對が當時の人には愉快に面白く聞かれた爲に、遂に江戸歌舞伎の特色たるツラネを拵へ出しました。芝居で致しますツラネ言葉といふものは、競組、コリヤ又組の悪對から生れたものなのです。人氣取りに敏捷な說法の坊さん達は、早くこの悪對を談義に取入れました。その樣子は「享保世說」の享保八年五月のところに書いてあります。

同年同月之頃、伊皿子かう雲寺ニて、四十八夜諦道説法之處、其向ニ長蓮寺と申候て日蓮宗の寺ニて候、此向之寺ニては赤犬を殺し、旦那方にも振廻、住持を初坊主共迄給候、其上博奕を致し候など、盗人坊主のどろぼうなどゝ、あらゆる悪口を被レ申候故、兼てかう雲寺長應寺両住持心安知人ニ候得ど、餘り成事共を被レ申、所化勘忍難レ致故、長應寺より以ニ使僧一右之通之雑言は預ニ用捨一度被ニ申送一候へば、かう雲寺ゟ其段は高座の上ニて口拍子に申事に候得ば、成程致ニ承知一候との返答は仕がたき由被ニ申送一候付、長應寺殊之外腹立、増上寺へも断なく直ニ御用番之寺社奉行牧野因幡守殿に被ニ相断一候へば、因幡守被レ仰候は、惣て宗論は取上無之事、其上子共いさかいの様成事を一宗の觸頭をもいたし候出家に不ニ似合一事を被レ申候、乍レ去承屆置申候、此方ゟ大談議止メ申儀は不ニ罷成一候間、左様御心得被レ歸候様被ニ仰渡一、長應寺被ニ罷歸一候、扨因幡守殿に増上寺之役者を被ニ召呼一、伊皿子かうゝん寺ニて四十八夜有レ之由、就レ夫かやう〳〵之事、長應寺被ニ申出一候、右四十八夜從是止メ不レ申候、右筋之儀は遠慮有レ之可レ然旨被ニ仰渡一候由ニて、まづ説法相止申候由、其後増上寺より長應寺へは、此方に一旦之屆もなく直に寺社奉行に被ニ召出一候事不屆之由、公事申懸られ候由。

又同じ書物の享保十四年のところには、圓隨の説法と云ひまして、當時江戸で鳴らした説教僧の説法の模様が書いてあります。ずゐぶん馬鹿々々しいものでありますが、それでなければ皆が嬉しがら

ない。コリヤ又組得意の藝當でなければ感心しないのです。面白をかしくやりさへすればよかつたのでせう。

八月四谷馬場下清岩寺四十八夜圓隨說法之節、日蓮宗の僧不審書を出し候へば、則返答書を致し高座にて役者の聲色にて讀申され候由。

參詣の衆はひよんな書付が出て牛若なりしやとおもふまいものではないが、たとへ平家物語盛衰記程書付來ればとて、ちつとも源九郎な事はない、此方大將は學文がよしつねじやさかいで、元だんぎゆへ袈裟衣は武藏坊なれ共、說法の辨慶は八十四人がちから、法問談儀何にても七ツ道具のたらふた坊主、自然きゑの衆はいや〳〵法の師匠は侍の主君と同事、もしむかふから能登守がやうな强矢をいかけられたら、なんと四郎兵衞次信がやうに身がはりにもいたさずばなるまいかとあんじまい物でもない、そんな氣遣せぬがよい、こちにりけんそくぜ彌陀がふといふつるぎが有る、依て縱幾千萬法問の矢を射かけられても、革なぎの劍ならねど己とぬけ出し、切はらふさかいで、あぶなげはないほどに、忠信〳〵と龜井片岡廣くして、伊勢の三郎がよい、法もんはいつでも勝に駿河次郎、百舌鳥にあらねども辯舌の舌は熊井太郎、こんな事の有が寺の爲には金賣吉次、あい手になる法師なし熊坂の長範、それはなぜといふに、をれは學文がきよふもりじやと思ふが、こちから見れば智惠は宗盛にさへ無官のなりをして、大勢の中へ書付を出だしとは、つ

らの皮のあつもり、友盛でも有かと思へば、たつたひとりゆふれいのやうにさんけい中へ見えつかくれつ、此やうな事を重盛にしやつたら、さいそうの浪にしづみやらうが笑止、談儀の邪魔になるは悪七兵衛なれど、圓隨說法のしところに取付ふとは奇特千萬、むかしの鍔は切れもしたらふが、圓隨が智惠のしところはおもひもよらぬ事、日本一の功のものとたのむ判官が、森口漬の世話をやく納所坊主や上總屋の五郎兵衛、越中屋の禪司兵衛がきても、中々圓隨が衣の袖にも取付せぬ、不レ入事云出し寺をば六原はれ、一の谷に逃、段の矢嶋の旦方のさわぎしやらうが、やめやつたらよからう、それ共にぜひと思はゞくわんけ出しての事。

二七、衣を著た豆藏

それから寶曆度に馬場文耕の書きました「武野俗談」の中に、淨土宗の曇海と日蓮宗の鐵城との爭の事があり、又町坊主の秀天の四十八夜の說法と云つて、江戸中の大評判だつた者がある、その相手をしたのが日蓮宗の要僧寺といふ、毒々しい口を利く坊さんでしたが、とても坊さんとは思はれぬほど、醜態を露したことが出て居ります。

增上寺の塔中の所化に曇海和尙と云は當時談義勸化の名高き人なり、大坂の了海坊眞長が日蓮禁談義抔云は日蓮の法花經なり、大に破さんと色々誹謗の言葉のみ多し、彼了海坊は法義の節は高

坐の上へ日蓮なりとて人形を上引下し、是めが〳〵と悪口し、さん〴〵に打擲し、我慢の悪僧なり、故に命終る節は其骸六疊敷一ぱいに頭は八ツに腫れたりとかや、陀羅尼品の頭破作七分如何梨樹枝の經文的中たるべしと見る如く、高坐にて日蓮を悪口し、其談義といふは經文釋書はみぢんも說ず、尤知るまじ、只地口秀句畢竟衣を著したる豆藏と謂べし、世の人彼にたぶらかさるゝはいか成る悪緣成事ぞや、されば曇海、日蓮をそしる言葉に日蓮はせんだいの家より出たり、自死の鹿皮をはぎ衣とすと身無抄の書に日蓮自筆にて書れたり、然れば日蓮は……の子なり、せんだいとは……の事を申なり、ゆへに鹿の皮をはぎて衣とすると書たるは……に極れり、夫にふとい奴は廣宣流布と長房を提て、長點の髭題目曼陀羅とは何事、日蓮と云せんだいの子ゆへまんだらを書たが髭をぬいてやらう、此曇海は尾張の名古屋生れなり、毛ぬき鋏のきつい切れものと、毎座右の通悪口し誹謗し、經文の如くならば其人命終入阿鼻獄たるべし、此節酎にまし酒鹽とて、日蓮宗中村檀所の鐵城と云所化、其返答談義とて曇海の談義の近所の日蓮宗の寺へ出で說法して、釋經の本文、天台の三大部、妙樂の注釋、學文の底をたゝき返破するに依て、こんがの流るゝ如く、鐵城の申給ふは、曇海の悪僧日蓮が髭をぬかんとはきつい世話な奴、名古屋の切ものならば日蓮が髭を五百年來ぬかれぬは、其方の祖師法然は藤井元彦と俗名を付、還俗し配流の身となれば、我等が祖師法然が額をたばこ庖丁のやうにぬいてやれと、同敷あふ鵜返しに談義して、毎座

曇海を云詰し故、曇海坊に鐵城と鯨に鯱と世上にて云ける故、大に鐵城を恨み、增上寺にて呪詛調伏の法を行ひ、衆僧を集て鐵城を祈けるとなり、其邪術一旦のしるし有て、鐵城は亂心して說法成がたき時、日蓮宗萬山の所化、法華經を以て祈禱して鐵城本心となり、今は倫根村安穩寺の住僧となる、曇海も三緣山の一文字なりければ、互に其爭ひも差止けり、いま天台沙門秀天と云邪僧あり、其身不身持にしてあちこちと談義にやとはれあるき、辯舌にまかせ多くの人の氣を取る事なり、依之秀天を賴し寺は大きに勸化に德付ける、ゆへに四十八夜、何の回向、彼の修行と云は一七日が中、金銀何程と直段を極めて雇ひ談義說ける事なり、此秀天は町坊主にて本所中の鄕荒井町と云所に大屋次兵衞と云豆腐屋の店を借宅し居るなり、則女房を以て妻の名はお品と云、女子一人おくめとて十一歲、男子松次郎九歲、誠に願人坊主、談義坊主とて此類多し、されば學文は微塵もなし、若此書を見て口惜しくば馬文耕を尋ね來るべし、能敎化してくれん、彼邪僧高坐の上にて平生說處は地口秀句のみ、又は軍書のはし熊谷が先陣問答など、さりとは不便なる器量なり、彼ものが心は日蓮は妙法蓮華經を弘むは妙は女に少しといふ字義、女に少しほうれんげきやうとはいやなやつなり、前は佐次兵衞、後は權兵衞とは何の事なるぞや、子持のかゝさま迚、何程乳が出ぬとて雜司ケ谷の鬼子母神米を借て粥にしてまつる事は入らぬ、天竺の山姥で候と太鼓をたゝひて題目を申は、あれこそ地獄の鹿嶋踊なりと地口の惡口を嬉しがり、聞人いかんぞ不

仁不義ならん、されば此秀天には日蓮宗坂下の要傳寺と云西檀所の所化、正道の說法にて打伏して、秀天が廻る先へは此要傳寺向て破する事なり、今專ら江戸中の氣を寄る所なれば爰にかれが傳をのせたり。

說敎する坊さん等も隨分ひどいものですが、この町坊主といふのは寺も持つて居らず、衣を著た豆藏みたいなものでした。當時は朝談義、晝談義、夜談義といふ風に、毎日三回づつになつてゐる。時間によつて聽衆が違ふ、聽衆によつて談義の振りも變ります。朝詣りの人はどうしても用事の少い老人連中なので、話も稍ゝ穩當にやる。晝は大概婦女ですから、少し碎けた話になる。夜談義になりますと、現在働いてゐる人達が聞きに參ります。秀天などは夜談義を多くした男ですが、この滅法界な藝當をやらかす連中は、大抵夜談義に多い。さうして見ればどんな人が、その話を聞きに來たかといふことも、自ら考へられるわけであり、この世の中の一般がどういふ人物で出來てゐるかといふことも、考へさせられるわけであります。

二八、敎化地に墮つ

坊主には坊主の行儀が無ければならぬ。所謂僧行なるものです。然るに町寺が斯樣な談義をやりますと、所得が殖えるには相違無いが、僧行の方は滅茶々々になつてしまふ。この時分に僧巫法度とい

ふものが出て居ります。これは僧侶や神職の不法を處罰する法律なのです。

說法談義の興味といふものは、元祿よりずつと前からありましたが、その興味は享保になつても盡きません。盡きないのみならず、享保前後に民間で面白づくの景氣を立てるやうになつたのが、この談義說法だつたのです。併しさうなると教化の意味は無くなつてしまひ、世道人心を維持するとか、勸善懲惡とかいふ話は疾の昔にどこかへ行つて居ります。コリヤ又組の惡對が入つたり、役者の身振聲色が入るのだから、何とも御話にならない。儒者や國學者の方も幾分この惡影響を受けて居りますが、これは相手が局限されてゐるだけに、まだ〳〵幅の狹いところがある。從つて一般の修養とか何とかいふことになると、その力も乏しいわけであります。

併しながら儒者の方も詩文風流に溺れて居りますから、儒行といふ方面はやはり亂れて居りました。但吉宗將軍は儒者法度は出して居りません。こゝで思出しますのは、明治天皇が教育勅語を御下しになり、軍人勅諭を賜り、殊に「聖喩記」まであることです。これは私どもの大いに感銘致さねばならぬことゝ存じます。室鳩巢はあまりに儒者らしい人で、政治向の人でないやうに考へられて居りますが、この時世に徂徠學の大流行するのを見て、それが吉宗將軍の心持を移動させはせぬかといふことを、大變氣遣つて居ります。この氣遣ひはまことにしみ〴〵と感ぜられる事柄であります。果して風來山人が寶曆十三年に書いた「根無草」の序を見ますと、

儒を以てすれば彼曰聖人、物を食せざりしや、神道を以てすれば、またいわく貧にして正直なりがたし、佛法を以てすれば又曰く未來より現在なり、冀はまづ鉤と繩とを賜へ、家内の口を天井へつるして而して後、教を受べし。

とある。儒教も神道も佛教もあつたものではない、腹が減つてゐてどうしませう、といふやうなことを云つてゐるのです。教化といふことが全く地に墮ちたことを暴露したものであります。

寶曆にさし續いて明和、安永、天明といふ大凡二十五年ほどの間は、一口に闇黑時代と云はれて居ります。それは田沼さんの政治の所産で、田沼さんが悪いのだといふことを、頻りに皆が云つてゐますが、とにかくさういふやうなわけで、教化を受けつけぬやうになつてゐる。尤も教化する方にも適當な人がゐなかつたにも相違ないが、こゝで振返つて見ますと、享保、元文、寛保といふ吉宗の治世三十年ほどの間、延享、寛延、寶曆といふ家重の治世約二十年といふものが、全く無事な世の中のやうに思はれてゐるのです。それに相違ないのでせうか。

元文元年に文金と稱する小判が出ました。それまでも幕府は米價干渉に就て、いろ〳〵な方策を講じて居りましたが、遂に米價統制を思立ちまして、享保二十年十月から御定直段をきめて居ります。それがこの文金の出來る時、即ち元文元年の六月に至つて、この御定直段をやめ、享保の金銀を改鑄によつてその質を惡くしました。この文金によつて落著をつけたといふことは、元祿の改鑄によつて

物價が騰貴し、享保の新金によつて物價が低落したことから教へられて、文金といふものを思ひついたのであります。

この邊から資力のある者どもを物持と金持との二ツに分けるやうになりました。文金によつて落著は出來ましたが、貨幣の變更による物價の變動だけではない。後から見ますと、まことに暮しいゝ、樂な世の中だといふので、「四貫相場に米八斗」などと申しました。昔は錢相場といふものがありまして、金一兩に就て錢何程といふことになる。元祿以前から四貫を切れることが多かつたのですが、明和、安永度になりますと、五貫に落ち更に六貫に落ちるといふ風で、だん〳〵錢が安くなつて居ります。錢が一兩に四貫であつた當時は、米が一兩に八斗だつたといふ、その時分の諺なのです「浮世三分五厘」といふのも一日の米代の事で、一日分を白米五合として申したのであります。

二九、奢侈贅澤でない結構

そこで「寛保寛延江府風俗志」などをちよつと眺めましても、江戸の暮しといふものが、上下となく結構なものになつたやうに書いてある。

上昔の江戸荏原郡を、どこの事やら知らぬ程の結構に成て、月々日々古しへに遠ざかり、何となく美麗結構なる事ばかり、次第に雪の積る如く、いつか結構づくめに成て、御乳母羽二重ずれに

生立ゆゑ、廻りよりもそやし立、堂上そだちの如くになり、華美結構ばかりのみ知る事にぞなりぬ、彼れは左もあるべけれども、他國遠國より年季奉公の族も、同樣に身滯持となれば、國の有樣を忘れて次第に身を持上げ、金銀さへ手廻れば、根生の富貴者の如くなり行て、子孫に至りて何の教へなく、只富貴と愛におぼれ果、人は只命さへ有れば濟ものゝやうに、遠慮會しやくもなく、ほしゐまゝにするゆゑに、始は小室燒の茶碗なりしが、錦手の茶碗に成り、夫もおもしろからずとて、南京燒或はごす燒抔に成、膳椀も日光膳に靑漆椀、或は挽おしき抔にて有しが、黑椀銀紋付になる、夫より露色內あらい朱金いつかけ、膳にも黑塗金紋抔に至りしか、今は南京燒の茶碗にあし打抔にて、朝夕の食事になり、夜食夫々器物を取替用る也……

この結構といふ言葉は、生活の向上といふ意味もあり、文化の惠みといふ意味もありますが、奢侈贅澤ではない。江戸時代に奢侈贅澤といふことは、どういふ意味であつたかと云ひますと、つまり分限次第で、すべてその所得によるのですから、三千石の人には贅澤でないものでも、二千石の人にはもう贅澤になる。贅澤といふことは、所得とつき合せて考へるやうになつて居つたので、一概に奢侈だの贅澤だのと云ふわけには參りません。明治時代の事としますと、行燈がランプになり、更に瓦斯、電燈になつたといふことは、瓦斯や電燈を使ふといふのが結構なことなので、それは別に奢侈でも贅澤でもないのです。

これは祿のきまつてゐる武家だけの話ではありません。町人や百姓のみならず、下々の潤ひと申しまして、職人から日傭取に至るまで、自然に暮し向が結構になる。もうこの頃で見ると、糠味噌汁などを用ゐる者は無い。皆味噌汁になつて居ります。一般の受用するところの、普通の暮し向が變つて來たのです。近頃では棟割長屋がアパートといふものに變りました。それが家賃の上に何程の變りがありませうとも、奢侈でもなければ贅澤でもない。皆さういふ風になつて行くのですから、これも結構になつたといふのでせう。つまり物資は富贍であり、供給が十分だからさうなるので、それから上は金次第といふわけですけれども、前に比べると生活費の歩合は強くなつてゐる。現在の受用はかなり引續いて居りましたから、それに慣れてしまつて、何だか必要のやうになつて來る。從つて昔のやうな枯淡な暮しに立戻るといふことも、ちよつと出來かねるのです。

さういふ狀況が卽ち時勢生活といふべきものなので、何分儲けにくい世の中ですから、無理をするか、非常手段でも執らなければ、町人どもは成功しない。稀に成功する者があれば、その勢に乘じて成金氣質以上の氣分になりまして、もつと儲けたいといふ事になる。畢竟擇ぶところが無いわけで、盛に横暴なことをやる。そこでこの頃から、町人憎みといふものが際立つて見えるやうになつて參りました。

三〇、當世追從第一

井上金峨などは當世を評して、農は苦、商は樂、士は苦樂の間に在り、と云つて居りますけれども、士も決して油斷をしてゐられるわけではない。分度生活と云つて割引の暮しをする。身の上第一といふので、自分の身體や一家を持ちこたへるといふ方へ力を入れるが、先づ以て衣食住が何よりも大切でございます。殊に出來事の無い世の中ですから、わけても武士の立身出世などは出來ません。その中で立身出世をしようといふことは、格別の心がけが無ければならぬ。そこで「諸聞集」などを見ますと、追從論が書いてあります。

治世ノ時ハツイシヤウヲ笑フベカラズ、諂ラハネバ立ガタシ、亂世ノトキハツイシヤウヲ笑フベシ、義ヲ以テ第一トス、若シ治世ニ義ヲモツパラトスルトキハ立身シガタシ。

亂世ニハ義ヲ捨テバ子々孫々マデニ恥ヲアトフナリ、命ヲ輕ジ、義ヲ重ズ、治世ニハ義ヲ輕ジ、金ヲ重ズ。

追從は穩な世の中の產物だといふので、隨分醜態を極めたものですが、まんざら謊でもなかつたことは、次の話を見てもわかります。

前川玄德ト云フ不學ノ針醫アリ、シカルニ治世相應ノ者ニテ追從ノ上手ナリ、時ノ老中松平左近

將監ニ取入、元文年中召出サレ針醫ニナル、延享四年卯ドシ左近將監御役召ハナグレタリケレバ、時ノ老中酒井雅樂頭ヘ付入、追從シテ又モナキ氣ニ入ナリ、シカルニ亦酒井御ヤク上リケレバ、時ノ老中堀田相模守ヱトリ入テ心易思ワレケリ、是左近ドノ、カゲニテ公義ヱ召出サレタレバ、左近ドノ役ヲ上ゲラレシトキ、ナヲ〳〵義利ヲ立テ機嫌ヲ伺フベキヲ、御役上ルトハヤ出入ヲヤメ、酒井ヘトリ入、毎日機嫌ウカヾイ、亦酒井役上ルト出入ヲ止メ、堀田ヘトリ入、毎日ノ機嫌ウカガイ、是義モ信モカケタル者ナレドモ、時相應ニ生レツキタル仕合ナリ、義ヲ立テ左近殿ヘバカリ機嫌ヲ伺ハヾ、御扶持モ心モトナシ、治世ニハ義スタルモノナリ。

元文改鑄の後十年、享保の改革から申せば三十年内外の間に、これほど變つて行つたのです。一時は引立つたやうに見えた世の中も、全く寢入り込んでしまつた。それはどういふことかと云ひますと、生活費の擴大から來てゐるので、皆身過ぎに忙しい。自覺してもしませんでも、食ふ爲、暮しの爲に働く方が多くなつて、すべてが職業化して參ります。さうなると文教だの、風化だのといふものは、飛んでもない話になつてしまふ。世道と云へば、暮して行くといふ方に解し、人心は無論衣食住の方にのみ引かゝつて來る。

寛延四年の落書に「當世今川狀」といふのがありますが、これは當時の寺子屋の教科書であつた今川狀に模擬して拵へたものです。

當世今川狀

今では兩側諸役不法の賄取込に對し條々

一 文道を知らず、武道は思ひもよらざる事

一 能囃子興行を好み、無益の費たのしむ事

一 小身の輩、賄賂を遣ひ、居屋敷取らるゝ事

一 たいだん山師の輩、金銀次第忽ち役替致す事

一 先祖の山庄寺塔以下、賣ても內證持つべき事

一 君父の重恩おろそかゆへ、かゝる世がらと成る事

一 臣下の人から欲心にして、取込工夫專一の事

一 人に輕薄見る如く兎角油斷ならぬ事

一 身の分限をわきまへず、袖の下からつかまする事

一 人來る時はつかわぬ仁は對面能はざる事

一 おのれがどうよくにまよひ、少の音物嘲る事

一 非道と知て取た替りにめつたに取成いたす事

一 賢人でいかず、佞人此節世に出る事

右之條々立身願之輩常に心がけらるべし、弓馬合戰の嗜に及ばず、切者なぶりにて弁舌第一也、先は役替致すべき仁は、金銀のふしては立身減らざる間、四五兩一分の利にて少々ふやさるべき也、少金の内隨分慥成輩に預け、かりそめにも外の用に遣ふべからずといふ事いわけなる哉、爰を以て水は方圓の器に隨ふ如く、兩側の心に隨ひ、善にも悪にも當坐の間に合ふを肝要にして、件の一物握らせ次第、國の主とも成べきよし申傳ふ者也。

これを見ても人心の荒んでゐる有様がわかりますし、又身過ぎ世過ぎが第一で、上下ともにそれにのみ屈託してゐたこともわかると思ひます。

三一、下層まで行渡る金廻り

時勢生活は結構になりましたが、その爲に人に油斷させぬやうになつてゐる。それを切抜けるにはどうするかと云へば、知足安分より外に無いと教へて居ります。

今天下太平の政化をほどこしたまふより四海の靜なる事を有り難き事に思ひて、銘々分限を知るべきに、都鄙共に上下共に奢に長じ、その事共高上に成て、兼て足る事を知て慎しむべき事、心得あるべき事也。（寶暦聞書）

昔の枯淡な生活に返れといふのですが、さういふ生活の矯正といふことは、目前の景況から考へて甚

だ困難です。海保青陵などは、家宣將軍の奢侈は將軍の身邊、云はゞ御本丸だけのもので、世の中の奢侈ではない、それを吉宗將軍が立直されたけれども、家重將軍の時（寶曆、天明）になると、天下一統が奢侈になつてゐるのだから、直すと云つても容易に出來ない、と云つて居ります。

それから「金銀通用記評判」などを見ますと、

今昔ト比テハ日本金銀多ク成、下賤ノ輩モ金銀ヲ多ク持ツ事ハ世ノ風儀ト云物ゾ、天下泰平ナル故ニ、亂國ノ時分トハ人ノ志モ無事ニナリ、武家ヲ始メ四民四道ノ者、吾知ラズ、氣モ寬悠ニ成リ、隙アル儘ニ游山翫水ニ心ヲ動ス、是ヲ奢トハ云ヒガタシ、時ノ風儀ト成行マデ也。

とあり、又、

何ゾ天正文祿慶長ノ時代ト今ノ時ヲ見合テ違ヒアル以テ世ノ奢ト云ベケンヤ。

とも云つて居ります。金銀が昔より多くなつたといふのは、金廻りといふことであります。元祿には金が伸び、享保には通貨が縮んだに相違ないが、さういふことの外に金廻りといふやつがある。家康などは通貨の分量に就て考へてゐたことがあつたやうですが、同じ通貨であつても、金廻りのいゝ惡いといふことがあるのです。これは物資の集散關係にもよれば、金銀の融通狀況にもよります。殊に下々の者まで金銀を多く持つてゐるといふことは、物價の關係もあり、勞銀の關係もあり、その條件はいろ〳〵ありませうが、だん〳〵下層まで金銀が廻るやうになつてゐる。これによつて時勢生活の

振合も變つて參りまして、遂に風儀をなすといふほどに立到つたのであります。

一方では日錢が取れる、小錢が儲るといふ手合がだん〳〵多くなつてゐる。さういふことは日本の經濟史の專門家に御しらべを願へば、よくわかるわけですが、金次第といふことも、錢廻りといふことも、いつも物資が豐富であり、供給が十分であるからの話であります。

ところで「諸聞集」の中にかういふ記事がある。

大金持ノ商人ハ山ニハナキモノナリ、海近キ廻船自由ノ地ニ有モノナリ、大金ヲ集ムルハ田畠ニテ員數ホドアリテ集ラズ、商ニナリテハ大金貯ガタシ、山方ノ商モノハ馬ニツミ人ニ負荷セテ其所ノ物ヲトヤカクトスル故、高利ヲ取ルコトカタシ、海方廻船コレアル地ハ遠國ヘハ我國ノ產ヲ積テ其好ムトコロヘ船ヲツケテ高利ヲ取テ賣、又其所ノ產ヲ買求テ歸リ、我所ニテ賣ユヘ、一上下ノ船ニテ三度ノ商セシユヘ、大金ヲマウクルナリ、依之廻船ニ風波ノ難アリテ時々破船ストイヘドモ身上ヲツブサズ、年々船ヲ增作ス。

これだけ見ましても、享保度には拔荷さわぎだけでない樣子がちよつと見える。寬永の鎖國令によつて、海外渡航が無くなつてからでも、沿海の漕輸は廢つて居りません。今この短い記載を解說する資料、寬永以降——特に元祿頃から活潑になりました海運、海商の御話の若干を持つても居りますが、かういふことから見ましても、當時の物資の供給といふものが、なか〳〵盛であつたことは思ひやら

れるのであります。

三二、御話の無い二十年間

それですから目前の供給に騙されて、それに釣込まれて行きますと、何とも致方の無いことになり行くのは當り前の話なのです。そこで分度生活といふことが唱へられてゐる。百兩の生活のものを、七十兩乃至八十兩で濟す。控目な、内輪な生活です。さうでなければ遣切れぬからですが、さうなると又退嬰氣分になつてしまつて、何から何まで皆儉約になる。さうしてつゞましやかにして行く、目を瞑つて暮す、といふ風にすれば、どうやら通り拔けられぬことも無い。

その代りさうやつて參りますと、何分出來事の無い世の中ですから、安泰に過して行くことは出來るが、面白くも變哲でもない、たゞ經過するのみ、といふことになつてしまふ。經過してゐる間に何の變化があるわけでもない、徒につながつてゐるに過ぎないのです。それですから江戸三百年といふうちにも、延享、寛延、寶曆といふこの二十年間の御話といふものは、歴史の上に無いばかりぢやない、隨筆にも雜著にも甚だ尠い。あらゆるものから置いてきぼりになつてゐるのです。

何事も控へ目に、内輪にといふ時代でありますから、出來事も自然内に潜んでしまつて、表面へは出ない。内訌といふ形になります。それでは人心は倦怠せぬわけには參りません。人心が倦んで來る

と同時に必ず氣拔けになつて彈力抔はなくなります。こゝに於て風俗は頹廢しなければならぬことになり行くのであります。

三三、記錄化された流言蜚語

際立つた景氣、不景氣といふことも無い世の中で、まことに變化が無いやうに見えます。欠をしながらでも暮してゐたかと思はれる。そこで寶曆二年の落首に「近年はなき事咄し替道具御役御免と俄評定」といふのがある。「なき事咄し」といふのは後來「出來物語」と云ひまして、讃話のことです。後には「かつぐ」と云ひました。どういふ筋道でさうなるかと云ひますと、近頃ならば流言蜚語とでもいふところでせう。その樣子は「教訓衆方規矩」に書いてあります。

浮世の頂上といふべき疾あり、櫓下の炭團屋の裏に古達樣とて不思議な咒詛する人がござる、あぶらげやの娘に狐が著たを只一加持でのかせ、天神前の浦召屋の四平治といふ小意地の悪い男が、耳から蛇の出たも護符一服で、早速愈たと取沙汰すれば、一番に馳參じ著到につき、扨も〳〵と觸歩行、跡がたもない流言の虛の皮を聞や否、かき寫して持歩行、見て來たやうに云觸すも、皆浮氣から前後を忘却した虛氣といふ疾。

口で噂をしてゐるやつが、いつか手紙になつてひろがる。その手紙が又一轉して記錄のやうな體裁

をなして行く。そこを繼合して見ると、流言蜚語なるものから立派な出來物語が――まるで最初から記錄されてゞもゐたかのやうに見えて參ります。最初は單なる噂であつたのが、眞面目な通信となつてひろがり、記錄となり、更に講談化した實錄體小說と云つたものになるのですが、その模樣は「下手談義」の中に書いてあります。

惣じて昔も今も何者の何の所得ありてか、そら言を告り出し、言觸らす事か、扨々惡き仕業かな、年々色をかへ品をかへる流言の妄說、懲もなく每年化されて恥ともおもはず、一盃づゝうま〳〵と食るゝ衆中も、おもへば餘程鼻の下のゆたかなる人々ならずや。（下手談義）

好奇心は何時でも誰にでもありますが、特に退屈してゐる世の中には奇談珍說を吟味する暇はありません。聞き耳を立てゝゐるのですから、早速に大喜びで少々でも變つた話なら受入れます。それは何よりのあくび除けで、面白さも割增しをして盛に興がります。

何でもかでも聞や否や堪能なく其まゝ打まけ、己が聞いた時より一割もかけて話せば、是は珍說珍說と、其儘でもすむ事か、又二割がたも潤色して語るを、裏店の針賣婆が聾の癖に聞たがりて、小首かたげてやう〳〵と片端を聞うけ、己が商賣の針を棒ほどに云ひなせば、是を聞たる下女はしたが、御新造へ追從に針賣がこはい咄しをいたしましたと、尾を附ての虛が實となり、それ御家老の膳內殿へも知らせよ、番町の奧樣へも御存じかしらねど申上まゐらせ候と、文をかくやら、

面々の宿へ書付て送るやら。（同前）

さうしてこれが後の世まで殘りまして、あの宮城野信夫の敵討だとか、松葉屋瀨川の敵討だとかいふものになり、芝居、淨瑠璃、講談の種になつて居りますが、實は根も葉も無いことなのです。もつと小さい事になりますと、本所の德山五兵衛の中間の尻へ犬の尾が生えたの、番町の金田彌七の家には七十一になる老婆が產んだ鬼子がゐるの、阿波大明神が向島へ飛んで來られたのといふ讃話が、實際あつたかのやうに云ばれてゐる。

讃話に就ては「續下手談義」にもかういふことが書いてあります。

高砂町の謠の師江口采女へも傳言いたす、先月の御狀、本町の衣屋より、今朝程相とゞき、具に披見いたし候、其地色々の珍說、筆實に御書附、別して一笑致候は、俗が山伏の眞似して、護摩壇で祈禱する者出來の由、扨〳〵長生すれば、希有の義承り候、其外瀨川菊之丞が六十の賀に、振袖の小袖が千二百ほど集たの、法華經ばかり讀で他宗謗らぬ日蓮宗があるのと、珍しい事のみ、偏に江戸に居た同然、禮いふてやる處なれど、爰が骨肉の因、遠慮なしに返詞いたす、惣て此客人が癖で、珍說〳〵と風聞を聞たがり、樂首の類を書寫して、他にも見せ、自もたのしむが恒也、さん〳〵よろしからぬ事、惣て樂首と云もの、古へ今、貴人高位の御うはさが間々有もの、其國に在て其大夫をそしらずといへり、貴人の噂を下ざまにて、はしたなく云さへ忌憚らぬ不敬の罪

なり、まして口がよいの、作意がおもしろいのと、樂首風説書うつして弄ふる事禍の基、殊に旅がけ抔の書狀へ書入らるゝは、猶更遠慮なきといふべし、旁無益の御事に存候、源慎み深き人の致事にて無之候間、向後ふつと御書寫、人に御見せ有まじく候と、書中にも委細にあれども、能々合點の行やうに云て下され。

落首、落書は古くからあるので、珍しいことでもありませんが、これは寶暦度に於て珍しい話、變つた噂を傳播させた模様が書いてある。それだけ又通信の便が開けて居り、交通往來の便宜もあつたのです。人に賴むのを幸便と云ひ、三度飛脚も開けて居りましたから、飛脚便もある。勿論今日のやうなものではありませんが、この「續下手談義」の文は、京にある伯父が江戸にゐる甥に向つて、落首や落書を書送つてはならぬ、といふことを注意してやつたことが書いてあるのです。その傳播力も後々ほど、文化の恵みを受けて增長いたしました。

三四、隨筆雜著にも講談にも

この時分はさういふことまでして、出來物語を記錄化する段取りになつてゐたのですが、これは隨筆雜著の中にも澤山あります。後々まで人に知られてゐるものに、木室卯雲が安永七年に書いた「奇異珍事錄」、大鄕信齋の「道聽塗說」などがある。「道聽塗說」などは隨分長く續いたもので、文政八

年から天保元年まで、越前鯖江藩の御儒者であつた信齋が、時々江戸に起つた珍しい事を書いて、御國にござる殿様に御知らせ申上げた書付が、これだけ溜つたのであります。

先年「未刊隨筆百種」に入れました「事々錄」なども、やはりさういふ意味合ひの書集めですが、「事々錄」に就ては解題の中に書いて置きましたから、その文を御讀み下さるとよくわかります。

天保二年より嘉永二年に至る十九年間の風聞雜說を集錄せしものなり、集錄者の氏名は知らねど大御番を勤むる人の筆に成れる證あり、所謂貧乏旗本にもせよ、或る階級の武士の見聞範圍が如何に限局せられたるかは、此の集錄によつて善く親ひ知らるべし、凡そ此の種のものを漫然社會記事の集錄として看過せんは頗る心なきことゝ思はる、其の社會記事なることは云ふを須ゐず、然れども此の種のものにて一般普通に記載されたるは殆ど無く、大抵極めて偏局せるものゝみなり、是は階級制度の爲、各自の生活が割據のさまに成り行きて、殊更に外聞を隔絶し、箇中との消息を遮斷せし故なり、若し此の限局されたる見聞の範圍に依りて、或る武士階級の生活狀況を考ふるものあらば、稍ゝ面白き收穫なきにもあらざるべき歟。

大御番などの内に何故に斯る集錄者を生じたるか、是只だ閑暇のまゝにせる物數寄にもあらず、又本より後來の江戸時代を考へん者のためにとての親切なるにもあらず、大御番は二條大坂兩城の在番を本職とし、隔年の勤務なり、非番にて江戸に在るは云ふまでもなく、京坂に服務せるも

繁多ならず、旁〻宿狀又は宅狀と唱へて迭に消息を通ぜる習ひにて、それも自身の安否を知らせ、家内の無事を告ぐるものに止めず、何時よりか其の樣變り、過眼錄に云へる『飛檄帖といふもの』にこれは安永七年より八年迄、大坂在番したる人の子息並に友人留守中、怠らず毎月順會ありて、其度々珍說雜話さまざまの書狀にて申遣し、返事往復共に其事を錄したるものとみゆ』の如きことなり、やがて本書の如き體裁のものを傳ふるに至れるなり、故に後世よりは勿論、當時にありても、何ともなき奇ならず妙ならぬ事を記するも尠からず、同勤の動靜その他につけて殆ど意味なきことのやうなれど、是ぞ樂屋落の類にて、其の人々に取りては案外の興味を惹くものなりしを疑はず、本書の如きものを讀む者は先づ其の編述の本意を知りて、且つ其の應用利用を擴むべきに似たり。

木室のは友達連中に見せたのですが、これは武家同士のものです。武家同士で珍しい話を通信したのは、士の中だけでありさうなものですが、それがやはり民間に寫し傳へ、聞き傳へられて、畑違ひだけに餘計に面白くも珍しくも扱はれて、武家町家御互ひ樣に、時の流行でさういふ事をし合つて、後々まで一種の風をなして居りました。ですからそれがはやり出した時の樣子は、隨分盛なものであつたらうと思ひます。現在ではその頃の奇談珍說は傳はらぬ方が多いのですから、當時は夥しい分量だつたのでせう。「續下手談義」のは民間のことですし、「事々錄」のは武家のので、多少模樣は違つて居

りますが、御互ひにそれを珍しがり合つたことは時代には拘らず慣であります。

それが又甚しく流行し出した時分に就て考へさせられることは、早耳自慢の人があつて、何でも珍しい話を聞き出してよろこぶ。そのよろこぶのをうれしがつて、講釋師の馬場文耕などは大分新しいところをやつた。遂にそれが爲に獄門にかゝるやうなことまでやつたのですが、畢竟皆が聞きたがるから、思はず知らずさういふ成行きにもなつたのだらうと存じます。又それが講談をはやらせもしたのです。

當時の講談には實講と狂講とありまして、銀杏和尚の靈全だの、深井志道軒などは狂講の方でありました。志道軒の如きは大口を利いて、坊主や女の悪口を云ふ時は聞いてゐられぬ程だつたと云ひますが、やはり時代は時代で、さういふ狂講の連中にも妙なところがある。「名家年表」の明和二年のところを見ると、

三月七日深井志道軒歿、年八十四、唱神學

と書いてあります。あのバレな講談をする志道軒が神學を唱へたといふのも變ですが、彼の書いた「元無草」や「志道軒五癖論」を讀んで見ますと、立川流といふのはあんなのぢやないかと思はれる調子が見えます。彼にも相當の主張があつたことは、「元無草」や「志道軒五癖論」に書いて遺されてゐるのであります。

法は釋迦孔子より始るやうに思ひ、心のかたちをしらず、佛法には心を妙法とせつぱし、妙樂大師は心をゑんそんといひ、眞言には心法色形と說き、儒には中庸に上天と名付たり、すべて心の形をしらず、其心のかたちしらんとせば、萬物のうごく形みな我心の形の動也。

佛書に世界の始をいふ時、光音天、下りて人の種となりと云ひ、儒には天より生民をくだすと云ひならはせり、愚迷の爲にかくいふなるべし。（元無草）

男女の愛樂、古今に貫首たり、三敎といへ共まつたく是にもとづけり。（志道軒新五辯論）

三五、心中から駈落へ

一方ではさういふ風で、タワイもなく日を過して行つたやうに見えますが、その間に五千石以上の高級な旗本が大分潰れて居ります。これは大名のやうな心持でゐた代りに、例の儉約による分度生活なんていふことは出來ませんから、たうとう身上を潰してしまふやうなことになつた。江戸時代に五千石以上の旗本が少くなつたのは、寶曆前後のところでありますし、又世の中が詰つた〳〵と云ひ出したのも、やはり寶曆の半を過ぎてからです。

嫁だの婿だのといふことに就て起る事件で、いろ〳〵處分された申渡が殘つて居りますが、これは例の持參金とか、土產金とかいふものに關することなのです。度々嫁や婿を貰つては追出す。さうし

て持參金や土産金を取つてしまふわけで、婿食ひ、女房食ひなどと申しました。かういふ事柄も今はじまつたわけではありませんが、この頃が一番さういふことの爲に刑罰を受けるものが多かつた。身分のある者で賭博の處分を受ける者が多かつたのも、やはりこの頃です。

吉原は兎角に寂れ勝手であつたのに、私娼が繁昌し出した。謂はゆる岡場所なるものが流行して來た。芝の同朋町、麻布の藪下、千駄木伊呂波、愛敬いなり、朝鮮長屋、滿福寺門前、堂前、じく〳〵谷、といふやうな邊の私娼が大變はやり出したのです。この公娼が衰へて私娼がはやるといふのはどういふことか、大いに考へて見なければならぬと思ひます。

この男女關係のことを見ますと、享保度が一番ひどい姿をなしてゐる。一ツ寢をさせぬからと云つて心中した若夫婦があり、難產の癖があるから本夫が添寢せぬといふので、密通した女房がある。さういふことが記錄されてゐるので、これほど暴露的な記錄が殘つてゐる時代は少いと思ひます。

間男なんていふことも、享保度には例の妻敵討（めがたきうち）といふやつで、武家の間男騷ぎが賑かでありました。もう享保、元文の際になりますと「不義は御家の御法度」といふ武家第一の金看板は已におろされてゐたのです。上方では元祿、寶永に心中が大流行でありましたが、江戸では享保、元文度が心中の大流行なので、それも上方のは多く新地新茶屋の私娼が相手であつたのに、江戸に於ける享保、元文度の心中は、さういふ商賣人でない者どもだつた。かういふことも亦江戸の風儀がどんなものであつた

かを考ふべき、一つの事柄であります。

そこで吉宗將軍が氣を利かして、武家の若い女が夫に別れた場合には再緣させるやうに、盛に再緣奬勵をやつた。大名の寡夫人でも再緣する人があつた位です。それほど氣をつけてくれましたが、一般には徹底せず、甚だ面白からぬ有樣になつて居つた。享保、元文度を過ぎて寶曆度になりますと、もう心中なんぞをしてゐない。駈落といふやつで、家出をする。さういふ風になるに就て「當風辻談義」にはこんなことが書いてあります。

男女別ありなんどゝ窮屈なる事のみいふて若ひ娘に勞症病出させ、四火患門すへる段で、じだんだ蹈でもかなわず、たとへ鉦打て駈落しても心中さへせねば、また顏を見る時節もあるべし。こゝばかり日は照らない、どこでも氣樂に暮せればいゝ、といふので、當處を離れて夫婦になる。勿論情死などをするつもりぢやありません。それが娘達の場合だけでなしに、間男をしても、やはりさういふ調子合ひでやつてゐる。ひどいやつになりますと、間男に姦婦を與へて、同町內にだけは住んでくれるな、と云つて寬大な本夫が追拂つた。然るにその姦夫姦婦は平氣で同町內に住んでゐるのみならず、あべこべに本夫の家に火札を貼つた。火札に就ては法度がありますが、この家を何月何日に燒拂ふといふことを書いて貼付ける。それを火札といふのです。この火札を貼られますと、その家は店だてを食ふ。町役人がそんな厄介者は町內に置かないやうにする。地借であつても追立てられるの

です。それを知つてゐるものですから、自分達がそこにゐないといふ約束を逆にして、本夫を土地から追出す爲に火札を貼つた。勿論これは處分されて居りますが、さういふやつさへ現れて來た。男女の道といふものも、寶曆度にはひどいものになつてしまつてゐるのです。

三五、廢頽せる男女の道

誰れも明和、天明の間を闇黑時代といふ、しかし突然眞暗になつたのではありません、白晝になるのに黎明を經ないことはない、夜になるのも日が暮れてから後のことです。殊に都會生活、三大都市といふ中にも江戸は物の自由が足りる、物資が富贍で供給が潤澤、誰も彼も思ふまゝに受用し得られる、これが所得に拘らず生活費を擴げて行く。元祿、寶永の通貨膨脹に調子づいた消費の癖が附いて廻はるのみではなく、我儘が出來易く、勝手がいゝために、知らず〳〵暮し負けをする、些少も油斷があれば身上の破綻を招く。武家の分度生活、特に境涯を割引して、消費制限に太い線を引いて嚴守する意味も他處にあるのでない、町家にしても內輪に暮すことが何よりでありました。足るを知つて分を守るといふのも、畢竟は消費制限に過ぎません。儉約といふ意味に使用された始末といふ言葉にしても、只だ生活を簡易にして經費を輕減するだけでなく、能く收支の計算を考へて、跡先の分別をしなければならぬといふ心持から出て來てゐるのです。

別けて享保の不景氣以來は、大小の店舗共に商家の營業ぶりが變り、薄利多賣の風を生じ、商内高も從前の三倍を目掛けて、上手に買はせる趣向に勉めました。小賣は前賣から振賣までが、氣を揃へて其處を隙ぎますから、眞に錢を持たせて置かない世の中になりました。たとへば肴の切賣、冬瓜の立賣、米の一升買はをろか、味噌、鹽、薪まで一日の入用ほど十六文とか十八文とかで賣る、といつた安排、總て便利な勝手のいゝところから、買ひいゝまゝに些少の金錢でも手殘りがなくなり、思はずしらず買ひ過ぎるやうにもなります。それゆゑに儉約といふよりも始末といふ方でなければならなくなるのです。斯ういふ有樣で誰も彼も其日の事に紛れて、只だ惑々として暮してをります。人心は利害得失の外に何にもない、從つて教へるの躾けるのといふことが出來ません。嗜むの心掛けるのといふ隙もない、行當つた處に法律が光り、刑罰に仰天する迄で、そこから六諭衍義大意や五倫五常名義へ撥ね返べされるものではない、玆で其等を思ひ出しさへいたしません。

六諭衍義大意や五倫五常名義を忘れ切つた寶曆の江戸市民、同時に武家も氣の毒千萬なものでありましたが、其頃拜伏念佛を流行させました法念といふ坊さんの書きました「續人名」の中に、江戸の町家の婦女の樣子が云つてあります。如何にも闇黑時代の來るべき必然の姿で、寶曆は黃昏よりも更に暗く、現に薄夜の觀を呈してをりました。

わけて町方の風俗、けや〳〵しく髮の多きを嫌ひ、めぢたき髮の中をはさみ、髮のゆひやうけう

とく、元結際を頂の上へ打揚、脇髢夥しく出し、後の方は丸くして中を割り、つぶりのなかばへ髢を出し、襟の生際三四寸搔上げたるは、短き襟を長く見せんがためなるべし、又兩のはへさがりを頬先まで引さげ、額の生際を結ひ、白粉こと〳〵しくぬりたて、口紅粉太くつけ、肌には五分長の襦袢を着、脚布は黒ぶしへ掛るばかりにながくし、或は表を無地にして、裏に縫模様の小袖、又八寸模様とやらん裾廻りにばかり淺々しく模様のつきたるに、裏のふき太く、二ツ襲の一ツ前に、帶を胸高に引しめ、平くけの腰帶、いしきへ引かけ、天鵝絨緒の五枚重ねのかみこぞうり素足にはき、裾を蹴散らし、あゆむ粧ひ、さながら遊女役者の風情にひとしく、

又廿二三の若女中は素顔にて髪をゆひ、黒小袖又は藍みる茶又は小紋などの表に、御納戸茶の裏をつけ、幅の狹き帶にほそくけの腰帶を引しめ、さながら年寄めきて、かうとうにおとなしき風情もあれど、心も形ほど殊勝かと思へば左はなくて、此風俗を洒落といひ、粋といふて一段うはての好む拵へ也、されば斯様の身拵へする女は見目もよく、外の女の拵へを愚痴なの重ひのと見下し、器量自慢のすまし顔なるも有、又四十に足らぬ若後家の鐵漿黒に薄化粧し、髪の掛り髢の出し様は昔を殘し、はけは元結際より四五寸ばかりに切りたるが、黒き兩面の小袖、同じ色の琥珀の帶引しめ、一ツ印籠に匂の玉をつけたる扇をさし、素足にて在原の昔を慕ふ風情なるも有、又嫁などは未た十ばかりおとなめきて揚鬢に髪をゆひ、袖はたけと等しく長くし、眉に墨を入、

けうときばかりに拵へ、さながら舞子の如く仕立て、又召つかひの女は兩方の鬢を張出して逆様に搔上げ、頬より目の端へ紅にて色取、曾我五郎ともいひつべき顔にして、髪は櫛卷とやらいたづら髷とやらにゆひなし、幅廣き帶をいしき迄卷き掛け、帶の結びを竪にしてゐしれぬ風俗するも有。

只とにも角にも遊女役者の風を似せ、どうがなして男の思ひつく樣子と思ふ心から色々と風流に粧ひ飾るなれば、夫のおはします女中方、わけて罪ふかく悲しきことに思ひまゐらせ候（續人名）

斯く老若の婦女の時世粧を指摘して、其心術に及んで轉た慨歎に堪へなかつたと見えます。更に、

夫の職により他國つとめ留守の內又は在所逗留の間を考へ、召仕のうち心をきなき女子をかたらひ、日比心に懸し男を引込、又夫の朋友などゝ馴染、或は色々の手管を廻し、芝居役者又は大神樂の笛吹男などを引込、芝居をかこ付に野郎かげまと、茶屋にて出會、或は家の男又は手代等になじみ、隨分忍び御伽坐頭伽坊主などを愛し、手前の夫のものを盗出し、手前の身の皮を剝いても密夫に是を與へ、內にて逢がたきは寺參りよ、物詣よとかこつけ、茶屋を拵へ、下女に物をとらせ抱込、下邊を賺して芝居などへ遣しを委にてゆるゝとあり、又兄嫁の身として夫の弟と不義をし、姑の身として娘にとりし聟を寢取りて、實の娘を憎むなど、別けて憎ましく見へしは、夫は卑しき身なりをして、肩に棒をかづけ、わづかの商ひに朝とく出て夕に歸り、一日辛勞して

少しつゞの利分をもうけ、女房を養ふに、女房は髪化粧しやんとして手白く足白く、身拵へすこしの縫物仕事をするを鼻にかけ、立なものを横にもせず、烟草くゆらせ、例の密夫をむかへ、酒肴を催し、樂しみを盡し、夫の歸らん頃は、何喰はぬ顏つきにて、縫物を抱え、雨などの日は夫は濡れしよぼたれて泥だらけになり、くたびれ足を引づれて歸るを、湯にても沸し置、早々遣はせんともせず、足つゞでにそこな水汲てと、却て夫をつかふ心ざし、さりとては男もならぬ行跡なり、

右述べあかし候、不義いたづらは中より下にばかりにも限らず、中よりうへの奥樣と呼ばれさせ玉ふ内にも、歴々の御奉公勤なされ候御女中さま方の内にも、折ふしは有ることのよし、わけて大切なる御事にておはしまし候也（同前）

斯うした現狀であつて見れば、明日が心配になるよりも、今日只今が見てをれないではありませんか。心ある者は是非とも起たずに居られない、何としても坐らせては置きますまい。

三六、景氣のよかつた高利貸

それから又この時分の事と致しましては、高利貸がはやつた。この高利貸といふものは、金儲けの無い時分に出て來るもので、借りる方から云へば一時凌ぎ、全く後先の分別を失つた人間です。或は

自暴自棄になつてもゐました。この時分に江戸ではやつた高利貸は、浪人と座頭でありました。浪人ですと寺社の金を預つて、それを貸付ける。又座頭でありますと、學問所の金です。さういふものから借りるのを、名目金と云ひまして、貸金訴訟を致しても、並々の濟方でなしに、特別な濟方をして下さる都合がありますから、浪人や座頭が高利貸をするやうになつたのです。

何方にしましても、利息（一割五分）には公定利子がありまして、その外には取れませんが、名目金を借りるといふことに就て、いろ〳〵世話になつたからといふので禮金を出す。或は筆墨料を取る。いづれも天引にするので、それが如何にも割高なものだつたさうです。さういふものは寶暦度にはじまつたので、それを續けてやつて居りました爲、安永度に處分された者は、浪人のみならず御家人の中にもあつたらしい。その中の重立つた者に、小倉弘助、石川左七、藤田圓心、福島善九郎、細川兵左衛門などといふ人達で、此等が貸高だつたやうです。又かういふ人達に賴んで、町人や金持が自分の金を廻さして、高利を得るやうなこともやらしたので、三兩一分、五兩一分といふやうな利子を取つた。おまけにそれが三月しばりで、利息の天引をやるのです。

それから盲人の方になりますと、松葉屋の瀨川を身請したので、その時分に知られた鳥山檢校が一萬五千兩、名古屋檢校が十萬三千兩、松岡檢校、松浦檢校、相馬檢校などは一萬兩内外でした。その他にも四五千兩見當のやつは、大分大勢ゐたらしいのです。かういふ者どもの爲に、武家の中にも利

息に追ひ倒されて、夜逃げをする者さへあつた。遂には家が潰れるやうなことを仕出來してしまつたわけです。

これなどは金額の纏つた方ですが、もう少し小さいところ、二分とか、一兩とか、多いので二三兩のところ、モウ少し細かいのになると錢何貫といふやつ、此等は烏金と云ひまして、朝借りて夕景に返す。或は車貸と云つて、今日借りて明日返す。日濟といふやつは、借りた翌日から分濟する。いづれも利息は天引です。かういふこまかいやつは、車婆々、青茶婆々、高田婆々といふやうな婆さんが貸付けて歩いて、又貸付けた先を取つて歩く。此等が當時の江戸で名高い金貸婆さんだつたのです。大坂町に村田屋五兵衛といふ者が居つて、一兩に二三百文の日歩を取りましたが、これは大分金持になつた按排です。

かういふ風に、大きいのも小さいのも高利の金を借りる。返濟の見込みもなく、借りられるだけ融通すれば、自分の身上を失ふに極つてゐる、一時凌ぎの爲に後先の考へ無しなことをする。そんな者が多かつただけ、貸した方の者どもは相當の金持になつたわけですが、この頃の吉原の樣子を見ますと、寶曆以來、贅澤な遊びをする者は、高利貸の座頭が多かつた。その他には藏前の札差等で、孰れにも高利貸の關係者が、吉原の一番いゝ御客だつたのです。

車婆々とか、青茶婆々とか、高田婆々とかいふ連中は、若し借手が金を返さないやうな場合がある

と、その家の前に立つてどなつて、受取るまでは動かぬといふやうなことをやる。それより大きいところになると、出仕の往返に馬や駕籠の周圍へゾロ〳〵とついて歩く。或は玄關先へ泊り込んで催促する。さういふ時には座頭の坊の變な機いやつを遣るので、今戸の彈左衛門とか、田圃の車善七とかいふ手合も、手下の連中を差向けて、町家の店先にづらりと並ばせるやうなことをやる。それも隨分前からやつてゐたと見えて、享保十四年の十二月に、催促のため武家の門前へ旗を立てたり、札を貼つたりすることを禁ずる法令が出て居ります。旗や札がいけないとなると、今度は登城がけとか、退出がけとかいふ時を覘つて、馬や駕籠につく。それでも實際借りがあるんだから、どうにも致方が無い。しまひには借りた方が慣れてしまつて、恥も外聞も打棄てゝ、構はず平氣でゐる。廉恥などといふものは、どこへ行つたかわからぬやうになつてしまつたのであります。

三八、胃病のせゐではない

「六諭衍義大意」とか「五常五倫名義」とかいふやうなものは、大變に吉宗將軍が苦勞して、御自身筆を加へられたといふので、當時は非常に感激したものでありましたが、後には思ひ出す人も無いやうになつてしまつた。家重將軍の時にも「孝義錄」といふものを拵へて、親孝行の者や貞節の者の表彰をされた。折角さういふことをされても、あまり世の中にさし響かないのです。

そこでこゝに鳩巣の書いた「五常五倫名義」の跋を出して置きませう。「六諭衍義大意」は少し長いから、その方は措いて此方を擧げることに致します。

右五常名義、旨を奉けて撰進する所也、夫れ五常は人心の具ふる所の理、天下の大本なり、その中に在るに方ては、一源湛然として紊れず、但だ世を擧げて察せず、行つて著れず、武人俗吏と雖も、口を開けば輒ち仁義禮智を說く、而して名義の精に至ては、猶ほ概ね聞くことなし、宜べなり、その逆施倒行して之を覺ることなし、今國字を以て其義を疏し、述べて數語を爲して之を揚示す、その或は此に察するあらんか、幼學の徒の如き、又此を以て習字の帖に代へ、晨に夕に之を諳誦し、目に翫び耳に熟せば、庶幾くは良心を開發し、以て養正の功を助けば、又古人小學の心なり。

室　直　清　謹跋

仁義禮智信（五常）の講明につゞけて、五倫の釋定なのですが、共に享保の教育政策として、是が根本なのでございます。又二百年前の此宣示が東京になつての新教育へも其心持を持越したところのもので、舊教育の面目を發露してをります。我が帝國臣民として誠に大切な宣示であつて、過去の遺物として看過されません。わけて今日の人々には五倫の釋定について深く考慮すべき必要がありはいたしますまいか。江戸の國定讀本が學童に何と教へ込んだか、それが何程行はれたか、又何程持越し

たが、實曆度の志士仁人が躍然と起つて支持し發揮しようといたした大綱領が此宣示であります。それ故に五倫名義の方は其全文を掲出いたしました。

父子有親

天下にあらゆる人の品を五つに分て五倫といふ、其上に各其教を附て五教ともいふなり、其内、父母の子を生ずるは、天地の萬物を生ずる道理より出て、父子の倫を定るなり、さて其教をたてて、父には慈といひ、子には孝といふ、尤父をいへば母も其内にありとしるべし、然るに父母たるもの、子を愛するならば必教へ戒むべし、若し目前の愛に溺れて、子を不義に陷しいらしむるは、是禽獸の子を愛するにて誠の愛にあらず、父子たる者も衣食の養ひ、朝夕の勤めはいふに及ばず、すべて身を慎て、父母の志に背かざるやうにすべし、然らざれば誠の孝にあらず、但其簡要をいふに、父子は同氣一體の者なれば、互に毛頭も論なく、とかくに自然の親しみを失はざるを本意とすべし、然故に聖人父子のあひだにおゐては、親の一字を不易の法と定めたまふ、いはゆる父子に親ありといふ一句は、ながく父子のおきてたるべし、

君臣有義

君臣上下の道理は天の上に位し、地の下に位する道理より起れり、人に上下の分なければ人道立さる故に、君臣の倫を定むるなり、敢その教を立て、君には仁といひ、臣には忠といふ、君の仁

といふは本より人をあはれむ事なれども、一とをりの慈悲のみを心得べからず、たゞ私なくして、あまねく下を利益するをいふなり、又臣の忠といふも日夜勤勞するのみをいふにあらず、たゞ眞實以て君に仕て、すべて奉公に表裏なきをいふなり、但其簡要をいふに、君臣は互に義を本意とすべし、義は道理の曲尺をいふなり、君も此曲尺を以て臣を使ふべし、上の威勢にまかせて此かねを敗るべからず、臣も此かねを以て君につかふまつるべし、己が追從によりて此かねを枉べからず、然る故に聖人、君臣の間におゐて義の一字を不易の法と定たまふ、所謂君臣に義ありといふ一句は、永く君臣の掟たるべし、

夫婦有別

天に陰陽あれば人に夫婦あり、陰陽和合して萬物を生育す、夫婦和合して子孫生育す、天人一理としるべし、然るに陰陽は倡隨とて、陽は先だちて陰を倡ひ、陰はおくれて陽に隨ふ、是又自然の理なり、其理によりて夫婦の倫を定るなり、されば夫は剛正とて強く正しき德を以て常に婦をいざなひ、假にも容色に迷ふ心あるべからず、婦は貞靜とて一筋に靜なる德を以て常に夫に從ひ、ねさゝか寵愛にほこる事あるべからず、但其簡要をいはゞ、夫婦は和らぎ睦ましき內に、男女の差別あるを本意とすべし、男は外を治め、女は內をおさめ、男は內さまの遊びを好まず、女は表向の事をいろはず、たゞ內外の差別、亂りならざるをよしとす、然る故に聖人、夫婦の間に

おゐては別の一字を不易の法と定め給ふ、所謂夫婦に別ありといふ一句は、長く夫婦のおきてたるべし、

長幼有序

父母ありて子を生ずれば、先に生ずるを長とし、後に生ずるを幼とす、兄弟と云も同事なるべし、本より兄弟は同じく父母の遺體をわけて大切なるものなり、是によりて長幼の倫を定置て、兄は弟を愛し、弟は兄を敬ふを道とす、殊に父母死して後は父母の形見とも見るべきは兄弟なり、常に形影の離れざるごとく思かはして、互に疎略すべからす、但其簡要をいはゞ、兄弟は天倫とて始て生ずるより天の定めたる次第なれば、假にも此次第は亂るべからす、たとへば寵愛の子たりといへども、同腹の兄をさし置て家督を傳へべからず、又何程才智ある弟にても兄に先だつ事有べからず、此次第正しからずしては一家の禍ともなるべし、然る故に聖人、長幼の間におゐて序の一字を不易の法と定め給ふ、序は次序とて次第の事なり、所謂長幼に序ありといふ一句は、長く長幼のおきてたるべし、

朋友有信

天下の人は同じく天地の氣を受て生ずれば、相友として交るべき道理也、是によりて朋友の倫を立置て、仁を輔け善を責るを朋友の道とす、仁は己が行ひに私なき事なり、仁を輔るとは己が修

行に怠あれば朋友の相輔くるによりて仁に進むをいふ、善を責るとはものを催促するごとく、互に善をつとめ勵ますをいふ、正しく直なる人、又はものしれる人に交るをば益友とし、柔弱にして僞る人、または巧に輕薄なる人に交るをば損友とす、しかれば益友をもとめ、損友を遠ざけ、幾度も禮義正しく慇懃にして相交るべし、但その簡要をいはゞ、朋友は親疎ともに物をいひかわし事を頼みあふものなれば、第一貞信にして相欺ざるを本意とすべし、然る故に聖人、朋友の間におゐては信の一字を不易の法と定め給ふ、いはゆる朋友に信ありといふ一句は、ながく朋友の捉たるべし、

嚮きに恭しく明旨を承けて、國字を以て五常名義を疏せしむ、前に撰進するが如し、夫れ五倫は人生の行ふ所の道、天下の大經なり、天、烝民を生ず、必ず五常の性あれば則ち五倫の道あり、聖人の教も亦此を修するのみ、舜、司徒に命じて五教を敷きしより、後の聖王迭に起て學を建て師を立て以て之を明す、降て三季の後に及て治教日に上に弛み、人倫下に明ならず、風俗衰へ頽れば職として此に之れ由る、今此辭や以て古に考へ、聖賢の訓に合符し、以て今に施す、則ち特に宵旰の憂ひなからんとす、視る者尚くば老耄の言を以て之を忽にするなからんか。

享保癸卯（八年）冬十一月既望

室　直清　重跋

この本は吉宗將軍が自ら筆を加へたといふことでもあり、又こゝに鳩巣が書いてゐるのを見ますと、これを子供に讀み習はせ、手習の手本にもしたいといふことで、拵へられたわけだつたのです。識者には行く先がどうなるか、よく見えてゐますから、どうも心配で堪らない。心學の石田梅巖が民間教化を思立つたのは享保の初です。宗教家でない人達が、却つて苦勞してゐるので、稻津祇空や常盤潭北は梅巖より、もつと早く教化運動を起して居ります。

此等の人達の心持といふのは、御代安かれ、めでたかれと祈るので、功名手柄にするのではありませんから、まことにしみ〴〵として居りまして、浮氣らしいところや、派手なところ無しにはじめてゐる。明治の半頃でありましたか、矢田部良吉といふ東京大學の先生が、時世を憂ふるといふやうなことは何時の世の中にもあることなので、悲憤慷慨なるものは胃病から起るのだ、といふことを云ひ出して、珍しい問題を惹起したことがありましたが、祇空にしろ、潭北にしろ、梅巖にしろ、乃至は談義物を製作した人々に致しましても、實に世の中が案じられたからやつたので、決して胃病の患者だといふ次第ではなかつたのであります。

三九、寶暦と明和との變り加減

今日でもさうですが、修養書とか、教訓書とかいふものが、最初からさういふ顔付をしてゐたのでは、どうも人が取付きにくい。人が讀んでくれなければ、折角の慈悲も惜しいことになりますから、そこへ勾配をつけて、知らず識らずの間に人が讀んで、自分の思ふ壺へ落込むやうにしたいと考へる。こゝが談義物の作者の苦心したところであり、又親切なところでもあつたのです。

談義物に就てはこれからだん〳〵申上げますが、その著作といふのは寶曆二年以來、數で申せば十種位のものです。靜觀房好阿の「當世下手談義」が五冊、これが寶曆二年春の出版で、翌三年には「教訓續下手談義」五冊が出てゐます。伊藤單朴の「教訓雜長持」五冊が寶曆二年冬の出版、谷中嫌阿の「當風辻談義」五冊は同三年に出てゐる。臥竹軒の「下手談義聽聞集」五冊、これが寶曆四年、この年には又自他樂庵儲醉の「返答下手談義」五冊、伊藤單朴の「俚俗教談錢湯新話」五冊、一應亭染子の「教訓不辯舌」五冊なども出てゐます。それから伊藤單朴の「教訓差出口」五冊が寶曆十二年、同じく單朴の「楚古良探」五冊は遺稿として明和五年に刊行されて居りますが、同人の生前――寶曆年中に書いて置いたものなのです。以上は皆江戸版ですが、京版の「教訓反故溜」これは寶曆十一年の刊行ですが、守默齋南樂の自序には六年とありますから、その頃脫稿したものなのでせう。

談義物の先登でありました靜觀坊好阿は、四五年の間に忙しく書いてゐる。明和になりますと、もう樣子が變りまして、明和以後の談義物は大分振合ひの違つたものになつて居ります。寶曆度の十年

ほどが、談義物のこゝを先途と働きましたところと見てよからうと存じます。どうして明和になると様子が變るか、それは田沼さんの社會政策の爲に、世の中の振合ひが變つて來たからです。田沼さんの社會政策は、宗春卿が享保に名古屋で實行しました。是は一足お先で、實は田沼さんは宗春卿の二番煎じです。水戸では寛政になつてから、江戸仕掛と稱してやはり田沼政策をやつてゐる。後にやつた江戸仕掛の模樣は「舊聞錄」に書いてありますから、こゝに引用して置きます。

舊聞錄に云、寛政十年の頃、世上以の外不景氣にて、御城下も追々衰微に赴き、郡村も多年凶作の後にて疲勞甚敷、何とぞして世の中立直る分別もがなと、御役方の御評議とり〳〵なりしが、御家老中山備前守殿、中納言樣（治保）の御名代として下國され、時の老中興津長門守、野中三五郎、太田原傳內、大場彌右衞門等の方々相談の上、あまたの新政を行はれ、其より水戸御城下の繁昌、目を驚かす許りなり、先づ春秋の兩度に城下に馬市を立て、郡村より數百頭の馬を引出させ、賣買させたれば、馬市の近傍俄に馬喰宿、馬宿など初める者出來、其の宿に止宿の者ども夜勘定と唱へ、上市は片町、下市は藤柄並木に博奕場を開き、夜中往來へ『ひやうそく』『かんてら』など照しつられて晝の如く、武家の召仕へ、商家の手代小者、われも〳〵とたづさわりて繁昌大方ならず、郡村にて御法度の博奕、城下にては自由なりと聞き、五里十里の田舍より泊り掛に出て、賭場へ出入する者追々多くなれば、旅人宿もまた繁昌いたす、かゝる有樣ゆへ、人の心

みな浮立て、只だ何となく景氣よき心地となり、下市本一丁目女郎屋を開業の出願をなせし處、直ちに許されたれば、次には千波沼へ夜船の遊山を願ひ出づる、これも許されて、一丁目には妓樓軒をならべ、七軒町紺屋町に料理屋あまた出來、辻講釋、豆藏、輕業、土弓、揚弓、つゞいて江戸より町藝者あまた下り、江戸町へは歌舞伎芝居を建て、野郎も新店を開けば、地獄の密賣も出來、三丁目には五百文掛、百兩どりの無盡講あり、船遊山に三味線の音たゆる事なく、櫓太鼓のひゞき曉の夢を驚かす、田舍仕立の俄通人あれば、急拵への太鼓持あり、良家の婦女はみな藝妓の風俗を習ひて言葉なまめかしく、商家の主人みな大通を氣取て長羽織の裝ひ、昨日の田舍氣質さらり消て、風俗忽ちに都仕立となる、恰も大都會の湧出たるが如くなり、後の事はいざ知らず斯る繁昌を目のあたり見る嬉しさに武家、農家もうかれ立たる有樣、筆にも詞にも盡されず。何時やつても同じことですから、名古屋の方は「溫知政要」と「夢の跡」を引合して御覽を願ひます。

四〇、談義物の中心人物

明和年間は退屈どころではない、まるで夜の明けたやうな樣子で、びつくり箱をひつくり返したやうな有樣になつて居りました。地中のものを白日の下にさらし、ありつたけのものを持出して來た。

隱れてゐれば見えなかつたのだが、つき出されて見ると皆今更のやうにびつくりした。そのびつくりした樣子は何によつてわかるかと云ひますと、この時分のことを書いたものはよく人が云ひますし、明和、安永、天明度のことを書いたものもいろ〳〵ある。その中で最も際立つて、幕府の運命を決する二つの處置があつた。これは何方も倒幕論ですが、その筋が又非常にいゝ。本筋だ。道理に立脚してゐるところの運動でありました。

倒幕論である以上、德川の政府を倒してしまふ意味のものだから、內亂、陰謀と云ひさうなものだけれども、さうは云つて居りません。又云へなかつたとも見える。その加減はと云ふと、寶曆に竹內式部が京都で追放になつた。竹內式部ばかりぢやない、正親町、三條、德大寺といふやうな御公家さん達が、七人まで永蟄居になり、今出川、町尻以下七人は隱居させられてゐる。然るにその罪科は、吉田、白川兩家をさし措いて、公卿に對して神書を相傳した、といふ箇條に過ぎないのです。

明和には又山縣大貳の一件を、幕府に對する大不敬であると云つて處理してゐる。こゝに寶曆と明和との違ひがあるので、同じやうなことではありますが、一は追放であり、一は獄門である。さうして何方も內亂、陰謀とは云つてゐない。神書相傳の科と幕府に對する大不敬の罪、この振合ひがよく時世を見せてゐるやうに思ふのであります。

扨さういふ時世である寶曆度に於て、またびつくり箱はひつくり返しませんから、何が出るかわか

らないけれども、たゞ心底に不安を感じてゐました。その不安を何としたものか、先づ人の心を正しくして置く必要があるぞ。どうしたら人の心を正しくさせることが出來るか、といふ工夫をしなければならぬ。そこで北藏坊といふ人の書いた「當世花街談義」を見ますと、その中に「下手談義」の著者と「雜長持」の著者とを擧げて、

本無が實義も亦靜（靜觀房好阿）青（青柳村人探牧）が忠臣なるかな、

と云ひ、又、

汝宋學の糟をなめ、靜觀青柳か津頓をすくつて、

とも云つて居ります。「風俗八色談」は寶曆六年の刊行ですが、その中にもこの二人のことが書いてあります。

世に沙汰する下手談義雜長持といふ書……達人の作と見えて、世上の人々の諷諫を巧に說たる高座の談義に、辻談義丼に聽聞集の噂まで受込たる雜長持いづれおろかなるはなし。

この二人が談義物の中心であるといふことは、當時に於てもさう見られてゐたのです。

四一、奇談も談義物も同じ心持

談義物の作者は實文者流ではありませんから、戲作に耽ることは無いのみならず、談義物の外には

殆ど手を出さない、たゞそれだけで手を收めてゐる。文章も書ければ學問もある人間であつて、「下手談義」や「雜長持」が相當評判がよかつたのですから、もつとどん〳〵書いて、世の中の評判を煽りさうなものだのに、それをやらぬといふのは、彼等がどういふ人間であつたか、想像することが出來ると思ひます。

ところで第一に出て來る靜觀房好阿、この人の傳記はわかりません。水谷不倒君の書いたものによると、摩志田好話、又靜觀堂といふ。この人は元文、寛延の際に、一度すゝめられて奇談小說を書いたことがあるので、その書名も三種擧げてあります。

「御伽空穗猿」五冊　摩志田好話（元文五年）
「怪談登志男」五冊　靜觀堂（寛延二年）
「諸州奇事談」五冊　靜觀坊好阿（同　三年）

この中の「御伽空穗猿」といふものを讀んで見ますと、成程寶曆らしいもので、珍話奇談を集めてゐる。併しその跋には、

今此草子の奇を索め、怪を探りたるは、誠に君子の爲ざる所、日用常行の教にあらねど、又一向に教戒の心なきにしもあらず、鰹のさしみにからしを去りて、おろし大根を望む族は、彼を捨てて是をとらん歟。

とありまして、珍説で食ひつかせて教誨しようとしてゐる様子がよく見える。又その本文にしても、奇談怪説なるものを常識的に捌いて居ります。そこでこの常識といふことですが、一體ものゝわかる、わからぬといふことは、自分の持合せてゐる知識との距離によつて定るので、その距離を均したものが常識であり、凡情でもあるのです。儒者の學問の教といふものは、專ら常識によつたもので、吉宗將軍の買はれたのも全くそこに在る。誰にもわかる、考へたら知れる、さういふ程度をよろこばれたのです。儒者の學問には「由らしむべく知らしむべからず」といふこともありますが、そこは吉宗將軍の買はれるところでない。先づ以て常識を表にする。吉宗將軍が儒學を中心にしたといふことは、常識に基いたものと見ていゝやうに私は思ふ。老子などの行き方は常識を破つてかゝるものですから、こゝの御誂へには不適當なのです。

それですから同じ奇談珍説でありましても、近路行者の「英草紙」とか、上田秋成の「雨月物語」とかいふものに比較すると「御伽空穗猿」は大分心持の違ふことがよくわかる。そこが好阿の特別なところで、やはり「下手談義」を書く心持で、さういふ奇談珍説を書いてゐたのです。後に「下手談義」に振替つて行つたのも、效果の多い方に振替つたのですから、これも奇談と別にして考へないで、すべて談義物と同じ氣持として扱つて見たい。その意味でこゝに「御伽空穗猿」の中にある、一番短い話を出して置きます。

東武兩國橋の東に日野屋東次郎といふものあり、親の代にはかたのごとく辛勞して世渡りを勵めども、水行川に繪かけるごとく思ひはかゆかずして心神をくるしめけるに、さいつころ神名月の中の五日のころ、例よりもはげしき寒氣にしたしき友をまねき、火鉢取廻して雜談刻をうつし、すでに夜半に至れば、心やすき友とて、亭主のかたより皆々いざ歸り玉へ、我も寢んと追立てるも一興にて、いやかえらじ、こよひは爰に語りあかさんなど戯れて人々家居に歸る中に、軒近き伊勢屋重三郎と云おとこ、庭に立止り、いと不思議さふ成體にて、歸りもやらず詠入たるさま、主じ何をか見給ふらんと問ふ、いせ屋が云樣、まづあれを見玉へ、早く〳〵と呼ぶにぞ、何事にやと立て見るほどに、宵より居ねぶりたる童まではしよりて是を見るに、表の方に立たる障子の破れたるひまより、燈火のかげのもれ來て、奥に立置たる戸にうつる影、白狐のひざまづきたる姿あり〳〵と見えて繪書るがごとし、奇異の思ひをなして、かゝる事また有べしともおぼへね、いざうつし止んと、清き紙を以てかの板戸におしあつるに、さきよりもいとゞ明かにうつりぬ、伊勢屋すなはち筆を染て其かげの移りじまゝに、少しも心を加へず、寫して取て見るに、かしらより手足の勢い尾の形勢、名ある畫工の心をつくして書たり共、かばかりにはと思ふ程なり、此いせ屋もとより繪の事は白きが後か、赤きが先か、一向しらぬ男なれば、一點の作略もなし、かくて夜も更ぬ、皆〳〵打まどろみて明る晨となり、主に此事苦んと語り出るに、隣家の山本何某、

一幅の繪像をたづさへ來り、是は我主君に奉る稲荷の神像なり、主人にさゝげて後は拜する事かたし、名筆の神像なりとて、白狐に乘給ふ像を掛置て拜せしむ、爰におゐて日野屋が家内ふたゝび奇特の思ひをなし、只今夫へ參りて夜前の次第をも語り、うつりし白狐の影を見せ參らせんと申居たる所に、此神像を持參し玉ふことの不思議さよ、偏にいなりの影向し給ふなりと悅び敬ふ事大かたならず、此白狐の影像を則神體と崇め祭りて家内に勸請しける、かく有て後、商ひ日々に繁昌して、今江府町にもてはやす泡雪豆腐と云は、この家の產業なり、其繁榮をうらやみ、贋徒軒をならべて欺き賣れども、神明の冥助にて、人よく其眞贋をわきまえ、似せ物はおのづから螢火の太陽のひかりとあらそへるがごとく、日野屋は日に增して榮え候事、誠に稲荷の神慮に叶ひぬるゆえ、行末目出度春秋を送りける。

四二、大坂生れの京住居

ところがこの話は平秩東作の「莘野茗談」の中に、

下手談義といふ草紙、靜觀房と作名あれども、兩國橋もと淡雪豆腐うりし日野屋、株をば人に讓りて、隣に山本善五郎とて、手習屋をしてゐたる男の作也。

とありまして、淡雪豆腐の主人だつた男が「下手談義」の作者であり、稲荷の靈驗談は自己宣傳であ

るやうに云はれて居ります。卽ち靜觀房の本名は山本善五郎であるといふことになるのですが、この說もきつとそこに落著したものとは思へません。近代著述目錄が、山本靜觀房、稱善五郎として、著書十三種を擧げましたが、隅田川鏡池傳は西向菴春張、敎訓雜長持、錢湯新話は伊藤單朴、當風辻談義は嫌阿、增續江戸鹿子は奧村玉華子の作なのに、間違へてゐる。其外のも頗る胡亂に思はれる。却て御伽宇津穗猿、怪談登志男は紛れもない其人の著書なのに落してゐる。その手際から見れば、靜觀房を山本善五郎と決着したのも、只だ近代著述目錄が氣の早いところを見せたに過ぎない。只だ新增江戸惣鹿子（寬延四年刊）の自序に「古めかしとて誰かゐとはむ、人はともあれ我見はやさんと、靜觀房が勸を力に再び世にひけらかし侍る」とあるのを見て、兩者の間に交誼のあるのが知れました。それよりも宇津穗猿の序文は摩志田好話とありますけれども、跋文の方は、

　草稿をわれに得させよといへど、宇津保猿の貞を赤め、手をすりて辭せしを、ついに猿猴の肘をのべて奪ひ歸れば、やるまいぞ〳〵と追かけしを、あしばやに逃かえりて、手ばしかく劍劔氏にあたえぬ。

　　奧村似嘯

と書いてある。この文章は人の爲に賴まれて書いたらしくもありませんから、この奧村似嘯なるものを僉議して見たいと思ひますが、まだ誰も僉議して居りません。

「下手談義」には「洛陽沙彌」といふ肩書があり、奧村の廣告文には「京の靜觀房」と書いてありま

す。「下手談義」の本文にも、

世に捨てられし俄道心、阿彌陀が池で新談義から、下手の名をとり、大坂の古巣をはなれ、今は京都の片隅に住し、いつの間にやら江戸にくだり、春秋二度の下手談義說し、靜觀房が木蘭色の破衣。（卷五）

といふ風に、自分の生れたところ、自分の住所が書いてある。大坂生れで京都に住み、江戸へ往返し、教化運動をしてゐたことも見えて居ります。

心は俗の昔にかはらず、古鄕の難波の梅もゆかしく、又京の水も飲たふ成ぬ、近日京都へ立歸れば、今日が談義の惣回向。（同前）

愚僧古鄕大坂を出て、京都をはじめ、諸國を行脚して、國々の風俗を見しが……（同前）

下化衆生の下手談義、前後二編に說終て、古鄕忘じがたく、花の洛へ立歸れば、婆々さま達へ名殘の十念。（同跋文）

これは決して看過してはなりません。かうまで「下手談義」に慥に書いてあるところを押へて、前の淡雪豆腐の亭主だといふ話と比べて見ますと、大變な食ひ違ひを生じて來るのです。又「當風辻談義」は「續下手談義」と同年に出版されたものですが、この著者は靜觀房の身の上をよく知つてゐるらしく、現在大坂にゐると明白に書いて居ります。

彼下手談義の作者靜觀房といふは、我神通力を以て能く知る處、其名を書物屋の親仁に託し、實は大坂さうま堀の名ある醫者じや、われよく彼者の生れ落から、淨家の沙門となり、後に故あり、て舊里に歸り、父祖の跡を續、醫を業とし、恒に東武はいふに及ばず、諸國を經歷し、下さまの風俗を能く知り、能き事をいゝきかせ、それから段々引立上て、聖賢の道にも入しめんとの、方便の下手談義前後二篇說濟して、今は大坂の無爲庵といふ草のいほりに念佛で居るを知れり、さつま堀で聞ばしれる。（卷四）

かういふものを見て參りますと、どうも淡雪豆腐の亭主であつたらしく思はれない。殊に「辻談義」の記載によつて、靜觀房の身の上が見えるやうな氣がする。それと共にこの著者の谷中嫌阿は、靜觀房と關係のあつた人のやうにも思はれるのです。それだけでなく、重ねて、

近い比大坂の醫者德孤子が靜觀房と替名して、東武の旅宿で町人の身持を說、題號を下手談義とやらいふて世に弘めしを、又老莊の道に託して野浮圖を說て誹謗し、大腹中の放逸を勸む、彼積慶堂の主人は仁術たる醫を業とし、其間に下化の下手談義、奇特千萬。（同前）

などといふあたりを讀むと、友達でもあつたんぢやないかといふ風にも考へられます。

「教訓反古溜」は寶曆十一年に京都で板行されたものですが、六年に書いた序文がある。その中に「無爲菴の主人は方外の友也」とありまして、秋霖の晴間に訪問して、取散してある草稿を貰ひ受け、

それを補綴して、この「反古溜」が出來上つたと書いてあります。無爲庵といふのが靜觀房の幽栖の名であることは「辻談義」の中にもありますから、嫌阿と南樂とは共に靜觀房の友達だらうと思ふ。殊に「返答下手談義」は、逆な云方をして好阿に抵抗してゐるやうに見せてありますが、この本は寶曆三年五月の序文はあるけれども、出版は四年一月です。然るにその內容を、三年九月に出版された「辻談義」が知つてゐて、「返答下手談義」の作者（自他樂菴儲醉）は江戶生れの恆原脇之進といふ者で、餘計なことをするものだ、などと云つてゐる。恆原脇之進といふのはいゝ加減な名前でせうが、本が出ないうちに內容を知つてゐるのは、何かその間に連絡が無ければならぬ。民間に起つた談義物の作者連中の一團は、相當に連絡を取つてゐたものらしく見えるのであります。

四三、遺つてゐる繰位牌

「教訓雜長持」の著者である靑柳山人伊藤單朴は、寶曆二年に七十三歲で、はじめて「雜長持」を書いたのですが、その自序の中で、新版の「下手談義」を見て同感して、直に書いては見たが「何程似爲ても、靜觀房が作意に似ざれば、鵜の眞似す烏」などと云つてゐる。この人のことは調べて見たら少しわかりました。

この人のあとは多摩郡靑柳村、立川の傍に堀江銀造といふ家が殘つて居ります。單朴から七代目と

云はれてゐる銀造といふ人の話によりますと、單朴は麹町から當所へ引込んで、權次郎といふ者を養子にした、その權次郎の子の代に、生家の苗字に復して伊藤とは云はなかつた、どうしてさうなつたのか知らぬ、といふことでした。單朴の墓は川向の田村の安養寺にありましたが、現在は谷保村の養福寺に改葬してある。先年安養寺に火事があつた爲、位牌も何も殘つてゐない。自分の家にも現存してゐるものは無いが、たゞ手拵への繰位牌が一ツ殘つてゐると云つて「伊藤探牧造之」と自書してある繰位牌を見せてくれました。それによつて單朴の父は相州中原の人で、須藤又兵衛といふ人であつたことがわかる。その他に親戚故舊らしいものゝが何枚かありましたが、どういふ親戚か、或は友達かわかりません。たゞびつくりしなければならないのは、

廿日　有德院殿將軍吉宗公寛延四歳　　左大臣任　辛未閏六月

といふ吉宗將軍の法名を書いたのが一枚あつたことです。談義物の作者である伊藤單朴の手拵へにした繰位牌の中に、吉宗將軍の法名を書いたものを見ましたことは、私としては大いに感激せざるを得なかつた次第であります。

現在の墓碑を見ますと、正面に「伊藤探牧墓」とあつて、右側に「通稱半左衛門」左側に「寶暦八寅季八月四日」とある。これによつて單朴の通稱がわかりました。改葬した時に碑版があつたのを掘

出したが、どうなつてゐるかといふことでしたが、すぐ按排に打棄てゝありました。それによつて見ますと、

延寶八庚申生江都至寶曆七丁丑

伊藤半右衞門探牧墓

後人必憐覆之

武州多摩郡青柳村住、別號單朴豫修之

施主　仁左衞門

とありますので、寶曆七年に碑版を作り、墓碑は翌八年に建てたことが知れます。從つて墓碑に書いてゐる年月日は、歿年月日ではないと思ひます。それは明和三年九月に日本橋通二丁目竹川藤兵衞といふ者の出した「不斷用心記」の末に、

寶曆十一年菊月吉旦

八王子乃邊

青柳村賣炭翁書之

と書いてある。この竹川といふのは「雜長持」を出した版元ですが、これは墓碑を建てゝから四年後の日付になつてゐて、その時單朴は八十一歲になつてゐるのです。この「不斷用心記」によつて、墓

碑の側面に書いてあるのは、歿年月日でないことが知られる。又「不斷用心記」の序文を「武州多摩川青柳隱士土方乘阿」なる者が書いてゐますが、この乘阿といふのは本文の中に「我友土方八右衛門」と書いてある人だらうと思ふ。この土方との關係はどうであつたかわかりませんが、この人と懇意であつた爲に、單朴はこゝへ隱居したのではあるまいかと思ひます。

この「不斷用心記」は明和三年に遺稿として出版されたので、土方の序文に、

吾鄕黨の伊藤翁單朴、かつて人々の若く事馴ざるを教導、江都に住居する子孫の爲に書置し文ありといふことがありますし、本文の中にも「江戸にある孫曾孫等にあたへばやと……」とか「多くの子孫の中に珍しからぬ祖父がぐり言や……」とか「此事は江戸の孫玄孫におゐて……」とかいふことが書いてあります。孫曾孫まである單朴が、たゞ一人で隱栖したのは何の爲か、たゞ引込んだだけならいゝが、養子までするといふのはどうもわかりません。青柳村に引込んでからは、田畠も買入れて、農家一軒前の資産を備へてゐたやうですが、隱居するだけとしたら、どういふわけでそんなことをしたか。墓も菩提所があるりさうなものなのに、こゝへ建てたのはどういふ譯か、これもわかりません。

又この本文を見ますと、

我は先祖代々百姓町人を出す、わづかなる家業によふ〳〵飢寒をまぬかるゝ身ながら、市人の身にも、それ〳〵の道そなはり、爲すべき事、せまじき事、數〳〵の心づかひ、樣々の事種は、翁

がこれまで、世を經るあぬだ見聞し事を、寢られぬまゝに書綴て、孫どもに筐にせよかし。

と書いてある。單朴の父親は初めて相州の中原から江戸へ出て來たらしいのですが、前の繰位牌によると、父の墓は深川靈岸町の正覺院にあり、母の墓は關口の蓮花寺にあることが知られる。本文の中に、元祿十六年の地震の時、本所深川邊は洪水が襲來するといふので騒いだことを書いて「我すみける町」と云つてゐる。何町かわかりませんが、父の墓のあるところから考へて、靈岸島附近にゐたのではないかと思ひます。

父の亡くなつたのが正德四年で、母の亡くなつたのが享保十一年、この間に單朴の居所が變つたのではないかと想像される。孰れにも父母の墓所の違ふのは、歸依してゐた宗派の關係からのみではなく、單朴の住所との干繫があらう。何か商賣をしてゐたらしいが、別に金持、物持といふほどでもない。と云つて貧乏人でもない。相當に本も讀めれば、文章も書ける。人物も相當であつたらしいのです。

四四、志士仁人は風顚漢

單朴のことはこの程度までわかりましたが、好阿その他の敎化運動とどういふ連絡があつたか、それは知れません。好阿にせよ、單朴にせよ、又その他の人々にせよ、その著作は一流のものに限られ

て居つて、他のものに及んで居りませんから、一人一種の人が多い。從つてどうも訊ねる材料が乏しいのです。名聞や利養を目的とせず、人の目樓にかゝることを、却つて避けてゐるかに見えますが、その志すところは「地藏清談漆刷毛」に書いてあるのが、最もいゝやうに思ふ。

國天下の主たるものは、國天下の民を治め、をの〳〵その所を得るの政あり、家をおさむるものは、一家に法を立て、其家を安んずるのまつり事あり、匹夫は妻子奴僕をやすんずるの道あり、是みな天命を努むるものなり、其職にもあらぬものゝ、國天下を憂ふるものは、井穿の大工やねふきのすることに心を勞するがごとし、先覺のいわく、萬物一體の情は人のうへを歎かでも叶はず、しかれども强てなげくは非なり、命をしらざるなり。

それは知足安分ながらにその位を越え、自分の職とするところ以外に時世の心配をなして、教化運動に携はるといふのは、矛盾してゐるやうにも思はれるし、その人にそぐはぬやうな感じが無いでもありませんが、この人達としては全く見てゐられなかつた、心配の餘りの著作らしいのです。慈悲といふことは、當來の苦を拔き、樂を與へようとするのですが、現在に於ても亦拔苦與樂の働きをする。名聞利養などに貪著してゐるのではない、全く慈悲だけのものなのです。えらい人になりたいとか、金儲けをしたいとかいふのではない、忍び難く、堪へ難いものがあるからである。慈悲の人の貴いところは何かと云へば、天地同根、萬物一體といふ處から出掛けて來てゐるからであります。

譬へて申せば、その時々に花が咲き鳥が啼く。わざと咲くのでもなければ、啼くのでもない、たゞ時氣に感じて自然に咲いたり啼いたりするのです。位を忘れ、職を忘れ、家を忘れてやる。こゝに於て風顛漢とも云はれるのですが、決して氣違ひではない。世情俗慮から考へられぬだけのことである。普通の人なら名聞利養から離れられぬ筈であるのに、談義物の作者はそこでは何も彼も忘れてゐる。志士仁人と云はれる本當の人間は、その意味に於て皆風顛漢である、差引勘定をする氣持が無い。算盤が無い、報酬を考へない。世情俗慮から考へたら、本氣の沙汰とは思はれぬから、風顛漢だと云はれるのです。その談義物の作者の心持をよく悉してゐる「地藏清談」の著者も、亦同憂同感の人であることがわかる。談義物といふものも、藪から棒に出たわけではない。やはり出るやうになつて出たので、「地藏清談」の作者が先驅をなしたものと云つてよからうと思ひます。

四五、雨森芳洲の歎服

「地藏清談漆刷毛」の作者は、明和、安永以降に追ひかけて出た、體裁だけの談義物の中にも往々その名を見かけますが、この人は「地藏清談」の中にかういふことを書いてゐる。

予が記する所、七部の書、外題異なりといへども、始終みな一意にして全體田舍莊子なり、其語る所、逍遙遊、齊物論、人間世に過ず、その物に托するは寓言なり、神佛を假るものは重言なり、

その戯談は危言なり、衆口に調和して、他の情を慰するといへども、皆大宗師をはなれず。

自分の著作は七種あるが、それが悉く「田舍莊子」の心持である、その「田舍莊子」なるものは「逍遙遊」「齊物論」「人間世」「大宗師」この四篇の心である、といふのです。この四篇といふのは、いづれも「莊子」の篇名なのですが、こゝで特に「田舍莊子」と云つて「田舍老子」と云はなかつた心持はどうかといふと、それは一方に偏せずに取廻してゐるところ、「莊子」の最も働いてゐる四篇の心持で述作してゐるところを見ればよくわかる。已に談義體のものゝ中にも「名無草」「都老子」「老子形氣」などといふものが出來てゐる位で、「老子」を快濶なものとして奬說することを喜ぶ者が、その當時に於ても少くなかつたのに、「地藏淸談」の作者は「莊子」の方へ持つて行つたのです。易は有に約して說き、老は無に約して說き、莊は有無に約して說くと、古人も云つてをります。樗山の莊子へ持つて行つた心持も其邊から考へなければなりますまい。この人の七部の書といふのは

「地藏淸談漆刷毛」(雜篇田舍莊子)六冊(寶曆五年)

「田舍莊子外編」五冊(享保十二年)

「河伯井蛙文談」(外篇附錄)三冊(享保十三年)

「田舍一休」三冊　(享保十三年)

「六道士會錄」五冊　(享保十四年)

「英雄軍談」五冊（享保二十年）

「天狗藝術論」四冊（安永四年）

これだけで、その刊行は享保度にはじまつて、安永度に及ぶのです。勿論身後に出版されたものもありますが、七種の脫稿は孰れも享保の初に在る。そこから算へると、「下手談義」や「雜長持」より三十餘年早いけれども、容貌風采は頗るよく似て居ます。

雨森芳洲の「橘窓茶話」の中にも、「田舍莊子」の事を書いたのが二則あります。

我昨夜田舍莊子を看る、眞に是れ莊子を識得す、但だ其人果して如何たるを知らず、故に輕易に印證すべからざるのみ、其人果して能く篤實に、又這箇の話を說出すとせば、是れ中行ならずと雖も、一箇高明透徹の人物といふに好し、一部幾卷、眞に是れ得難きの書なり、若し是れ輕俊のまゝに這箇の話あらば、竟に是れ用に中らず、何ぞ篤實と謂はん、曰く言は忠信、行は篤敬ならば、何ぞ輕俊と謂はん、曰く大坂の俳諧家、或は京のあたりの戲作ものゝやうに人情を形容し、世態を說き出し、人を歎賞せしめて已まず、風人の旨を彷彿するも、惟だ其輕薄俊爽にして人心を敗壞す、縱へば是れ天花の亂墜なり、一笑に供せんのみ。

○

このころ田舍莊子を觀るに俳諧の若しと雖も、其中に精到の語多し、此れ必ず道を知る者の

撰む所、只だ其何姓何名何の居住を知らず、天下の人、孰か書を讀まざらん、然も書を讀んで、能く書の意を得る者、千百の中に一箇を得がたし、田舍莊子亦た云ふ。

その本が行はれてから四五十年たつて、芳洲はこれを讀んで歎服したのです。前の一則では感服しながらも、口だけではないかと危んでゐるところがありますが、後の一則に至つて全く惚込んだ様子が見えるのです。

四五、先憂の人佚齋樗山

この「田舍莊子」の著者はどんな人かと云ひますと、それは「寢ぬ夜のすさび」に書いてあるのがよろしいと思ひます。

田舍莊子作者佚齋樗山は、久世大和守重之に仕へ（旗奉行三百石）丹羽十郎右衞門忠明と稱し、隱居して可溪と號す、享年八十三歳、寛保元年辛酉四月九日、下總關宿にて歿す、子孫今久世家に仕ふ。

樗山の正統は現在でも中野の大和町に居る深津彬といふ御人がある。久世家は關宿五萬八千石の殿様で、代々この家に仕へて參りましたが、先代の無一といふ人は佐幕黨で、關宿を脱藩しましたから、家記、古文書の類は全部失つて、系圖の寫しが一卷だけ殘つてゐるといふことです。樗山は丹羽十郎

右衛門忠明と云ひまして、十八松平の一である深溝松平、有名な松平主殿助家忠の家筋で、主殿助家忠の弟十郎左衛門忠勝の玄孫に當る。祖父定信の時、母方の苗字である丹羽氏を冒したので、關宿に仕へたのは忠明からです。代々日蓮宗であつたらしいのを、忠明の時から曹洞宗になりまして、墓所も關宿の宗英寺といふ曹洞宗の寺にあります。忠明は三教に通じた上に、曹洞禪を修めたらしい。が、その學問は誰に就てどう習つたものか、よくわかりません。

雨森芳洲は木下順庵の弟子で、木門の五先生と稱せられ、榊原篁洲、新井白石、室鳩巣、祇園南海と併稱された學者です。その人が「莊子」の旨を得たと云つて感歎してゐる。「田舍莊子」が莊子の旨を得たといふことは、先づそれほどにして置きますが、樗山の識見は容易ならぬもので、まことに一隻眼を具した人のやうに思はれます。

これからだん〳〵申上げて參ります談義物の根本は、吉宗將軍の意圖を感戴して「六諭衍義大意」や「五常五倫名義」を支持し、庶民は庶民として覺醒させて行かなければならぬ、といふことに在つたのです。時世に就ての心配は何も今日はじまつたことぢやない、識者とか、志士仁人とか云はれる人達は、寶曆を待たずに疾く氣がついて居うた。急激に時代生活から脅かされ、通貨が手嚴しく變動して、轟々と人心にさし迫つて參りましたから、世道に危殆を感ぜずには居られぬ。これは談義物の人達に限つた心配ではありません。已に樗山の如きは享保度に於て、相當心配して「田舍莊子」を書

いてゐるのです。

寶暦度にはそれが一段と切迫致しまして、どうしても寛政の改革を喚び起さなければならぬやうになつて居つた。寛政の改革は安永、天明の時情に奮起して、誰彼といふよりも武士は武士から目醒めて行かなければならぬ、世の中の目が醒めるのを待つには及ばない、と意氣込んだところからはじまるのです。自分だけ眞面目になつても、相手が不眞面目だから馬鹿々々しい、などと云つてゐる間はまだ本物でない。相手には構はず、自分だけ眞面目になるのでなければいけない。それにしても畢竟人頼みである。多數の力を借りるのも人頼みである。究竟の教化運動に人頼みは要らぬ。溫い血の通つてゐる御互ならば、奮起せぬ者は無い筈なのであります。こゝのところは樗山先生がうまく云ひ取つてゐるやうに思ひます。

此書を見て笑て過るものは我に勝れる人なり、情に激して獨怒る者は、これにしかざるものなり、吾が情に中る所をおぼえて、自己の非を知る者は、我が志におなじき人なり、世界は廣し、いろいろの資質あるべし、我はじめは多言の譏りを恐れて、祕して出さゞる事十餘年、よく思へば吾もと人の書を見て、心に默契する時は其情を慰す、故にその情を記して又他に贈るのみ、人も又かれのごとくならば、世を隔て國を隔て其名を知らず、其面を見ずといへども、志契ふ時は互に情を語るの友なり、又何の心かあらんや、我は廣く世界の人を友とするものなり。（地藏清談漆刷

毛）

この氣持がよく通つてさへ居れば、寶曆になつてから「六諭衍義大意」や「五常五倫名義」を支持して、教化運動を起すなどといふことは無いわけなのですけれども、そこまでは行つてゐなかつたのです。

四七、たゞ一點の相違

けれども時の勢は恐しいもので機はやがて熟します。吉宗將軍の意圖に感激した當時の樣子から見れば、その感激は容易に忘れられさうもない。天野信景は「鹽尻」の中にその樣子を書いて居ります。

去年（享保六）關東の命に依て清帝の六諭衍義官板成て、天下に普くせさせ給ふ、されど無學の徒、讀得ざるも多かれば、重て室直清（新助）仰を蒙り、彼書の大意を和字に書て梓に彫て、世の教諭になさしめましまし、實に學校の政なかりし世より只號令を以て天下を主維しましますにや、今清諭に依て和語に綴り、此民をして善に相倡隨せしめたまふ御事、おほけなき事ながら、昭代の典刑も寔に盛事に見えて有難く覺え侍る。

江戸幕府が開けて以來、はじめて教育の規模が立つた。それは儒を表とするもので、儒と云つても前にも述べた常識ですから、內心に裏付が無い。況して三教全政などといふことは、ある筈が無いの

です。

儒者は頻りに佛教を攻擊し、神佛混淆の征伐をやる。甚しきに至つては、吳の太伯などを持出して、怪しからん議論をするやつさへある。神佛混淆の問題は、維新の際にあれだけの暴擧をやつて、果して何が殘つたか。これは一朝一夕の事ではありません。道春の「神社考」以來としても、三百年以上の思はくですが、昔は佛教をも勸懲の具として、政治の輔翼とする仕來りだつたのであります。況して久しく民心に沁み込んでゐる佛教を、さう容易に取離さすべきものでもない。そこで「鹽尻」はまことに穩な說を唱へて居ります。

夫伊勢は天照太神、八幡は應神天皇、熱田は日本武尊にて座すとばかり崇奉るとする心より外全く理說にわたらずば、豈習合の沙汰に及侍らん、されど今日まします人體にあらで其神靈を祭るなれば、其神理不識の沙汰を尋る時、儒釋の說を立て是をいはずば、又何を以てか其理體を明らめ侍らんや、蓋し儒よりいへば陰陽不測の德を鬼神とし、其體をあがめて是をまつる、釋よりいへば法身本有眞空の理體より萬の種子別れ出る妙用あるを以て、我國のみならず天竺往古より祭れる所の諸天神鬼も根本地を尋れば、出纏眞如の無漏の理體をのがるゝ物なき故に、權類化現の說を立つ、……法藏修德の彌陀、悉陀成道の釋のすがたを以て直に日本の神なりとかたるが故に、儒士の爲に謗をのがれざるか。

究竟說かう、說明しよう、といふ氣持になる。說かうとしなければ、佛教を持出すことも要らず、儒教を持出すことも要らぬ。神祕を說明しようとするのが行惱みの基なのです。說かずに濟むか、說かねばならぬか、それによつてこの問題は決著すべきものだらうと思ひます。

神道者は儒を嫌ふ。佛は勿論のことです。併しそれも極度まで持つて行けば、伊勢神道が危いものになりませう。兩部は潰れてしまふでせう。潰しても、潰れても何ともないとすれば、維新の際の分離と同じことになる。どういふ風になぶつても、神樣に祟も無い、罰も當らぬとなつたら、信仰を動かすことになりませう。

佛者の樂屋喧嘩はひどいもので、各宗互ひに爭ふ。況して儒者を向うに廻しての排擊ぶりは、凄じい位のものでありました。これもあまり募つて參れば、吉宗將軍の立てられた教育の規模は壞れる。宗派同士の爭ひの方は、それが爲に佛教を不信に陷れることになる。その邊の懸念があります故に、談義物は三教は同じ意味合のものといふことに說いてゐる。これは寶曆の時に限つたことではありません。その以前でも、三教が御互ひに抗爭、排擊し合つたならば、民心に惡い影響を與へるにきまつてゐる。つとめて避けなければならぬ事柄でもありますし、又さういふことは無くてもよろしい。三教抗爭などは無駄なことである。

そこで丹羽樗山は、一隻眼を具へてゐる人だけに、理義堂々たる見識を以て、如何にも公平な意見

を述べて居ります。それは談義物の作者に比して、寧ろ立まさつてゐるやうに見える。樗山は談義物の持つべきものを皆具へて居つた。その心配するところのものも、殆ど變つてゐなかつたでせう。たゞ吉宗將軍が寺小屋を廓清しようとする精神を、支持し發揮する點だけは、談義物と一緒になれない。これは談義物の談義物たる所以でバ一ツには時世にもよりますが、樗山と談義物との相違は吉宗將軍の教育方針を支持することが根柢になつてゐるか、ゐないかに在ると思ひます。

四八、ひろがつた讀者層

談義物には主意がありますが、又從つてそれに附帶した、いろ〳〵な條件をも具へてゐるわけでありますが、何にしても時世を心配する人が教化運動を起したのでありまして、一般の作者が拵へ出したところのものではないのです。殊に當時の作者連中よりも、もつと讀者層をひろげて行くやうに力めて居ります。それは本を餘計賣りたいといふ方の意味からではなく、教化の行屆くやうにといふ心持から讀者層をひろめることに、力めたのですが、それが一般に影響して、その後の讀物の捌け口はひろがつて行くやうになつてゐる。一體さういふことは談義物の作者が心がけたわけではない。後のは全く營利的ですが、談義物の作者はさういふことを考へてゐなかつた。從つて今まで本を讀んだこともない人達にまで讀ませるやうに拵へた、そのことに就ては、當時氣がついて居りましたから、二三

の評判もありました。それをこゝへ出して置きませう。

凡諸人の爲とて教訓を書た草紙も數々なれど、談義は詞ひらたに、下品下生のコリヤ又衆の耳に入るやうに書た故、終に金平本一冊讀んだなきものも、よんで嬉しかつた。（寶曆三年、「當風辻談義」）

……面白き書ありと、懷中にして見せけるに、世に沙汰する下手談義、雜長持といふ書なり、達人の作と見えて、世上の人への諷諫を巧に說たる、高座の談義に辻談義、並に聽聞衆の噂まで取込たる雜長持、いづれおろかなるはなし。（寶曆四年、「風俗八遊談」）

下手談義雜長持はいかにもよく下情に通じ、農夫商家の子弟をはじめ、氣追こりや又の耳にも入りやすく親切なる教訓。（寶曆六年、「當世花街談義」）

その當時本を讀むと申せば、むづかしい方では黃表紙に四書五經といふやうな種類のものと、もう一つは赤本と云つて子供の玩ぶもの、といふやうなわけでありまして、江戸の庶民としては、本に親しむことは無いと云つてもいゝほどの有樣でありました。若し讀むとすれば金平淨瑠璃でも讀む位の話です。そのことに就きましては「不辨舌」（寶曆四年刊）の中に、京者と江戸者（江戸ッ子といふ言葉は享和頃までなし）との喧嘩が書いてあります。

ある雪の日。問來る人を待兼し振にて。双盤を友としてゐける。米屋の伴頭手代ずる助といふ四

十にたらぬ男。雪の日の徒然に。時の風流本をそこはかとなく讀で。何やらん獨悅喜してゐたり。[illegible]し所へ。是も日頃此家へ來りし。外の伴頭龍天屋の氣助といふもの。來かゝりしが。是は元より江戸生れのものにて。ずる助は京育なりしが。氣助云けるはイヤけふはわるい雪でどふも下駄へ雪がはさまつて歩行かれぬ。ナニカけふは雪の日じやと思ふてすこし學文を仕やるがといへば。ずる助ヲヽサけふは餘り隙ゆへに風流物をとり寄せて見れば。中〳〵氣散で面白ひといふに。氣助ナニ面倒くさひそんな氣の詰た事をしやるより。河豚汁で一盃呑んで暖つたがよいわさ。よしに仕やれといふにずる助そふいやんな。こふ又よんで見た所は。中〳〵面白ひ。お身は江戸生じやによつて。こんな事は嫌ひじやろか。此本にも限らぬ。惣たいこんな事は江戸ものは埒不明ぬ。元がそふお身のやうに思ふによつて。こんな本に江戸の作はすくない。みな京誓願寺下ル町八文字やが板で。京作じや。チト不性せずと面倒な思ひもしやれ。[illegible]

この時代には八文字屋本を風流本と云つたらしいのですが。江戸の者は風流本を讀まない。その作者も江戸にはゐない、といふことが書いてあります。尤も八文字屋本も多少は江戸へ入つて參りましたが、それは同じ八文字屋本でも、風流本ではない、役者の評判記などの方が賣れるやうに思はれる。「廣嚴談」を見ますと、八文字屋本が寶暦の末に來なくなつたことが書いてあります。[illegible]

八文字屋の浮世草帋五冊、役者評判記三冊之事。自笑其磧といふ者述作にして、毎年正月二日定

式にて、大傳馬町鱗屋孫兵衛といふ繪草帋問屋賣出せり、五冊に名文多し……延享寛延の頃は兩書とも皆人待兼見る事にてありしが、五冊物は寶暦の末より絶て梓行なし。

四九、上方と江戸の振替り

この事に就ては水谷不倒君の書いて居られるものがあつて、八文字屋の潰れた模樣がよくわかる。持つてゐる板木を大坂へ讓り渡したといふことが、委しく書いてあります。

其磧去り（元文元年六月歿）、自笑去り（延享二年十一月十一日歿）、南嶺もまた此世を去つて（寛延三年九月十二日）、八文字屋の柱石は悉く挫折するに至つた。「其笑は子なり、瑞笑は孫なり」とある如く、其後の八文字屋は、此二人に依つて維持されたが、其笑は事務家にして、瑞笑が多少文才あり、著作に從事したといふ。而して瑞笑に次いでは、白露、自磧、李秀、素白等、八文字屋の作者として名を出してゐるが、唯其員に備はるのみで、兎ても八文字屋の大看板を支持するの才はなかつた。併しなほ墮勢に由りて數年は續いてゐたが、明和に至り遂に斷絶するに至つた。其結果として版木製本すべてが、他人の手に渡ることになつた。其こゝに至る詳細の事情は知るに由ないが、大要は版權を讓り受けた升屋大藏の告文に依つて知ることが出來る。

此所ニ御斷申上候

一京都八文字屋形ニ而往年より被賣弘候讀本類此度私方ゟ悉求板仕候間不相替御求御覽可被下候且又如先例之來春より年々新作讀本出し申候間御求御覽之程奉願候已上

明和丁亥年
正月

大坂心齋橋順慶町南
升屋大藏

京寺町通押小路下ル
金屋治助

江戸大傳馬町
鱗形屋孫兵衛

板元

賣所

同

此升屋は大坂心齋橋順慶町角の書肆であつた。當時升屋から賣出した書物には、皆此文が附して

あつたと思ふ。今日現存の「八文字屋もの」には、原版は極めて少なく、升屋の再摺本が多數を占めてをる。萬治四年に『大石山丸』を刊行してからも、八文字屋は四代續いて百年の長きに至つた。此間八文字屋で出版した書籍がどれ位あつたか、實に夥しい數に上つたことゝ思はれる。浮世草子、評判記はいふまでもない。淨瑠璃の正本、歌舞伎書類、狂言本、雛形、躾方、繪本類枚擧に遑なく、德川時代における文藝復興の氣運に乘じて、彼れの家は其文藝と共に榮えたのであつたが、併し其れも今は夢となつて、其家業も絶ゆるに至つた。而して八文字屋の退轉は、やがて上方文學の衰運を物語るもので、寛永以來さしも久しく流行した假名草子、浮世草子の系統も亦こゝに至つて一段落を告ぐるに至つたのである。（新撰列傳體小說史）

この時に八文字屋が滅亡したといふことは「塵塚談」にあるやうに、風流本が來なくなつただけではなく、文運が東西に振替へられた。その當時の京都は大分疲弊しまして、二三萬石の御城下のやうになり、花の田舍と云はれる程でありました。これは京都の金持が大體享保度で潰れてしまひまして、それからあとは職人暮し——手間取になつてしまつた。大坂にしても儲ける方でなく、稼いで溜める方になつてゐる。已に金持になつてゐる連中も、儲けが無いから利息取りの方に廻る。商機の活潑などといふことは、まるで無くなつてゐるのです。それですから延享、寛延度の江戸に、八文字屋本の讀者が少々あつたにしたところで、風流本には限りません、概して本を讀んで樂しむ人などは江戸に

ねないとも云へるでせう。その本を讀まない連中に食付かせようとしたのが談義物なのであります。

この時分の江戸は又京都や大坂に比べますと、商業上甚だ都合のいゝ立場に居つた。前來申上げて參りました通り、元祿以來貨幣の改鑄が屢々ありました爲、金銀の伸縮が出來、その爲に生活を脅かされて居りましたが、それも元文の改鑄以後は、大變江戸商人に有利になりました。この事は諄く申すやうですが、前來申して參つたやうなわけで、商賣を脅かされるのみならず、生計まで脅かされる原因をなして參りました。通貨の事柄ゆゑ「御府内雜話」に委しく書いてありますのを、諄いやうですが持出しませう。

御府内初め關東筋は往古より金子並鑄通用の國風に御坐候、依之先年（享保新金）古金慶長金の位大に勝ち、銀の位は格別に劣り、上方筋・關東方ゐ取引の諸商人共大きに難儀に及び候間、文字金（元文改鑄）御吹替に相成、金銀相應に相成候御工夫仰出され候事に候、右金の位勝と申儀は、往古より御府内にては、小判金一兩を銀六十匁と相定め置申候、此儀も御公儀樣より仰出され候事にては無之、只上方小判一兩を折々高下は有之候得共、荒增銀六十六七匁通用仕候に付、此方賣買仕候もの共、上方ゐ金一兩差のぼせ候へば、銀六十七匁が代物を送り下すゆへ、此方にて銀六十匁の割合にて商賣仕候へば、六七匁も德用有之積りにて、御府内十組の商人行事より諸問屋相談の上相定め置き申候由に承り及び候、然る處享保年中、段々金の位增長仕、小判一兩差

登せ候へば、上方より銀八九十匁が代物を差下し候様に相成、銀の位は日々下落仕、上方筋銀通用の場所難儀仕、尚又錢の位も大下落仕、金一兩に六七貫文も仕候よし、右に付上方筋困窮に及ぶべく思召され候てか、文金御新製、小判目方御減少にて忽ち小判の位落ち、金銀の位相應に相成、上方と關東共融通に相成、然れども其砌錢の位大きに勝ち、金一兩に二貫五六百文より三貫文位仕候由、依之此儀御思召に相叶はず、御府内錢屋共種々御吟味有之候へ共、兎角錢拂底に相違御座なく、依之鐵錢の新製仰出され（寶貨漫文抄云、元文二年深川小名木川錢座、鐵錢ナリ、貨幣通考云、元文五年三月ヨリ佐渡鐵錢ヲ鑄ル）是も忽ち思召の通に相成、日本橋御制札御文書の通、金一兩に付、錢四貫文より四貫三四百文位、銀ハ六十五六七匁位に相成、金銀錢とも位相應に相定。

元文以來、この金差ひが江戸の商人に取つて勝手がよかつたのであります。

江戸の商人はこの金差ひによりまして――享保の新金の事は姑く措き、元文以來、二朱銀、南鐐とも云ひますあの銀の出る安永二年の頃までは、仕入の上に於て二割二分前後の利得を生じましたから、大變樂に商ひが出來てゐたのです。

五〇、讀者を引寄せる方便

そこで談義物の先驅をなしたところの「田舍莊子」の序文を見ますと、樗山もその邊は十分に心得てゐたらしく、なるべく大勢の人に本を見せるやうにしたい、といふ氣持が十分見えて居ります。樗山は好阿や單朴のやうに町人教化を標榜してはをりませんけれども、一般に向つて、大勢を目掛ければ、町人卽ち商賈を包容することになり、且つは享保といふ時世からも商人濟度が必要でもあり、急がれもしましたから、自然と其處へ持込まれもすれば、取入れらる程の筋道が開けてをりました。

空言をたしむは俗の口なり、情によりて其奇々を談して道によらしめ、口によりて其味をすゝめて、生を樂しましめば如何といふに日あり、田舍莊子は其書なり……かの味をすゝむるの空言、膝を前にするの奇談、其意は道によらしめ、生を樂しめむとする哉。

なるべく耳新しい話や面白い話を澤山取入れて、讀者を引寄せるやうにした方がいゝといふことは、この序文や、

老たるも若きも是を見る人、頤を解、腹をかゝえて雀躍大笑する聲九萬里にもひゞかん。

などといふ跋文の文句によつて知れますが、さう云つて評判するほど、著者の心持が働いてゐたかといふと、そこまでは行つてゐない。併し心持としては思ひ切つて滑稽に出て、世間の笑ひを取るつもりであつたことは、本文を讀めば十分首肯することが出來ます。「田舍莊子」も當時の世の中に對する指摘を相當やつて居りまして、中にはなか〳〵昔とも思へないやうな書きぶりをしてゐる所がある。

次の賄の話などは、今日でもこんな事情の下に、賄賂の取遣りをしてゐるではありませんか。

扨冥官共へつね〳〵かたく戒むべきは賄なり、當坐の賄、少しの事にても大に私出來、害になる事あるもの也、地獄の大法なれば押出してはならず、是は御内義様へ、是は御息様方へとて名を替、品を替て持來れば、初めはしかりてかへせども、私は各別の義也、外の例には成申まじなど、詞を作り、縁をこしらへ〳〵したるく持來れば、元來は取まじきとおもふ者も、おもぎれなくたびたび返されもせず、心よはく一度二度受れば、それよりいつとなく贔屓の心出來、罪有てもゆるし度なり、公事をすれば勝せ度思ひ、叱り度事有ても叱事もならぬやうに成行者なり、まして欲ふかき者はいひ草のあるを幸に取込、少し延引なる者をば他の事によせてあて付、各別のあいしらいなるゆへに、兎角つかませたるが能ぞといふ程こそあれ、後にはひたと持込、大きに依怙贔屓出來て政事亂るゝ者也。

それから又年取つた蟻が若い蟻を戒めて居る話がありますが、これも面白い話だと思ひます。

蟻ども集りて炎天に蚯の干からびたるを引ながら、其内にわかき蟻つぶやきていふ、世間に生物多しといへども、皆飛ありき走り廻りて面々に餌を求め、休息の間もあるに、我等いかなる因果にや、何をするともなしに終日足は地につかず、身微なるが故に、たま〳〵餌を見付ても已一人の力にて得ぬ事あたはず、大勢仲間を催し玉の汗をながしてやう〳〵穴へ引こむと云、老たる蟻

是を聞て戒めて曰……惣じて生物それ〳〵の形をうけ、それ〳〵の立所に居てそれ〳〵に勞苦する事世間の常也、人とおなじく此世界に生れては人とおなじく勞苦すべし、我一人の世界にはあらず、造化の命ずる所に任せて可也、人並にはづれて汝一人濕々として何の勞苦もなくて居らむとおもふは大なる私也、他の生物は餌を求めて是がために羅にかゝり、黏につきて終に生命を失ふ者おほし、我幸に人に食はるべき厚味もなし、我が形の微なるを知る故に、生きたる蟲に取てかゝることなく、其屍を拾ひて賞翫する故に人咎むる事なし、いまだ蟻の餓死したるといふこともなし、汝身の分を知て外を願ふことなく、身に禍のなきを今日の幸とおもひ樂むべし、汝只私心去らば可也。

もう一つ烏と鵜の話があつて、面白い意味を持つてゐる、いゝ話だと思ひますから、こゝへ出して置きませう。

世間てれんの上手、上に立ツ人の目を暗まし、したゝかなる私をすれども知れぬを見て、不知恵なる男、さては成よき事ぞと心得て、おづ〳〵少しの私欲をして見付出され、大き成めにあふ、是をこそ鵜のまねをする烏、水をのむといふなれ、とかく鵜があるによりて烏がまねをして水をのむ也、世間に鵜といふ物なくば、烏も水はのむまじ。

これは、殊にこの時代を見せてゐるやうに思ひますが、この本ではまだ訓話じみてゐて、目の前の事

柄に鋭く突掛けて行きません。只だ烏の話などは、鵜があるから眞似もするのだと云つて遂にその非を悟らぬことで結んだ處が面白い、けれども鋭くないので利きが悪いやうに思ひます。

五一、佛教に對する大々指摘

樗山は又佛教に就ても、僧侶達の押しの強いやり方を指摘して居ります。一體佛教といふものは、勸懲作用の道具と見て、政治上の役に立つとして居つた。これは江戸時代の政治家の見方で、識者もさういふ意味で許してゐたらしい。それが浮土、日蓮のぶつかり合ひで、悪口雜言をしてゐるうちに、甚だ危いものになつてしまつた。悪い事をしても念佛で助かる、沒義道な事をしても念佛題目を唱へれば救はれる、といふわけで、勸懲の用をなさなくなつたのです。その現狀に就て、樗山は甚だ不得心でありまして、閻魔の口を藉りて釋迦に訴へさせる言葉として、押掛往生、押成成佛に就ての指摘を加へて居ります。

一、

近年淨土宗と名乘て、僧はかねを頭にかけ、俗人は藥盤のやうなる物をたゝきつれ、阿彌陀如來の御本願にて、いかやうなる悪人にも名號をさへ唱れば罪障忽消滅して極樂へ迎へ取玉ふ御約束なり、極重悪人無他方便唯稱彌陀得生極樂の御しるし、佛に妄語なし、極樂へ罷候とて、毎日幾千人といふ事もなく押來る。

それのみならず一向宗と號して、坊主は鮎の鮓を横ぐはへにし、俗人は肩きぬばかり著し、我〳〵は生れ出るとそのまゝ、何がなしに阿彌陀如來へ御約束申、かねて御助なさるべきとの御事なれば、別の子細も候まじ、極樂へまかり通るといふ、獄卒ども是は思ひもよらず、押賣押買は婆婆にても御法度也、まして押成成佛といふ事は此國になき作法也とて、毎日取あひさばかしく御坐候處にまた

日蓮宗と名乘て、膏ぎつたる坊主共、女中を先に押立、太鼓をたゝきつれて、我々は法花題目の行者也、釋尊四十餘年の御說法は此法花經を說んための足代にむだ事ばかり仰せられし也、無量義經に四十餘年未顯眞實と御坐候て、御うたがひ有まじく候、その上文殊菩薩龍宮にて此經の五の卷、提婆品を說玉ふに八歲の龍女、卽時に成佛して南方無垢世界の敎主となる、然らば此經にて女人成佛疑ひなし、召つれ候女人共ごとく〳〵く寂光土へつかはさるべし、あれに罷在候念佛申共は彼むだごとの爾前經を信じ、有緣の釋迦を捨て無緣の彌陀を賴む馬鹿者ども、阿鼻地獄を好む罪人なりと、いさかひ絕へ不申候、御裁許相濟申さゞる內は一人も通し申さず候、六道の傍に苫ぶきの小屋をかけ訴訟人ども入置候處に

達磨宗と名乘て短き衣に玉だすきして押來り、本來無一物何れの所にか塵埃を惹む、うろたへたる佛あらば、あたまを打わりて火にくべよ、馬鹿をつくす佛をば一棒にたゝき殺して狗にふるま

へ、佛といふ干糞也、文糞かき棒と云、乾屎橛也、火を殺し母を殺し佛を呵し祖を罵り、諸聖を慕す已靈を重ぜず、如來も一切の諸說は黃葉を金也といふて小兒の啼をすかす也、安養淨土十萬億土の遠き所は路錢費へなり、我等は如來藏へ直に飛込なり、そこのき候へなどいふて咎むる者をば咄喝と云てきめまはし、黃葉德山などいふ棒つかひども、やせ鬼をたゝきちらし、あたりへよりつかれぬ勢ひ、狼藉の至りに候、かやうにては閻魔城も破却に及ぶべし。（「田舍莊子」外篇）

さうして法然の一枚起請の中にも、一文不通の尼法師と同じ氣持になつて念佛を云はなければならぬ、といふことがある。親鸞も自分のことを愚禿と書いてゐる。利口らしくては成佛なり、往生なりの邪魔だとされてゐる。又題目にしたところが、佐前、佐後といふことがありまして、最初は法華經を讀誦する功德を主張したのですが、後には題目だけでよろしいといふことになつた。日蓮の教義では佐前、佐後といふことが重大な問題になつてゐるのですが、そんなことはすつかり忘れものになつてしまつた。そこのところに樗山はダメを出してゐるのです。殊に面白いのは、閻魔がさういふ風に訴へるのに對して、釋迦が「汝よろしく德を修めて罪人を信服せしめよ」と云つてゐる。こゝのところの說き方を見ますと、書經や易を取出して、誠（まこと）の說法をしてゐるので、儒者の云ふことを御釋迦樣が云つてござるやうな形になつてゐるのです。その譯を樗山は懇に說明してをります。偏學曲儒と申して、片方づいてゐるのは悪い、三敎兼學がよろしい。或は雜學と云はれるかも知れませんが往昔の

小野篁、都良香、菅原道眞を見よ。

奈良の佛教、平安朝の佛教といふ風に云はれても居り、分けられても居る。江戸になつてからのものは、江戸佛教と云つてよからうと思ひますが、それ〴〵に說相が違ふ、說き方が違ふだけの話で、佛教そのものが違ふわけではない。たゞ說き方が違つて參りますから、各宗ともにその模樣が違つて來るのであります。故に其時として樗山の佛教に類する斷按の如きも大いに注意すべきでせう。

五二、儒を表にする立場

最も大づかみに申しましても、悲しい聲で地獄極樂の繪解をしてゐた者が、歌比丘尼といふので世間の流行歌をうたふやうになり、それが遂に賣色にまで墮ちたのは、寛文以降の話ですが、萬治あたりから墮落したらしく思はれます。閻魔堂などの出來るのも寛文までで、寛文以後に出來た閻魔堂といふものは、江戸及びその附近には無い。かういふことだけ見ましても、それだけで佛教の說き方が違つて來たことは考へさせると思ひます。

況して享保前後のところから、談義說法といふことだけによつて、布教して行くことになりますと、各宗とも云勝ちさへすればいゝ、皆に面白く聞えさへすればいゝといふ風が、坊さんにも聽手にも盛になつて來ましたから、信仰の方は二ノ町になつて行く。それを傍觀する方から云ふと、それも方便、

これも方便といふので、佛者は何を云ふのかと云つて、地獄極樂を信ずるどころではない、却つてそれを一つの玩弄物にする氣分にまで持つて行つてしまつた。享保七年の落書に「釋尊極樂ゐの御觸、閻魔王より地獄ゐの御觸」といふものが出て居りますが、全く滑稽化したもので、地獄極樂は皆の玩具といふ心持がよく見えて居ります。樗山の書いた「六道士會錄」「英雄軍談」などといふのは皆異途の話で、地獄がこはれるとか、疲弊してゐるとかいふ話が書いてありますが、それ以後の地獄極樂の話は皆の玩物になつてゐるのです。俗に遍歷小說と云はれる、飛んでもない變つた處を押廻してゐるやうな話を仕立てたものがありますが、それは地獄極樂をおもちやにする心持の展開したものです。さういふ狀態の中に在つて、樗山は特に佛教に對して一の斷案を與へてゐる。然もそれが堂々たるもので、到底他の人々には出來ないと思はれるものなのです。

佛法には慈悲忍辱のおしへ有て義といふ教なし、故に人倫にはもちひがたし、文ありて武なし、是をもつて、國家の政事にほどこしがたし、然れども佛法もと人倫政事のために、立たる法にはあらず。

成程「釋迦には達磨、儒家には莊子」といふことも、彼にしてはじめて云ひ得られる言葉であらうと思ひます。樗山の意で云ひますと、彝倫道德の爲にすることを表にして行くのは、世教――世間の教である、儒と佛とは同じところもあれば、違ふところもあるのはそれが爲である。そこで「田舍一

休」の中に、儒を以て表として世間を教ふるの旨を得てゐる。どうしても世間は先づ常識によつて、彝倫道德で維持することでなければいけない、といふ意味を一方に云つて居ります。

儒家には五等の人倫を立て、君は上に尊く、臣は下に卑し、上下分有て身を修め家を齊へ、禮樂刑政を以て國天下を治む、佛家には上下分ちなく、廣く下賤に交りて、人の善心を勸め、惡心を退るを以て道とす、人々善に進むで惡をやめば貪ることもなく、嗔ることもなく、怨ることもなく、爭ふこともなく、天下治めずして治まるべし、故に佛法には禮樂刑政を用ひず、文をつらねず、武を事とせず、自然に化を布く。（田舍一休）

儒を表とするところは、吉宗將軍の意圖されたところに近いやうですが、佛教のすぐれたところを認めてゐるところを見ると、吉宗將軍の考へて居られたところとは大變違ふ。談義物と樗山の著作と違ふ點は、主としてかういふところに在るのです。

「下手談義」と並べて寶曆始終の花と云はれた「根無草」（寶曆十三年）などは、平賀源內らしくもない音色さへ出してゐるものですが、これも亦談義物の主意に近いものではない。たゞ體裁が似てゐるとか、文章が似てゐるとか、さういふ程度に過ぎません。一番談義物に近かりさうな「田舍莊子」でさへ、さういふ風でありまして、なか〳〵識見、文章は結構なものでありながら、畠が違つてゐるのです。

それですから寶暦年間にも、大進の「花間笑語」とか、蜷局の「風姿紀文」とか、服陳貞の「水灌論」とかいふ風に、「下手談義」に似たやうなものがいろ〳〵出て居りますが、それらは皆時弊を指摘して反省を求める、さういふ心持から教訓の意を持たせたものは澤山ありますが、肝腎の主意を持つてゐない「小説年表」でありますとか「滑稽本書目」などといふもので見ましても、たゞ何とはなしに滑稽物といへば「下手談義」を中心に、似寄りの本が澤山出てゐる。その中心が「下手談義」であることはわかりますが、どういふわけで「下手談義」が特殊なもので、その中心になつたか、そこのところを説明したものが無いやうに思ひます。

五三、日本橋の御高札は法律大要

其磧にも「渡世身持談義」（享保二十年）といふものがありますけれども、名前の方から申せば大變近い。又その趣向も、僧侶の談義に似せて作つてありますから、全く似てゐないこともありません。現に「下手談義」の序文の中にも、

自笑其磧が娘氣質（享保元年）息子形氣（正德五年）は氣に風流の花をさかり、裏に異見の實を含、見るに倦ず、聞に飽ず、是を當世上手の所化談義に比すべし。

とあつて、其磧や自笑の書いたものを活かしてくれてゐますが、八文字屋本などの中に、時世に苦勞

するやうなことは固よりあるわけが無い。たゞ談義物を書く人達といふものは、目玉の光が違ふ。かういふ志士仁人の氣持から見ると、西鶴の書いたものは、あの通りいろ〳〵あるのに、その中に何を認めたか。即ち「勝手の始末、利勘なる儀は西鶴が書に委し」とありまして、一般の人の殆ど認めぬ方のものを見つけてゐる。この目玉ですから、其積、自笑の書いたものも教訓に見える。實際さう見ることが出來たのでせう。

それが「下手談義」になりますと、先づ、

御法度の旨を守りて朝夕忘れざれば疑なく其身は治り候。

と書いてある。それから、

別の子細さふらはず、但三綱五常と申事の候も、御高札のおもてに背かず候樣にと心懸候へば、よろづ其中にこもり候也。

とも云つて居ります。更にこれを打返して、

外にむつかしい事を學び知るにも及ばず、日本橋の御高札を能々拜見して、何と書てあるぞ、どのよな事が第一には書付てあるぞと、とくと見て合點行ずば、物知つた人に問たるがよし、猶又時々廻る御觸書を急度うつして張置、家内の男女上下共讀聞べし。

とも云つてゐる。日本橋の御高札をよく讀むがいゝ、と云ひ、時々廻つて來る御觸書をよく讀んでゐ

なければならぬ、と云ふ。さういふ風に心がけさへすれば、世の中に恐しい事も、心配な事も無い、安らかに一生を送つて行くことが出來る、國恩に背いては、神も佛も守つてくれるものでない。さういふことが數箇所に出て居ります。

國恩に背は神佛も守らしやる事じやない。（續下手談義）

此世の王法に背ひては念佛題目を浴るほど唱へても、阿彌陀も留守をつかひ給ひ、地藏も顏を横にしたまふべし。（同）

此世で惡をすれば題目や念佛で消はしませぬ。（同）

その日本橋の御高札といふものは、法律の大要を書いたものです。

定

一　親兄弟夫婦を始め諸親類にしたしく、下人等にいたる迄、これを憐むべし、主人ある輩は、おの〳〵其奉公に精をいだすべき事

一　家業を專にし懈る事なく、萬事其分限を過べからざる事

一　いつわりをなし、又は無理をいひ、惣じて人の害になるべきをすべからざる事

一　博奕の類一切禁制の事

一　喧嘩口論を愼み、若其事ある時猥に出合べからず、手負たる者隱置べからざる事

一 鐵砲猥に打べからず、若違犯の者あらば申出べし、隱おき他所よりあらはるゝにをいて其罪重かるべき事

一 盜賊惡黨の類あらば申出べし、急度御褒美下さるべき事

一 死罪に行はるゝ者ある時、馳參るべからざる事

一 人賣買かたく停止す、但し男女の下人或は永年季或は譜代に召置事は、相對に任すべき事、附譜代の下人又は其所に住來る輩、他所へ罷越、妻子をもち有付候もの呼返すべからず、但し罪科ある者は制外の事、右條々これを相守るべし、若相背くに於ては罪科に行はるべき者也

一體吉宗將軍は「六諭衍義」の項目を以て、直に法典編纂をするやうに考へて居られたので、その形で出來たのが元文律です。「官中祕策」の中に載つてゐるのがそれですが、罪科を類別するのに「六諭衍義」のやうに六ツに大別してあります。清の王德明が「春秋ハ無象ノ刑書、律ハ威用ノ麟經」と云つた。法律といふものは彝倫道德の現れである、といふ見解なので、平山兵原が大いに褒めたさうですが、これは吉宗將軍の御誂への言葉だつたのであります。

五四、假名本の推奬

貞永式目以來、武家相違と云ふ。これは公家法度との違ひを云ふのださうです。武家の刑律といふ

ものは、所謂支那法系でもなければ、羅馬法系でもなし、印度法系でもない、全く我國だけのものなのです。この武家の刑律がもつと〳〵發達しさうなものであつたのに、外來思想の爲に思はず知らず變化させられてしまつたやうに見える。それですから吉宗將軍の考へて居られた、法律は彝倫道德を維持するものといふ考へは、武家法度の全部に行渡つたとも云へませんが、その中には慥にさういふものがあつたのです。

殊に江戸時代の法律などは、力めてさういふ意味を持たせ、さういふ方面に進んで行かうとしたもので、「下手談義」は御高札の文言を以て直に修身齊家の效能あるものにしようとしてゐる。それですから勿論「六諭衍義」の事も云つて居ります。

其隙に大學の一卷もおしへ、六諭衍義の大意など毎日〳〵讀せよかし。（下手談義）

これは、手習師匠が謠を教へて居りましたが、さういふ隙の場合には、毎日「六諭衍義大意」を讀ませるやうにしたらよからう、と云つたのです。寶曆の初と云ひますと、「六諭衍義大意」が出てから三十年ほどたつて居ります。その當時は著しく感激したものも、これだけの年がたちますと、談義物の中に、毎日讀ませよといふことが書いてあるほどになつたので、それ故にそこを中心とした教化運動が起らねばならなくなつたのです。

それから「續下手談義」には、

近年板行仰付られし六諭衍義に長上尊敬とあるがこゝじや。

と書いてある。昔の子供はよく本に何と書いてあるかと云つて、父母から聞かれたものですが、こゝにも「六諭衍義」に書いてある、といふことが出てゐるのです。

「下手談義」には又、學問をすると人柄が惡くなる、學問をしない方が素直で正直だ、といふことが書いてある。學問をしても身が修らぬ有樣だといふのですが、これは徂徠派の學問がはやるのをあてこすつたやうに聞える。畢竟本途に教へ込まぬ爲だ、といふことになるのでせう。

左傳國語史記漢書より外は見ぬ物のやうに心得、吾國の古今に通ぜず、武藏坊辨慶は石川五右衞門が聟といふてもわきまへしらず、かけまくもかしこき我日の本の神の道をも其意得ぬ文盲なものと謗あざけり、宋儒を憎む事、日蓮宗の阿彌陀をこなすがごとし、我こそ當時の眞儒學者と思ひあがれども、其身の行跡は第一女色は食より好、酒はあたまからあびる、片陰では奇偶をもくむべし、此ころは住馴し芝口を立退き、川崎へ引越た、其子細を或人のといければ、イヤ別の事でもないが、ちつとも中華へ近いやうにと答たげな、前代未聞の唐贅者。

この中にある川崎へ引越して、それだけ中華へ近くなつたといふのは、寶曆度のハイカラ男の言草だつたのでせう。それが忽ち小咄に拵へられて、中華に近いといふ話が殘つてゐますが「下手談義」にはそれを叱る言葉も書いてある。

あれがやうに唐風する日本の國賊なり。

さうして、

神武以來數千歳、和國は和國の風儀有て濟だ國を、勿體なくも唐風にして汚さんや……兎角日本はどこ迄も日本流がよし。

と云つて居ります。稍〻誇張した處も無いではないが、これは實際度の話であつて、同時に今日の人のことを云つてゐるやうな氣が致します。

どうしても皆の學問をする樣子といふものが、人見せの學問である、もつと著實に本を讀まなければならぬ、といふことを申して、吉宗將軍の御好きだつた假名本には結構なものがある、學問をする人達は、假名で書いたものを見縐る風があるが、なか〳〵さういふものではない、と云つて居ります。

商人の學問には史記も左傳も入もうさぬ、求林齋の町人袋、關氏の冥加訓、藤井蘭齋の和漢爲善錄、商人夜話艸、家內用心記抔を晝夜家業のひまに讀がよし、此たぐゐの假名本、近年澤山あるげな、假名じやとて見こなさずによまれい、町人分上にげだかい事は入申さぬ。

それだから「無點の唐本がよめても親に苦をかけてはへちまの皮」である。農家の人の爲としては「百姓袋」とか「農業全書」とか「民家分量記」とかいふものをよく讀めば、役に立つてまことに結構である。徒に學問沙汰をする連中に對しては、

歴々の書物あつかひする學問三昧の客人達さへ粋に成たがり、貝原翁の平假名を叱あざけり、高上な事いふを手柄にして、教訓の假名本よむものは恥しがる樣になり、まんざら合點は行ねども左傳の史記のとさわぐ衆も、粋には成たそふで、細見買て熟讀するが多し。

といふやうな皮肉を用ゐてゐます。この時分の人達は、詩や文章のうまいといふ方に力が入つて、詩文の會などに出かける。さういふ會へ集る人達がどんな身持であるかと云ふと、相當放蕩な者が多い。それが心配に堪へぬから、もつと眞面目にやつて貰はなければならぬ、といふ意味のことも述べて居ります。

五五、男立狂言の惡對趣味

もう一ツ注意すべきことは、若い者がきほひ組の眞似をするといふことが書いてあります。あれは幕府の普請方の人夫から起つた風儀ださうですが、手振で方々力み廻つて喧嘩をする。むやみに惡對を云ふ。その風俗からして人と異つてゐる。さういふことに就て隱居の膽翁の口を藉りて、末子の乙吉に異見をする、といふことになつてゐるのです。

そちが髮は何者がゆふたぞ、尤時代〳〵で伽羅の油も付ねばならぬが、それも品がある、其卷鬢おいてくれ、小袖の尺がながひ、お婆々、あれ縫上して著せめされ、いらぬ町人の絹布、冥加が

盡る、其大脇指は居合拔の藥賣に拂てやれ、町人の刀物は拔と手前の命がないぞ、合點せよ、町人袋に此事を能書ておかれた、讀てみよ、わが樣な者が、わるふすりや錢湯で立ながら湯をあびたり、風呂の入口に腰落て垢かくものじや、たしなめよ、一つまへに著る物著るな、前帶すな。

小智慧のある若い者が、きほひ組の眞似をして、伊達衆のやうな風俗を見習ふ。隱居が異見をしたのは、その眞似をする方ですが、本物のきほひ組はどんな風俗かと云ふと、先づ次のやうなものなのです。

六尺計の大男が市松染のほうかぶり、青梅の布子にうこん染の木綿繻絆、上著より一寸五分程ながふして、帶は水風呂桶のたがのやうに後下りに尻へぬけそふにしかも前帶にむすび、ほこりの立日和に高木履から〳〵ならし……いかにも五町七町が内で已をおぢぬ奴は一定もない、その筈たは、慮外なこつたが、おらは傷寒太郎兵衛が子分、時疫源七といつては、ちときなくさい男だから、大屋でも名主でも鬼ではあるまいし、鬼神ではあるまいし、つがもない事、こわい物は日本の内に天狗樣ばかりと、片肌ぬいてなでさする腕を見れば、肩さきより手首迄、此所小便無用と籠字の入墨子。

若い者がその眞似をして元氣を見せる。

年に二度づゝ深川兩國の茶屋で、仲間の伊勢講、朝から喧嘩の心がけで、毎年嘉例のつかみ合を、

兩國の茶屋の亭主も最合呑込、御膳は喧嘩過に出しましよかと伺ふ程な名題な寄合。隨分無法なものです。このきほひ組の連中の常に遣ふ言葉が悪對なので、悪對に皆が興味を感ずるところから、芝居の方にも男立狂言が流行する。男立狂言なるものは、悪對の興味の増長したものなのです。

寶暦度の男立狂言は、寶暦の初からありましたが、よく特長の現れたものとしては、寶暦四年の中村座の春狂言、四代目團十郎の荒五郎茂兵衛、本名景清と、歌右衛門の鐵壁武兵衛、實は三保谷四郎との出入でしたが、これは、歌舞伎年代記を見ると、こゝに「悪タイノセリフ」と書いてあります。それが明和、安永度になりますと「暫」のツラネにも「慮外働くうんさいめら、襟髪握んで片端から、あかん堂の家の棟から、築地の海へほうり込む」といふ言葉がある。「あかん堂」といふのは、芝増上寺の内にある團十郎の菩提所のことなのです。

それから又「五人女」のツラネを見ますと「布袋お市と市川の一字傳授やあくたい傳授」といふ言葉がある。團十郎は金平淨瑠璃から持込んだ荒事の外に、悪對をも家の藝にしてゐたかに見えます。例の「助六」の中にもありますが「悪くそばへると、大どぶへ浚ひ込むぞ、鼻の穴へ屋形船を蹴込むぞ、こりや又何のこつた」と云ふ。きほひ組の綽名を「ゴリヤ又組」と云つたことは、前にも申しましたが「こりや又何のこつた」といふ言葉は、今日も歌舞伎十八番の中に殘つてをります。

寛政度になりますと、愈々ツラネは成熟して參りまして、舞臺の上のきほひは益々雄辯になりましたが、寶暦度はまだそれほどではない。今日でも猶痰火を切るといふことを、面白いことのやうに思つてゐる者もありますが、あれは皆ツラネの文句に因緣のあるものなのであります。

ツラネやセリフの中に悪對が澤山入つてゐるといふ事は、私が申すまでもありません、三馬が「浮世風呂」四編（文化九年刊）の中で已に書いて居ります。

むかしは男達などの出端には、つらねといふのが有て、悪對をなが〳〵と云たものさ、男達にかぎらず、すべての役につらねといふものを長たらしくいふを、見物が耳をすまして聞いて居たものだが、當時はきく人もないから、つらね役者もなし、兎角てきぱきと早手まはしな事がはやる世の中、夫だから御覽じろ、團扇賣のせりふだの、たばこ賣のせりふだの、朝比奈のつらね、對面のつらねなどゝいふものが棄たれ切つた、今時の對面のつらねは短くつまんだものさ、むかしのやうに面白い文句を、なが〳〵とは云てゐぬはさ。

もう文化の頃には、その風は衰へたといふのですが、衰へたと申しながらも、助六のセリフの中の「こりや又」などは大いにやつてゐるので、昔の俤が殘つてゐないことは無いのです。

五六、皮肉を極めた名文

併しそれでは悪對のセリフといふものは、古いところからあつたかと云ふと、寶永年中の中島勘左衛門の男立などは、悪對を云はなかつたと「下手談義」の中に書いてあります。悪對をきほひ達が云ひはじめたのは享保頃からですが、盛になつたのは寶暦前後からで、寶暦度にはやつた男立狂言は、きほひ組、コリヤ又組の好みを取入れた、近頃の言葉で云へば劃期的のものなのです。手子の者とか、鳶の者とかいふ連中の風習を、それ以外の者が興じたので、むやみに強がるのを快いと見て、若い者がその眞似をする。教へられなかつた親の子は、自然さういふ歩き方をするやうになるのです。

氣分といふものは恐しいもので、火付盗賊改の藤掛伊織が退役する前夜、この人が退役したのは延享二年五月十二日ですから、十一日の晩です。數百人のきほひ組が藤掛の屋敷を襲撃して大騒動を起しました。これは藤掛が在役中に、悪少年の取締を大分嚴重にやつたので、江戸中のきほひ組が靜になつた位であつた。その返報として、退役の前夜にあばれ込んだのですが、幕府の役人に對して、ならず者が亂暴を働くなどといふ事は、前例の無いことでありまして、彼等の馬鹿々々しく景氣立つてゐたことが知れると思ひます。その餘風が殘つて居りましたから、芝居ばかりでない、河東節の「助六後日の道行」のやうに、悪對淨瑠璃と稱すべきものがあり、歸橋の「遊婦里會談」などは悪對小説と云つてもいゝかと思ひます。

さういふ風な有樣でしたから、當時としては傍觀するに堪へぬのは無理からぬ次第である。それも

その筈で、談義説教が已に悪對まじりでありますし、儒者の講義でさへも悪對を入れる。木像を敲くとか、畫像を打つとかいふことまでやる。神道講釋でも悪對を用ゐる。さういふ風に意外な方にまでひろがつてゐるのを見ますと、芝居の餘勢が遂に役人の宅を襲ふやうになるのも、あながち不思議では無い。時の勢は恐しいもので、却つてさういふ眞似をしない、おとなしい若い者が意氣地なしに見えたかも知れず、それが又「下手談義」の作者達には見ても聞いてもゐられぬ有樣だつたのでせう。「下手談義」はさういふ指摘を致しましたが、その外に、芝居も勸善懲悪の效用があるやうに、一方では云はれてゐるけれども、今日の芝居にさういふ效用は無い、と云つて歎息して居ります。又神佛の開帳、僧侶の品行、町人の葬式、農村の都會化、かういふやうな當時の特別な現象に就て、大變多くの指摘をしまして、要するに人が利口ぶり、才覺がる風がある爲、さういふ風になるのだと云つて居ります。その中で最も奇拔な趣向で、目新しく思はれるものが二ツある。然もその二ツが互ひに表裏をなすところのものですが、その一ツは末期屋惣七の引札です。

この頃では商家が廣告、宣傳につとめるやうになつて、引札なども盛に行はれた。それは慥に新しい事柄ではありましたが、葬儀屋の引札などはどこにも無かつたでせう。この全文はひどく面白いもので、實に皮肉を極めた名文であると思ひます。眼前の狀況をこれほどまでに巧に指摘したものは、他に類がありますまい。葬儀屋の引札といふことは作者の思ひつきに相違無いが、よく〳〵これを見

ると、當時の世態人情を丸出しにしてゐるやうな氣が致します。

午慮外口上書を以申上候、先以て私店、念佛講題目講御世話役様方、御贔屓に寄、段々御用仰付られ追日繁昌仕、有がたき仕合奉存候、隨て當年は子供向の棺桶、世上一統賣切申候故、此頃直段殊の外高直に罷成、御難儀に及候由承り候、其上下地拂底に付、俄に仕立候間、急なる間に合ひ申さず、第一細工麁末に致し候故、御寺迄の路次の間も心許なく存候、私義は運氣を考へ澤山に仕入、隨分澤山に致置候間、何程成共御用次第仰付られ下さるべく候、直段付け仕、御目に掛べく候へ共、色品多く御坐候故、其儀に及ばず候、御氣に入申さず候は、幾度も取替差上申べく候

一御弔の節、着用の水色麻上下并御編笠の義、是は御屋敷様方におゐて一切御用これ無く候故、世上にてもさのみ高直には御坐なく候へども、畢竟御調へおかせられ、御嗜の道具にも罷成らず候間、私方にて損料貸に仕候、御入用の節仰付られ下さるべく候

一自然御親類方これなく、女中御乘物御坐なく候て、氣の毒に思召され候はゞ、早速仰聞らるべく候、忽何程なりとも御望次第乘物相ならべ、隨分達者に泣候女計差出し申べく候、尤乘物に付候下女も御望次第、白小袖又は無地物、御好次第相添差上申候、且又御寺にて御引導前、鐃鉢鳴次第、拍子能く同音に泣出し候様に、兼て稽古致させ置候へ共、萬一其節泣き申さず、拍子ぬけ致候はゞ賃銀請取申間敷候

一御手前御親類様方に依らず、女中方御供の白小袖并帯綿帽子、且又夏物等色々損料貸に仕候、但し御家がらにて御供の女中迄、殊の外落涙に及ばれ候故、萬一白小袖にしみ、きわ附出來致候はば、御返しの節しみの大小に依り御心附下さるべく候、是は御入遣宜しき御家に聞々これある事に御坐候故、念のため申上候

一町方御弔、近年仰山に罷成、只今にては御先供これなく候ては、格別淋しく相見え候、萬一御馴染の方これなく、御先供も御心當御坐なく候はゞ、何時も拙者方に仰付らるべく候、何十人も御望次第指出し申べく候、尤御寺の遠近に從ひ直段有増別紙に積り置候、萬一雨天に御坐候はゞ、賃銀定の外少々相増申請候、勿論先供の鼻には寺々道筋案内功者に、隨分馬鹿らしき鐵面皮なる男をすぐり、耳に珠數を掛させ自慢臭き顔にて歩行候やうに申付べく候、但し饅頭赤飯下され候節は、何程も其者働次第ニ遊ばされ御見のがし下さるべく候

一町中新道裏店の御衆中、念佛題目の御講も御坐なく候て御葬送淋しく氣の毒に思召候はゞ、是亦仰付らるべく候、早速究竟の若手に各肩に掛け候羽織、腰にはさみ候足袋、きせる、半紙の四折迄念入、御施主方俗ニ葬主ヲ施主ト云にかまわず、飛がごとく欠させ、道すがらも往還の女中にわるロいはせ、御寺へ參り付候ばゞ、よい〳〵と手を拍ち、則烟草に致させ申べく候、亦は品により隨分申付差上べく候

一近比町方の習にて、御病人いまだ御息これある内より御近所の方々、御心付られ、門の戸をさし簾を御懸なされ候へども、御取込の節、御心遣に御坐候儘、拙者方へ御人下され次第、早速青き簾に忌中と申二字、寺澤流の能書にて認め、板行に致置、何時も早速の御間に合申様に仕、損料の義は御忌中の日限次第、少々の賃銀にて借し出し候、甚御手廻し宜候間仰付らるべく候

一御寺にて帳附役人、是も葬禮の故實、能く存知の浪人抱置候、微塵も筆法に活たる字なく隨分死字に書き申者を差上候間、仰付らるべく候

右の外葬送一件、卒都婆、經帷子地、流灌頂、樒、茶碗、七本佛等、世上より格別下直に差上申候、別て卒都婆の義は始終御寺の垣に罷成候物故、大風の節、折れ申さず候様に節なしの上々の木にて手厚く致置候へば、心なき御寺方御悦喜の御事に候間、仰付られ下さるべく候、且又六道錢、紙にて拵へ置候、御用の節御調へ下さるべく候、卯四月より賣出し申候已上

四軒寺町角より四軒目　　暖簾御目印㊞

早布にて白地に此の如く仕候間、御見知置下さるべく候、世上に類見世多くこれあり候間、自然御使にて御取寄遊され候節は、何時も死の字末期屋惣七と御尋下さるべく候

五七、讀み方を教へる思はく

「下手談義」の作者は、これに就て三種の思はくを書いて居ります。この引札を見て、忌々しいと云つて打棄つてしまふのが一ツ。老少不定は世の習ひであるし、便利なものだから取つて置けといふのが一ツ。これは尋常な人間のしたことではない、時世を憂ふる、諷諫する心持からわざとしたことだ、といふ風に解釋するのが一ツ。この三種だといふのです。こゝで斷案をつけずに手を拔きましたのは、談義物全部が諷諫で、反省を求めるものなのですから、「下手談義」の讀み方を教へる意味で、かうしたのではないかと思ひます。

もう一ツの趣向といふのは傳授事で、牢人が深編笠で金持になる傳授を讀賣にしたやうになつてゐる。傳授事もむやみにありましたが、まさか六文で賣買するほどでもなかつた。たゞその弊害を見越して、かういふ風に云つたのですが、これが又なか〳〵あてこすりの甚しいものです。

一福者と成たくば第一義理ばるべからず、三年犬といはれて、一代金銀を持通すべし、左もなくて斯した義理じやから是程の音信はせずばなるまい、いや此恩があるから、あれをかくまはねばならぬなどゝ思ふと、一生金は持たれ申さず候

一古き歌に知る人に物ばし貸すな只やりねかさぬ恨は乞ほどになしとは、金持の讀し歌にあらず、手前勝手に貰ふ算用せし人の讀しと聞へ申候、金持候人の氣質は水魚の如き友達にても、さあ借した金銀をはたる段には唐辛子を山葵で和へたる樣にゐらひどくてたまる物にあらず、中々ちつ

ともあはれなりけりと云ふ七文字を入れては金はもたれず候、此世から鬼と成申さず候へば一向金銀はたまり申さず候

一寺方へ寄進など致候義、無益のやうに存候は古風にて候、兎角海老で鯛と出かけ候が能く候、先づ少々寄進も目に立ち候ほどに致し、貧地の住僧に思ひつかれ候へば、あちらからも色々と取入、時々手作の青物、又は折に入たる菓子など持込、此方損のゆかぬ事に候、その以後かならず金借り申度由、云込るゝ時に、折節手前にはこれなく候、存じたる者の方へ申遣し候はんが、但し彼は利金高く、手に合ひ申間敷とにぬで見るべし、金借るほどの者、其節になり、利が高くばと止めに致す者は餘りこれなく候、跡で首しめる事も思はぬ者から、何とぞ夫れでも御借り下されと出るものに御座候、其時早速貸しかけ、利金手ひどく御取りなさるべく候、佛の箔じやからのなんのと、心弱き事にて參るものにて御座なく候、地獄へも極樂へも金次第にて候へばこそ、分限者の弔に御經の念の入る事、目前御覽の通りに候、目蓮舍利弗に借し進じ候とも御用捨有るべからず候、兎角後生心これあり候ては段々金へり申べく候

一不相應なる人數これ在り、不憚に相見へ候無盡これあらば、幾口も御入なさるべく候、親脇より一ツ二ツ迄に手短に御取りなさるべく候、必潰れ申べく候間、何よりの金儲にて御座候、惣じて無盡は格別に功者御坐候、朝夕商賣に致し居候者ある由、それへ御取入り、振り闇、玉取りの祕

術御傳授の上は、飴を延し候様に金はうなり候ほど延び申べく候、はて地獄も天道もおそれてはなり申さず候、先の事は兎も角も今日金さへ御持候へば、あほうも利發者の上に立ち申候、能々御心得なさるべく候

一第一の禁物は聖賢の書にて御坐候、假初にも聖人の教を聞込候へば、是非に仁心出來候、君子は厚に失すとかや、どふでも人を憐みたく罷成候、是れ大なる毒にて御坐候、必御無用になさるべく候

一朝夕、門に立ち候托鉢の僧その外願人非人等へ手の内の法施、定はつちなど入れ候人候へども、さりとは無用になさるべく候、おしを強くつれ〳〵と一文も施さぬが能く候、一錢と申ても一月に三十文、年中には三百六十文、裏店の店賃ほど延び申事に候

一奉公人隨分油斷なく鼻へ手をあて御遣ひなさるべく候、若し相煩候はゞ早速宿へ御引わたし、人代御取りなさるべく候、手前にて醫者に御かけ成され候はゞ、一服五分禮のつもりにて、給金の内にて御引とり成さるべく候、其上養生叶はず相果候はゞ、給銀勤候日算用になされ候て、殘金用捨なく御取成さるべく候、彼は他の子なりと、もの字をわの字に作して御遣ひ成さるべく候

右の外勝手の始末利勘なる儀は、西鶴が書に委しければ、爰に記すに及ばず候、唯肝要は握つめではなさぬがよく候間、一代の守本尊には、吽の仁王を御信仰成さるべく候、若し御龕相にて阿

の仁王を御祈候へば、手をはたきあいた口もふさがぬ樣な目に御逢なさるべく候、千萬も入らず唯强欲を元として慈悲有まじき專肝要なり、尤猥にほどこし候は聖人もほめ玉はず、倉に財寶がとぼしければ仁義も行はれぬと仰候へども、夫はなまぬるく廻り遠に候へば、只人をつき倒しても手前へ取込がよく候、くれ〳〵此段御心得なさるべく候、是私の申事にても御坐なく候、かたじけなくも丹後國由良の湊の大福人三庄太夫直傳の金の持やう、よく〳〵御信仰なさるべく候

これにも亦二ツの思はくが書いてある。何だ馬鹿々々しい、こんなことを書いて、六文たゞ取られた、と云つて腹立つ者が一ツ。「仁すれば富まず」といふ言葉がある、我が爲にさへよければ人の害になつても構はないと云つて金を溜める、この中に書いてあるやうな人を戒める爲に、わざとかういふ讀賣を拵へたのだ、とする人が一ツ。この後の方の人が、前の引札の第三番目のと同じ心持の人だ、といふのです。この文もなか〳〵名文でありまして、この時分の金を溜める人の心持がよく出てゐます。世間に三角の法といふのがあつて、義理を缺く、恥をかく、附合を缺く、さういふ風にしなければ金は出來ない、と云つて居りますが、丁度こゝに書いてあるのと同じ心持であります。

五八、談義物から生れた穴

かういふ風に一々世の中の有樣を證據にして、教化を行はうとする、その指摘に陰も陽もありまし

て、その指摘の仕方によつて、滑稽になつて笑はせもすれば、感心させて教化の效果が擧るわけでもあるのです。

好阿は正續十卷の「下手談義」の中で、たゞ一箇所、

かぞへも盡きぬ婆々さま方の穴は、皆愚僧が知りぬいて居れど、そう〳〵叱ると、いとゞさへ聞衆のない談義、後は高座と我らばかり、先だまりましよ。

といふところで「穴」といふ言葉を使つて居ります。併しこれまで指摘したのは皆「穴」なので、穴といふことに就ては、已前に書いたものがありますから、それをこゝへ出して置くことに致します。

穴といふから穿ちといふ言葉も出て來る。穴といふ言葉は談義物から初まつたやうだ。さうならば寶曆以來のものらしい。我等の知つて居るのでは、

人のあらを見出して、穴とやら名をつけ、手がらさうに（寶曆三年版「水滸論」）

今狂言にする男作（をとこだて）といふは、なるほど惡體を第一とつくり、穴といふ穴を誹（そし）する（寶曆四年版「下手談義聽聞集」）

牛込の邊に住む鼻の先を智惠右衞門といふもの、高田の穴八幡へ一七日參籠して、夢中に一卷を授かり中に

穴　今世間之時花詞（はやりことば）

以レ是可レ爲二趣意一

とあつて、本文にも、

まことに今人の拔めのなき世に、人の仕落したる事を、から名に穴と唱、是以一ト趣向にすべし（寶曆四年版「不辨舌」）

とある。是で穴といふ言葉が當時の流行語だつたのが知れ、人の仕落しを見附けて穴と云つたことも分つた。

談義物と云へば誰も靜觀房好阿の當世下手談義（寶曆二年版）から算へ出すが、其の後を勘定するのに、書名に談義と有るのだけを拾つて計數するのは宜しくない。元祿十六年版に傾城辻談義があり、享保二十年版に渡世身持談義があると云つた譯で、若し書名だけで往くとすれば、何も寶曆以降に限つて居ない、と共に寬政の頃までも、談義と標題しない談義物が澤山ある。種彥も田舍源氏九編（天保四年版）の序に、

昔の田舍談義（寬政二年版）は狐の夜話（明和四年版）雜長持（寶曆二年版）と、もろともに流行、十方世界の穴を穿ち、一切衆生の頤を解。

と書いて、穴といふ趣向を捉へて一列一體に見渡して居る。談義物は當世の流行でいふ穴を覘つたもの、それを興味のある訓誡に仕立てた處に手際がある。さうした作風のものを汎く談義物と

云ひたい。眞正面からの教訓は穴などに食著するものでない。又むき附けた抉剔ならば惡穴で、唯だ毒々しいだけになる。其處を外して談義物の趣向を立てた。從つて面白い訓誡の興味から談義物を滑稽本と見られ、訓誡といふ生地から心學本と混同されもする。だが滑稽に眺めるのも、只だ訓誡と聽くのも、穴を繞つて居るのを忘れては、談義物を見る眼のない人なのだ。滑稽も訓誡も其の穴を潛らないのは無いのを心附かないとは怪しからぬ。心附いたら滑稽本、心學本と紛れやうもない。別に一個の談義物の風采があるのに合點が往かう。

此の穴を往くことが、談義物と洒落本（蒟蒻大蒟蒻のみならず、包括して洒落本といふ中に、是非とも尠からぬ差別があるけれども、爰では汎稱して置く）の過渡になる。書いた物を活かすために、通言の嘘はねえ、悉く實際に出て居るといふ意味、其の境涯に現を抜して了はないから、美醜善惡が十二分に知れるといふ意味、此の二個の意味が洒落本の描く穴から請取れ、その觀察に生熟があつて、大通と半可とが出て來る。談義物の穴は專ら反省警發させようとして、心得違ひを指摘したのである。穴を覗ふ初一念は本より著しく懸隔して居るけれども、透間を往かうとするのは違はない。穴は談義物と洒落本との間に架け渡した橋梁であるのみならず、自己批評に誘ひ、嘲罵の語の『ザマを見ろ』を招來したことは注意すべき次第と思ふ。

思ひ出し次第、口に任せて人の穴を書（明和六年「雜交苦口記」序）

當世穴さがしも明和六年に板行された。

當時の咄は只たはけの阿堵を盡すのみ（安永二年版「聞上手」二編）

深川に遊んで深川の穴をしらず（安永五年「天狗髑髏鑒定緣起」）

惡穴をいはず、惡酒落を決してせず（天明二年「蛇蛻青大通」）

遊子のあなを穿ぬれば……（天明五年版「令子洞房」叙）

しがく所の穴の穴まで知つて居る（寛政十年版「辰巳婦言」）

此の間にも語意が移動して往くのを感じさせられる。何としても年月の經つに從つて寶暦の流行語のまゝでは居ない。鯉丈が三馬を褒めて、

五分も透ざる人情の穴を穿ちて見せられ（文政七年版「牛嶋土產」序）

是は有る穴を見附けるのではなく、斯うでは穿鑿するのだ。突込んで往くのだ。

院本の御館場に傲ひ、或は戲場の光景を見て種とす、よつて穿といへることさらになし（文政九年版「廿三夜待」）

穿ちは穴といふ言葉の緣で出て來たが、穴は有る穴を見出すのではなく、突込んで往く處をいふやうになつて、其處から穿ちが生れたとも云ひたい。勿論穿ちは適切に世間の實際を穿たなければならぬ。それは現代人心の機微に觸れてゐなければならないことは、談義物の穴も酒落本の穴

も同様だ。穴といふ言葉の意義は世間的に動きがあつても、過去の穴や未來の穴ではない。穴といふ言葉の意義は前後不同でも、前後一貫して現在に限定して居る。後の意義の穴から出た穿ちも、それを約束とすることには變りがない。

見物識者多く、作者役者の誤りを見出す人多し、是を俗に穴を探すといふ（傳奇作書）

矛盾、缺陷の他に、錯誤をも穴といふとする。矛盾、缺陷といふ中に錯誤は包容されて居るが、別に別出するものを尤めるにも及ばない。

始終に連續せざるを通言に穴と云有、是は又一種別にて、其穴をのみ見出す者を穴捜しとて、これを是とする人まゝ有る物也、穴多き狂言は淨瑠璃歌舞伎共に當り藝に有、穴なくても面白からぬ狂言は再び出ず（同前）

芝居變痴氣論は此の穴を論じたので、芝居道には變痴氣論の豫防に「穴をふさぐ」といふこともある。

穴とは□□土間棧敷の明きの事（三座明鏡）

此の芝居通言は嵌込むとか、充塡するとかの作用を控へて居る。無論缺陷の意義から副出したものだ。芝居の出方を河童と云ふのは、此の穴へ引張り込むからの綽名である。

惚さそふと思へば、女の好へ持て行が色事の穴（蝶花形名歌嶋臺）

などは、明に嵌め込む作用なしには云はれない。穴といふ言葉の意義は轉來副出に依つて漸く多端になつた。其の詮議よりは差當つて穴が談義物、洒落本の間に橋梁となつて、脈絡ある過渡をなさしめたこと、それを主として云ひたいのである。

穴といふことから洒落本が出て來るわけであります。談義物の中から、いろ〳〵なものになつて行く筋目がこゝにある。それをこれから指摘して見たいと思ひます。詳しく云ふには明和、安永になつて下手談義、雜長持の體裁を似せて出た多數な讀み物に及ばなければなりませんが、先づは寶曆度の原始的な談義物についての檢討だけにいたしておきませう。それでも江戸の總べての作品の母胎であることは知れます。

五九、寶曆の言葉吟味

好阿は又義太夫の文句を褒めまして、大坂は俗語の多い土地柄であるから、その土地相應に義太夫の文句が出來てゐる、ちよつと外の淨瑠璃とは振合が違つて、用語も雅俗相混りて、華實相對して出來上つてゐる、義太夫の面白さはそこに在るのだ、と云つてをります。「下手談義」の文章といふものは前にも引用してありますから、別段に取出して御目にかける必要も無からうと思ひますが、これも引用してあります「田舍莊子」の文章、あれと讀合せて御覽になれば直ぐ埒が明くと思ひます。「田舍莊

子」も雅俗交錯、文語口語打込になつて居りますが、そこのところは、今までの假名草子や浮世草子と比べて、目新しくも見えるし、快活に讀めるところがある。それは「下手談義」と「田舍莊子」とをつき合せただけでも知れることですが、その用ゐられてゐる俗語なるものが殊に活潑で、如何にも輕々として居つて、それが爲に文段の運びも變つて來てゐるやうに思はれます。

そこで江戸の人が言葉吟味をするやうになつた。これは化政度が一番甚しい時でありますが、それより前にもう一度あつたのが卽ち寶曆度だつたのです。どうしてさういふ風に言葉吟味をするかと云ひますと、その時に言葉の恰好が變つて、言葉つきが新しくなつた。その新しい言葉遣ひに興じて取囃す氣持が出たから、言葉吟味をする。その中には自慢の意味も多分に入つて居ります。もう少し委しく申せば、寶永、正德度までは上方語と三河語と、所謂關東べいなるものと交錯したものが江戸で使はれて居つた。寶曆にはそこを離れて――或は渾成したとでも申したらいゝかも知れませんが、とにかく江戸の言葉が出來かけた時なので、「下手談義」の文章の中に取入れたのは、さういふ言葉吟味が盛だつた時なのです。

これは正に江戸はじまつて以來のことで、それ以前の江戸の人の言葉遣ひは褒められてゐない、惡口ばかり云はれてゐたのです。從つて土地での言葉吟味などといふことも無かつたし、文章の中に特に取入れるといふこともありません。江戸も慶長五年に三箇津の一に算へられ、京、江戸、大坂と一

列に云はれるやうになつてから、さつと百五十年たつてゐます。況して寶暦になりましては、日本第一の土地と云つてゐる位で、三箇津のうちで江戸、京、大坂と云ひはしませんでしたが、さう云はれたい心持はありました。言葉の方から申せば、東訛に坂東聲と云はれて居つた土地の音聲、從來一向褒められてゐなかつたやつが、百五十年たつて漸く江戸といふ大都市の言葉が生れかけた。まだ上方の匂ひが全く拔けない、東訛や坂東聲も全く取れては居りませんが、その生れかけた言葉といふものは、東訛とか坂東聲とかいふやうな、關東八州一帶のものではない。江戸といふ大都會の一種の言葉、一種の訛で、それは關八州に通用しない、特殊のものでありました。

それですから天明元年に書いた「不算得失」などを見ますと、「二三十年來このかた田舍まはりに江戸詞の似たり多し」とあります。天明元年から算へて二三十年と云ふと、寶暦、明和あたりですが、その時分に江戸近いところで江戸言葉を使ふ者が出來た、これは都會語の發生の記錄と見ていゝだらうと思ひます。「根無草」の序の中にも、

京の男の髭喰そらして、あのおしやんすことわいな、江戸の女の口紅から、いま〳〵しいはつゝけ野良なんどゝ、

と云つて上方と江戸の言葉が比較してありますし、本文の中にも、

萬嚴として男の詞は世界第一、上方筋の樣に髭喰そらして、はてなんのいな、わしやそふでない

わいの、よさんせ、くさんせの弱氣た詞なく、

と大いに上方語を惡く云つて居ります。ところでそれより以前の噺本「鹿の卷筆」でありますとか、「正直咄」でありますとか、さういふものがいろ〳〵ありますが、それらの中には上方語が澤山入つてゐる。これは大體に於て、上方辯が何とも云はれずに江戸で通用してゐたことを示すものであります。

それだのに寶曆になりますと、急に江戸で言葉吟味をはじめて、上方言葉のにやけたのを嫌ふ。これは言葉の變つて來た證據でありまして、江戸といふ都會の一種の言葉が出來て、關八州一帶の言葉とは違ふやうになつた。それが嬉しくつて自慢がてらにかういふ手前褒めもしたのでせう。それから又七八十年がゝりで化政度までに成熟したのが江戸の言葉なのですが、「下手談義」の中に取入れた江戸の口語は、さういふ時情の下に在る言葉だつたのです。

六〇、言語につれた進展

それですからその文章といふものが、前方の讀物とまるで變つて居つて、同じく口語と文語とを入交ぜにして書いた文章でありましても、それが又目新しく見られ、耳新しく聞かれる段取になるのは無理からぬ次第であります。洒落とか、地口とか、流行言葉とかいふものが、この際に於て大變多く出て來たわけで、それが言語の遊戯とでも云ひますか、さういふものがなか〳〵盛になつて來るのも、

時の勢でありませう。

一體談義物なるものが、當時の談義說法といふ坊主の仕事に大分の係合ひを持つてゐるものでありまして、その說敎坊主が身振聲色を盛にやり、落噺もするといふほどなのですから、談義物もそれを取入れて、談義說法の遣方そつくりを生呑活剝して出來て來たのです。殊にこれから後にかけて大流行致しました落噺なるものは、早已に說敎坊さんがやつてゐるのみならず、民間にも實際に行はれて居つたので、江戸の笑話は石井宗叔や烏亭焉馬を俟つて優勢なものになつたのではない、寶曆には隨分盛になつてゐたものなのです。

さういふわけで談義物は殊に雅俗折衷體といふ恰好で出て來る。文辭にのみよらず、口語を取合せたものになつて出て來たのは、江戸の言葉との關係が深いからなのです。のみならず江戸の文學は、言語辯舌からの恩惠を非常に受けてゐる。卽ち江戸の言語辯舌の變化發達に伴つて進展してゐるので、それを洒落本、黃表紙、讀本、中本、滑稽本、合卷といふ風に、大さつぱな分け方をして眺めるか、地口、語路、笑話、講釋師、人情話といふ風に分けて見るかですが、さう考へて參りますと、狂歌とか、雜俳とかいふものも、その間に自ら出て來る筈であります。こゝに「下手談義」の中から、見立とか、洒落とかいふものを二つ三つ拾ひ出して見ませう。

六十六部とて木綿賣の高荷ほどな事〳〵敷笈を負ひ」

大日様の御側へ生れて瘭疽病のやうに人指ゆびを握つて居らるゝ」

幽靈と夜鷹は夜が明てはつまらぬ商賣」

額に流るゝ冷汗は紅蓮大紅蓮の氷が干鱈さげて禮に來るぞかし」

錢なしに守るは佛樣さへ嫌ひそふで、唯の藥師といふは江戸たつた一體」

それが直ぐに小咄になりさうなのは、前に擧げた「中華へ一里近くなつた」といふ話ばかりぢやない、そんなものはいくらも出て來るのです。

又見立といふ方から申しますと、それに續いて「見立百化鳥」「續百化鳥」「新撰小口合」などといふ作物が出て居りますし、更にその後になりましては、京傳が「紺名小紋帳」などを作つて居ります。こじつける方から云ひますと「閑夜訓蒙圖彙」があり、後には「寶合の記」だの「新造圖彙」だのといふ風に、京傳が手際のいゝところを見せて居りますが、その當時「下手談義」以外にも澤山さういふことが云はれてゐたことは「地獄樂日記」などを見てもわかります。

拵事の名人にて、どのやうな六ケ敷工面、無理な事でもこぢつけるといふよりして、自然と無理の儀右衛門と呼れ、（地獄樂日記）

言語につれてかういふ風に進展して行く工合は、別に好阿の心持でもなし、企望したところでもありませんが、江戸文學の進展は惜にさういふ風になつてゐる。

町人の教化を主とするといふことは、好阿が既に斷つて居ります。町人を主とする以上は、武家には及んでゐない。單朴に致してもそれを重ねてゐるので、主として市街地の話であるだけに地主の心掛や家主の心得方を、いろ〳〵と述べて居ります。それが爲にどうしても裏店住ひの人達のことも云はなければならぬ。そこから後來の中木なるものが、これまで上方文學に無かつた細民文學を作すところの道筋を開いたやうに思はれる。併しこれも亦談義物の作者が企望したところでもなし、計畫したことでもなかつたのであります。

六一、慥め得ぬ兩人の連絡

さて「教訓雜長持」を書きました作者の青柳山人單朴、これは巍々堂々として「下手談義」を援助する、手傳ひをするといふ氣持で書出して居ります。それが又從來の作者でなかつたことは、前にも申しましたが、その年齡はと云ふと、七十三歳で初陣だ。それを靜觀房好阿が「續下手談義」の中で、

饅頭谷（四谷富久町）に庵はあれど、今は住所もしかと定めず、此處かしこ飛あるき、尻のすはらぬ瓢箪和尚、今年は京都に住居して道心者同然のすがた……野僧も最早七十にみつの濱松老朽て、

と書いてゐる、この饅頭谷に庵を構へてゐるといふのは、どうも好阿自身のやうに思はれる。さうす

ると單朴より好阿の方が一ツ若いことになりますが、それで共に與に教化運動に從事したのです。談義物の作者としては、この兩人が大將ですが、その教化運動は何れにも七十を越えた老後の思出であつた。吉宗將軍の奬學政策を宣揚して、世道人心を維持し、明日に備へたいといふことを最後の御奉公としてゐたらしいのです。

それですから、單朴は眞正面から「下手談義」を光らせることを自序にも書いて、

吾住庵の隣在所に臍齋と云老人を設て、前篇に子息を教へ、後篇に手代を諭し、或は江の嶋の神託に淫曲を戒め、退トが講釋に浮說の惑を辨じ、安賣の引札に僭上を諫、農夫商賈の子弟に怠惰を勵し、驕を諷せし教諭の眞實、寓言の中より誠をあらはし、皷舞自在なる筆の働き、

とその梗概を述べて居ります。

又「雜長持」の本文に致しましても、好阿の意圖を擴張する爲に、新にいくつかの指摘を試みて、世間の覺醒を促さうとして居りますが、これは「雜長持」だけの心持ではありません。他の「錢湯新話」「差出口」等二三の著書が、皆同じ心持で書いてある。その大きな提灯をぶら下げる爲に、「下手談義」の梗概を述べてゐるのでありますが、「下手談義」も「雜長持」も共に寶曆二年の刊行なのです。さうして「續下手談義」が三年の刊行になつてゐる。然るに前に擧げました「雜長持」の自序に「後篇に手代を諭し」とあるのがをかしいと思ふ。この時はまだ「續下手談義」は出版されてゐない筈だ

からです。

「續下手談義」の自序には「申秋彼岸日」とあつて、跋文には「酉睦月」と書いてある。して見ると寶暦二年の秋から書きかけて、翌年正月に出來上つたものゝやうに思はれますが、「雜長持」の自序の日附は「寶暦二年秋八月望日」となつてゐる。「續下手談義」のはじめのところには、手代の教諭のことがありますから、まだ出版はされてないけれども、そこだけはもう書いてあつたので、それを見たか聞いたかして、出版に先立つて單朴が梗概の中に書いたものとしか考へられません。さうすればこの兩人は、まだ草稿のうちにそれを内見するほどの間柄であつたかどうか、この人々の連絡といふものは、氣にする人から云へば氣になるが、緒口はありながら、それ以上進んで慥められないのです。

六二、反省を促す天狗會議

「雜長持」の本文の劈頭には、天狗が寄合をして、人を浚ふに就ての條目――今日で云へば法律みたいなものを頒つ、天狗どもにそれを達する會議の模樣が書いてありますが、この箇條は何れも世間の反省すべき事柄を指摘したものであります。

第一に昔は慢心したやつを浚つたものだが、今日はさういふ連中の數が多くて、とても浚ひきれないから、そんな者に構ふな、といふことが書いてある。

第二は坊主達が破戒放逸になつてゐる問題だが、さういふ者は皆一向宗（本願寺）なのだと料簡して、そのまゝに置け、と云つてゐる。

第三は父兄の教誡を用ゐぬ惡少年のことですが、これは時々に鼻をつまみ、貧乏神に取付かせろと云つてあります。

第四は年取つた親達に心配をかけ、妻子に苦勞させる者ども、これは旅好と云つて、方々旅行して遊び暮すやつ、當時の言葉で遊山旅と云つて居りますが、これも亦大いに時世を考へさせる事柄です。それから沖釣と云つて、海上遠く乘出して釣をする。當時は釣が大變はやつてゐたやうですが、その爲に危いことをやる。さういふ者は鼻を捻ぢ拔いて持つて來いと命じました。

第五は仕掛醫者、以前はよほど身分のある者でなければ、駕籠で出歩くことは無かつたのに、此頃は駕籠の醫者が殖えた。この少し前までも、御典醫か、御目見醫でなければ駕籠に乘らなかつたのだが、今日では町醫者まで乘つてゐる。さうして老幼に拘らず、駕籠に突當りさうになつた者を突倒して、通過することを見えにしてゐる。これは引浚つて來い、此方の部下にする、と書いてある。

第六は町人の女房が派手になつて、盛に美服を著る。これはよろしくない事だが、自分の女房の出て行く後姿を見送つて、涎を流してゐる者が多くなつてゐるから、似合ひの夫妻といふもの、打棄つて置けと書いてある。

第七は後家の佛いぢり。佛いぢりは軈て坊主いぢりになり、後先なしに寺に物をくれる。

さういふやうな事を指摘してゐるのですが、それには又相當の解說が加へてある。それから見ると程たつて、明和元年に出版された「當世不問語」が、この天狗會議の各箇條に相當する事を、それとは申してゐませんけれども、委しく述べて註解してゐます。これは單朴に取つて意外な味方を得たわけですが、かういふこともあるのです。

豫期せぬところから味方が出て、單朴を支持するとか、賛成するとかいふことを云はずに應援してくれるやうになる。單朴の遣方は、百里も千里も足許からはじまる、明日明後日は今日只今からはじまる、そこから心づけて行かなければいけない、といふ流儀でありましたから、

未來で佛にならずとも、先此世で下々を惠み、慈悲を第一にしやるが近道、

と云つて敎へる。

日本國中の靈場へ參りあらゆる佛神へ結緣しても、肝心の親に氣苦勞させては、へちまの皮ほども功德はおりない、

と云つて一ツ蹴飛ばし、いゝ景色を眺めるよりも、親の機嫌のいゝ顏を眺める方がいゝぢやないか、といふ風に、手許、足許から行かうとする。それには修身といふことを考へなければならず、修身といふことは獨りを愼むといふことからはじまる、といふ風に說いて行くのです。

六三、布袋夢枕の言葉

「雜長持」の中に、供待をしてゐる武家の奉公人が、自分の主人の悪口を云つてゐることを書いて、

ハテ奴でも、公家衆でも仁義の道に二ツはをりない、お手前達も主の馬鹿を苦にせず共、面々心を磨ひて人の人に成るやうにしめされ、草履取がいやしいものでもない、此方の仲間から冠著た人も、むかしは出たげな、尊ひも卑ひも只心次第で、善人悪人と末世迄名が殘る、

と云つてゐるところがあります。草履取の中から冠を著た人が出たといふのは、秀吉のことでせうが、さういふものもどうだと云へば、皆心次第で立身出世が出來る。こゝのところは人が用事をするか、給金が用事をするか、といふことになるので、忠臣藏の平右衛門が云つたやうに、千五百石の御家老も、五兩二人扶持の私も忠義といふ心持は同じだといふ、あれと同じわけです。

報酬相當の働きといふことになれば、誰も彼も無い、賢も不肖も無い。報酬は報酬だが、人間がするのだといふことになると、その人だけといふことになつて來る。それを側から眺めれば、その人の材力もわかるし、人柄もわかる。立身出世する機會も出て來る。その人から云へば、己を盡すだけのことですけれども、己を盡すといふことならば、賃銀とか、報酬とかいふことに關係は無い。人だか報酬だか分らないやうでは恥しい、如何なる場合にも人は人でなければならぬ、境遇であつてもなら

ぬ、人は其人であるべき筈だが、人の人になるのは教養が最も大切で、それには獨りを慎むのが肝要なことである、といふところへ説き及して來るのです。

そこで吉宗將軍の奬學政策を顯揚して、それを根本として世道人心を維持する。それには教養が大切である。惡い心がけを起させるやうな教養ではいけない、といふことになつてゐるのですから、子供の教育などに就ては、隨分やかましく氣をつける。手習師匠の夢枕に立つた布袋樣の言葉として、毘沙門樣が武家出の寺子屋の師匠を褒めたことが書いてあります。

甲州出の侍程ありて甘利用内は誠の侍形氣、しかも仕官の望もやめて市井の交り、此方共が和光同塵と同じく、昔の武士の角を取て、めつたにしやちこばらず、町人と肌を合ふやうにして折々そふでないぞ、斯じやないぞと、武家の例を引て諫め、子供の教方も至極よし、先入の事、主となるで、幼稚の時聞込た事が一生出る物じやから、子共には兎角よい事がきかせたし、此用内は隨分其處に氣を付る、あれには福を授けてやらさなるまい。

こゝらのところが單朴の本領でもあり、談義物の主意でもあるのです。かういふ主意でありますから、讀ませるもの、習はせるものに就て、教化運動をする人達が註文をつけることは、まことに凄じいものがあるのであります。

其方が教方がよさに、弟子共が格別水際が立てよいぞ、善途は入り難く、邪徑には入りやすし、

わるい方へはこけやすい物じや、隨分油斷なく教へざれば、必ず鉦になるぞ、そちが舌の爛れるほど教ゆとも、日々の事で氣力も續くまじ、先相應に假字書の草紙が讀れば、鼠の娵入、金平本からそろ〳〵仕込、漸々に平假名の本をあてがふべし、但し金平本も近年のは油斷がならぬ、金平にさへ濡事がある、よふ吟味してあてがへ、おしへず共濡事仕には成やすいに、小兒の見るものに生したゝるい事あるは、さん〳〵の事、昔の金平本はいさみのあるよい物で、武士の子共には猶更勇氣を付るよい物じやぞ、夫から段々仕上げて、六諭衍義の大意、同小意とて中村氏（三近）が作、甚よいものじや、すゝめてよませよ、貝原（益軒）の書は下手談義にさへすゝめてある、必つねにおこたらずよませよ、其外町人袋（西川求林齋）百姓袋（同上）冥加訓の類、分量記の前後二篇（常盤潭北）此類の草帋皆平假名で讀やすく、其理さとりやすく、いづれもよい書じや、あづけて讀せよ、女子には女大學（貝原益軒）大和小學（辻原元甫）女子訓の類、どれもよろしひ物じや、教へて讀しむべし、亦少し年かさな娘共には列女傳、女四書（辻原元甫）がよし、又壺の不碑といふ本と、比賣鑑（中村惕齋）は殊によろしひ物じや、かならず娘子に讀せ置べし、又小夜衣とて、ずんど耳近ひ貞女の噂を書た物がある、今はあるかしらぬが、よい草紙であつた、常盤木と云て、武藏の入間川の邊の松といふ貞女の身の上、あはれに殊勝千萬な草紙があるぞ買て見よ、忘れても浮氣な埒もない本を見せるな、大毒じや、心得よ、惣じて書物も至極

どうもいはれぬ物の人のしらで埋木と成てあるが多し。

この中に擧げてある書名は、寡聞でもあり淺見でもある私どもの知らぬ方が多い位で、知れてゐるのは甚だ少いのですが、知れたところだけ書添へて置きました。

金平淨瑠璃に油斷がならぬといふことは、實に恐るべき眼光であります。一體金平淨瑠璃なるものは强がつた淨瑠璃で、武勇を謳歌するところのものです。元來は頼光の四天王の荒武者が働く趣向であつたものが、だん〳〵變つて來て、寛文度にはその家族が出て來るやうになり、大分弱げになつて來た。元祿にはそれが愈ゝ怪しくなり、正德六年に出た「勇金平」などには、年取つた尼の媒合容止などさへ書いてある。成程、金平淨瑠璃に油斷はならぬ、濡事があるのです。

「常盤木」といふ本は見たことがありませんが、「貞女小夜衣」は磯貝舟也の書いたもので、元祿二年、新兩替町四丁目松鈴堂の板です。江戸で出した浮世草子の類は數が少いのですけれども、この「小夜衣」は江戸で作つて江戸で板にしてゐる。內容は若い女の節操の事を書いたもので、如何にも若い女の身嗜みにはよい參考書だつたらうと思ひます。

好阿もその身の行迹といふことは、やかましく書いて居りますが、單朴はそこへ力を入れて、讀物に就ても行迹の上にさし響いて來るものを選んでゐるやうであります。

六四、危い「教訓不辨舌」

ところが「教訓不辨舌」（寶暦四年、江戸板）になりますと、同じやうなところを蹈へてゐるやうですが、これは又困つたものなのです。

達摩大師の臍痛めて直指人心見性成佛の悟りより、親鸞上人の光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨は阿彌陀の大願、天地の間、十方世界の内なり、肉食妻帶も厭はず、是にても御助の御恩得との勸、なまじひに五戒といふて表向を立、内證にて破らんより甚感有、今老夫婆々の翫びに是程の宗旨ありなんやとある書に記置ける、實に宜なるかな。

禪宗がたゞ坐つてゐるよりも、親鸞の方がいゝといふのですが、それについて飛んでもないことが云つてあります。本願寺宗は爺さん婆さんのいゝ慰みであるといふに至つては、無智から來るといふより外に仕方が無い。大分行き過ぎて居ります。佛教なんていふものを夢にも見てゐない、迂濶者に相違ありません。好阿と單朴では儒佛に對する態度の差はありますけれども、さすがにこの方の頭領ですから、こんなことは云はない。「不辨舌」の作者などは「下手談義」の景氣に惚れて、單にあれはいゝ事だといふ意味合から、ふら〳〵と出て來たものぢやないかと思ひます。贊成するのはいゝが、あつぱれ自分も指導者になり濟すと、そこに大間違ひを生ずる。指導者は得難いもので、變に指導者

がるやつが出て來る爲に、危い事柄は世間に隨分ある。指導者は必要だけれども、近頃よく云ふ便乘主義の指導者は危い。世間には「不辨舌」のやうなものがいくらもありまして、大體は「下手談義」の引いた筋によつてゐるやうですが、方角が如何にも危いので、間違ひはそこから起るのです。

六五、こじつけも洒落も

「不辨舌」の中には又、戒行の立派な老僧が若い時の事を懺悔するところがある。これは「過つて改むるに憚るなかれ」といふ、よく改めて再び過ちをせぬやうにするのでなければ宜しくない、悛の無いのはいけない、たゞ改めるといふのだと、振替へるといふだけのことになつてしまふ虞れがある。懺悔は罪を滅するといふことだけ見つけて書かうとするから、物騒なことになるのです。前にして來たことを懺悔するには、これからもうしないといふ心持が無ければならぬ。よくない事をしては懺悔し、又惡い事をしては懺悔するといふのでは、いつまで行つても涯の無い話で、折角の懺悔も尊いことでも何でもない。畢竟「悔」の字に氣をつけなければならず、「悛」の字に氣をつけなければならぬのです。ですから「不辨舌」のやうなものになると、如何にも好阿や單朴の味方のやうだけれども、著者の染子なんていふやつは煙とろなもので、油斷のならぬ代物である。かういふ者までが、時候の加減で菌や筍と同じやうに、によこ〳〵出て來るところを見ますと、好阿や單朴の著作が如何にその

時機を得てゐたかといふことが、よくわかるやうに思はれます。

それからもう一ツ、とじつけがありますが、これが發展して參りまして、江戸文學のうちの一種類が出來て來るわけなのです。

此中談義場の坊さん、お身も知つていやろう、空山さんよ、あの人が侍や百姓や大工屋根や、そふしておらがやうな（看賣どん七）商人をおつくるめて、死のふどふしやう（士農工商）とやらいふといわざれた、その死のふとは侍と百姓の事、どふしやうとはお身さん（大工のみ藏）やおいらが事たといわれた、どふとは大工、しやうとはおいらが事か、おいらよりはお身さんが上は手じや、その筈よ、なんぼいつてもお身さん達は手の先キ商賣、おゐらは肩へ棒を置ねばならぬ、それだけおいらが下タじや、よくいわれを聞ケば、さりとは理屈といふものはよくした物だ、侍なぞはマアちつとむつかしい事でも有ると、仕廻にはは死ぬ事ばかり思ふてゐるによつて、そこで死とつけ、のうとは百姓はそふたいのうがないによつてのうと云、お身さんやおいらがやうな物は錢もうけがないと、どふしやうといふて居るによつて、そこでつけた物じやげな。

この變なをかしみは「不辨舌」中にあるばかりでなく、見當の正しい「雜長持」の開卷第一にも、海鹿（ひじか）の九藏といふ者を出して、

中風の下拵にや兩足がふら〳〵として、からくり人形の歩行（あるく）やうなれば、狗背（ぐんまい）に似た物じやとて

海鹿とは異名を付ける。

と書いてある。狗背に似てゐるから海鹿だといふ、これは大分洒落れて居ります。

六六、味方でない「教訓反古溜」

「雜長持」には又この九藏の友達である土器坂の喜作といふ親仁と、濱松を御通りになる御公家さんとの問答が書いてあります。御公家さんが御乘物の中から土地の故老を呼んで、

此あたりに引佐細江といふ名所あるべし、何處のほどぞ案内せよ、

と御尋ねになると、喜作といふ親仁が次のやうに御答へする。

イヤ爰許に引佐名字を名乘ります者は一人もござりませぬ、まして細右衞門と申目醫者は曾て覺えが御座りませぬ、若し目醫者が御用に御坐りませば、隣村に清庵と申が、アヽいかね上手で御座ります。

御側の者が聞きかねて、

だまれ〳〵、目醫の御尋ではない、舊跡の御尋じや、

と云ひますと、親仁は又、

休夕と申は碁打でござりましたが、網打に出て大きな石へ打かけ、はねても切てもとればこそ、

征に懸てせんがたなく、とび込れました、岩の端さまで腰を打て、今はいさり同前、何の役にも立ませぬ。

と、とんちんかんな返事をする。

イヤそれは聞はせぬ、これややい、引佐細江とは、あなた方の御哥に遊ばさるゝ所じやによつての御尋、惣じて哥にも詩にも詠ずる所を名所とも舊跡といふはヤイ、あほうな奴じや。

と叱られて、名主が御詫言に出ることになつて居ります。これは地口から出ただけでなしに、江戸の茶番で云ふムダ、上方俄のアブラといふやつで、笑話の大分發達した形になつてゐる。そのムダが滑稽本に影響してゐるので、談義物を滑稽物の中に入れてあるのもその爲なのですが、畢竟かういふところが多いから、さういふ取扱ひを受けるやうになるのだと思ひます。

それから味方らしい顏をして現れたもので、甚だ面白くないと思ふのは、「教訓反古溜」（寶曆十一年）です。これは京板でありまして、著者は好阿の友人で、その反故を貰つて來て綴り合せたといふことが、自序の中に書いてありますが、「下手談義」や「雜長持」とは文章も違へば體裁も違ふ。全部が文章體で書いてあるのみならず、形も違つて一々論文になつてゐる。茶の湯論から眞淵論まであつて、時弊を算へ立てるところだけは似て居りますが、その擧げてゐるところを見ますと、町人教化には緣の遠いもので、吉宗の奬學政策にも係合ひがありません。かういふのを味方だと思つてかゝると見當

違ひになる。又教訓といふことから云つても、これは全部が議論でありまして、難詰するとか、駁擊するとかいふ意味にはなるかも知れませんが、教へ諭すといふ氣分のものではない。前に「不辨舌」のことを申しましたから、その仲間があるといふ意味で、ちよつと「反古溜」のことも申して置きます。

六七、古風と當世風

追駈けて出て來たものにはいろ〳〵あつて、味方かと思へば敵、敵かと思へば味方といふやうなものが少くない。これは談義物が人氣のあつた證據でもあるが、又そんな氣持の人間が多くなつたやうにも思はれます。

「下手談義聽聞集」などは、本の名前から見ても、後先構はずに隨喜渴仰して出て來たやうに思はれますが、讀んで見ると時世時節といふことのあるもので、今日は當世風であるといふことを、頭から云つて來る。料理の事に致しましても、時節柄から云つて、どく丁寧にした料理よりも、簡略にした料理の方がよろこばれる。

今の料理向を見れば、むかしとはかはりて、二汁七菜を出すべき席をも、勘略かはしらぬが、粹料理とて茶事めいた事を出せば、客も馳走とおもふ時節。

といふので、又御膳につけて出すからには、御客樣の召上りいゝ物を撰んで出すのが、饗應の當り前

であるのに、此頃は燒物と云へば持つて歸る例を拵へてしまつた。はじめから食ひもせず、その席で食はせる趣向を立てず、寧ろ食はせぬやうに仕向ける。當坐に食へる果物や生肴は勿論、傘から鰹節まで、皆燒物といふわけで出す。饗應の中に食ふことの出來ぬものを出されて、御客の方で怪しからんと思ふ者は一人も無い。食はれぬものを出すことも、それが當世風なので見れば、誰も不審に思ふ者は無い。けれどもどういふ式法の本にも、諸禮の事を書いたものを見ても、食はれぬ物を膳につけたり、何でも彼でも燒物と云へば土產にして持つて歸るなんていふことは無い。當世風といふことは實に恐しいもので、昔からあつたことをそのまゝで通さうとしても、通らないことが隨分あります。それに對して一々理窟を云つて見たところで受付け無いのだから、何とも手のつけられぬものが卽ち當世風であるといふ。

此中もさる歷々の息子が、下手談義でも讀れたか知らぬが、土佐ぶしを精出して稽古し、吉原へ行て何か語り出したれば、女郎がいふには、おまへは乞食の眞似をせずとも、ほんの淨るりを聞せなさんせと一口にいひつぶす、土佐節も乞食ばかり語るものとなりしも、むかしと今とうき世ちがひ、せう事がない事で御座る。

土佐節の稽古をして吉原へ行つて、得意になつて語つたら、遊女に乞食の眞似をしないで、本當の淨瑠璃を語つて聞かせてくれろと云はれた、といふのですが、これが時世時節といふのであつて、土

佐節は乞食が語るときまつたものではない。本來から云へば謠曲もどきの上品ぶつた淨瑠璃なのだけれども、此頃では棄たれて物貰ひの藝になつてしまひました。其現狀から見て誰も旦那藝と思はないのです。それに理窟を云つても仕樣が無い。話は御膳の上ばかりではありません。そこで古風も當世風も、著しい害が無い限り、時世時節だとして人心の嚮ふまゝにして置いても差支へ無い。又身過ぎ世過ぎ、渡世向きといふことから考へても、昔より暮しにくい時節なのだから、その邊から見て、あまり咎め立をしない方がいゝんぢやないか、といふのです。

それから切落(きりおとし)の客と棧敷の客とでは、一ツ芝居でも見物の種類が違ふ。

切落の見物の氣に入ると、又棧敷へおもしろみのつく事と、兩方あひ合ふた狂言が大當りとなる。とあつて、兩方よろこばせるやうでなければいけないが、實際はなかなかむづかしい。これは人品といふ方に屬するものだからです。談義物の中には頻りに中から上、中から下といふことを云つてゐますが、この意味から申しますと、好阿は「下手談義」の中でも斷つてゐるやうに、自分は町人の教化の方ばかりやつてゐるので、御武家樣のことはかれこれ云はない、又知つてもゐない、と云つてゐる。「下手談義聽聞集」にしても、中から上、中から下といふ時は、やはり下の方に寄せて云ふので、總べて談義物は中から下へ向つて何も彼も書かれてゐるのです。

それですから芝居の入のあることに致しましても、

見物の氣に入る事は當時の氣にあふと合ぬとのさかひを了簡しられたがよい。

と云つてゐます。當世風に引付けて行くことが大事である、といふことを說かうとしてゐるのです。「聽聞集」はさういふことを云つて居つて、底意は別にあるのですが「下手談義」や「雜長持」の云ふことを、頭から一々御尤も千萬にしてはかゝらない。けれども一般から申せば「聽聞集」の心配したのとは違つて、「下手談義」や「雜長持」は歡迎されて居つたのです。その云ふところは古風であつて、當世風でないけれども、それがかういふ時代に受取られて居つた。そこのところは書かずに、時世に背いたやうであつても、當世の人が受取つてくれるやうなら「下手談義」や「雜長持」も惡いものではない、といふ風に導かうとする。ちよつと手數のかゝつた段取になつて居ります。

六八、廻つて持つ大提灯

こゝに「聽聞集」の中から、卷五の目錄だけを出して置きますが、それはかういふものなのです。

八王子臍翁葬送幷蓬萊屋富貴右衞門江の嶋辯天より寶を授りし事

親孝行の段

兄弟旅支度の段

讀本手柄の事

福神相談の事

蓬萊屋繁昌の事

その中でも町人の葬儀の弊風を破つて、一般が華美なことをやつてゐる時に當り、親の遺言を守つて質素な葬ひをした、それに就て人から悪く云はれた事を書いてゐる。それが當世風に背いて、道理はあつても餘り古風過ぎてゐる、といふことを書いたのですが、その方が道理があるといふことを隱して、當世風のことを專ら云つて居ります。こゝは考へて御覽下さいといふ心持があるらしい。

村の者ども大聲に、さてもけちな弔ひ、いかに親父が吝ひとて、江戸者らしくもない、あんまりな奴じや、

と悪口を云ふやつがある。さうかと思ふと一方では、

江戸衆の中から、されば此葬送は下手談義といふ讀本にある通り、それを守つて眞實の弔ひじや、こふ云ふ事になれば假名本もうが〳〵と見ぬがよし、がうがぐになる事とほむるもあれば、イヤあまり作り過て結句目にたつとそしるものもあり、とかく此通りこゝろ懸るが能からん、物の入らぬが第一と、思ひ〳〵の評判して歸る、

といふ風に、世評とり〴〵であつたことを書いてゐるのです。

又蓬萊屋富貴右衛門が辨天様から寶物を授つた。どんなものを授つたかと云ひますと、十露盤と草

難なのです。草鞋はこれを穿いてよく稼げといふこと、十露盤は間違ひの無いやうに勘定しろといふ教訓なので、その通りにしたら、あまり豐でもなかつた者が大商人になれた、といふことを書いてある。この遣方も當世風ぢやない、古風な遣方なのですが、時世を斟酌しろと云ひながら、自分では古風なことを申しました。前には時世の斟酌のことを云ひ、當世風でないと悪口を云はれる、と書いてゐるに拘らず、大いに古風なことになつてをります。それが「下手談義」や「雜長持」の提灯を持つことになるわけですが、明かに大提灯をぶら下げるやうなことはしない。廻り廻つて褒めるといふ、手數のかゝることをやつて居ります。

又「讀本手柄の事」といふのがありまして、これは談義物の效能を述べたやうなことが書いてある。さうして、

果報は寢ては待たれぬと、はじめて商の悟をひらき、分限になる者多かりし、

と結んであるのです。大いに突込んだ云方をしてゐるやうで、結局は「下手談義」や「雜長持」に隨順してをります。褒めるのにどうしてこんなに手數をかけたものか、ちよつと見ると反抗でもしさうに持掛けるのは何の爲か、といふことは大いに考へなければならぬところであります。要するに教化運動に從事した人達は時世の人心に斟酌して、なるべく效果を擧げたい爲に、餘計に苦勞して居つたといふことは、この邊からも察せられるやうに思ひます。

六九、讀本に繫る筋目

こゝでちよつと申添へて置きたいのは、「讀本」といふ言葉です。一般には「物の本」と申して居りましたが、「下手談義」や「雜長持」の奥付を見ますと、皆「讀本」と書いて「ヨミホン」と假名がつけてある。一體江戸の「物の本」なるものは、繪本卽ち繪を旨とした、見る方のものと、讀本卽ち文を主とした、讀む方のものと、二分けになつて居ります。さういふ方から申せば、說明も何も必要はない、談義物は讀本にきまつてゐる。繪で見せるものではないからです。

後來讀本と申しますと、一定の形式を持つて居りまして、半紙本で四五冊つゞき、一冊のうちに挿畫が二箇所か三箇所ある、紙數は二十枚內外のものです。その讀本なるものは、安永二年に建部凌岱の書きました「本朝水滸傳」からだといふ說もあり、寬延二年に出た近路行者の「英草紙」からだといふ說もあるやうですが、何れにしてもさういふ恰好のものであります。

それらのものは例の八文字屋本の後に興つたものですから、或は浮世草子と寬政年間に流行した讀本との間を過渡するものとして、過渡期の讀本と稱せられて居ります。この過渡期のものでは何が早いかと云ひますと、增穗殘口の八部書がはじまりだらうといふことになつてゐる。成程體裁と云ひ、挿畫と云ひ、過渡期のものとして見れば、談義物はそれに當嵌るやうに思はれます。その形式が傳は

つて、寛延、安永等の讀本の形にまでなつて行つた。申すまでもなく過渡期の讀本と致しましても、「下手談義」は江戸ではじめてのもので、さうでないものは皆上方版でありました。

それから「下手談義」の奥付を見ますと、

當世下手談義　京都靜觀房作よみ本　五冊
實は教訓の書也

同續下手だんぎ　前論ニなぞらへ教訓のよみ本に仕候　五冊

と書いてあります。此等によつて見ましても、浮世草紙と讀本との移り變りの時のものといふこともわかれば、それが教訓物であつたといふこともわかります。教へるとか、諭すとかいふことは、儒書とか、佛書とかいふやうに、儼然と一方に構へたものがあつて、教訓教化といふやうなことは、みな其方に御願ひしてゐたのに、それを引取つて風流本と云はれてをりました八文字屋物に振替はつた讀本の役目にしたのです。この「實は」といふ言葉が變革した內容をよく說明してゐるやうに思はれます。「實は」の二字がある爲に、四角張つて眞正面からでなく、教訓と申してもヤンワリとやさしく出掛けようとする談義物の心持を、よくわからせてゐると思ふのです。

さうしてやはり形式の方から眺めて參りますと、寛政、天保の間になか〳〵盛であつた讀本の體裁は、やはり過渡期の讀本から發達、成熟して參つたことがよく見えます。ですからその方で勸善懲惡

が大きな看板になり、そこで行くものだといふ樣子が見えるといふことも、筋目から申せば免れがたい事柄のやうに思はれるのであります。

七〇、反對と見せた「返答下手談義」

それから又今度は「返答下手談義」、これは名前の上から見ても、褒めた方でなしに、駁擊でもするものゝやうに思へる。盛に反對論でも持出したかと思はれるのですが、この中に豐後節のことが書いてある。この時分は豐後節が大流行だつたので、豐後節の數寄者と申せば世間一般が好んでゐたのですから、世間一般といふ意味に聞えぬでもない。その豐後節を「下手談義」は惡く云つた。それに腹を立てた豐後員員が反對論を持出したのだ、といふやうに「辻談義」に書いてありますが、それだけのことで「返答下手談義」が出來てゐるのではありません。「返答下手談義」の本文の上から見ると、そこは却て手輕に二行ほどの言葉で片付けてゐるのです。

豐後の淫風をなげくは、ころびて中風になつたとおぼゆるたぐひなり、うちに中風の病おこりてころびたるなり。

これは何も豐後節に限つたものではない、どの淨瑠璃にしたところで、淨瑠璃には色事の話が幾分かある。あるのが自然の姿なのだから、それに向つて毛嫌ひをするといふのは、御苦勞樣な話ぢやな

いかと云つても居ります。

無字（宮古路豐後掾の前名、文字太夫）が淫風に落いらば、道路に相對死のもの多く、恥を指頭にのこし、あるいは女の別夫に通じ、深窓にやしなわるゝ娘子にいたづらをすゝめ、欠落（かけおち）のたねを蒔はじめとの言葉はさる事なり、しかしいづれの一ふしにもせよ淫風ならざるはなく、無字が一流は當世のありさまにて、淫風はなはだしき也、簾ごしにものをみると、あらわにて其儘みるとのちがひ、なにぶしにても、其時代の風俗にて、淫風の毒風なきはなし。

さうして豐後節と土佐節とに就て、

佛あれば衆生あり、豐後あれば土佐もあり、柳はみどり花はくれない、なにもかも造化自然の一物、よきものとてもてはやし、あしゝとてそいで捨るは、皆われに倒される倒れものと申すものにてあるべきにや、ものいわずわらわず、ものまふといふ案内もなければ、どうれいと申あいさつもなく、たゞ雪月花のかわる〳〵にほとゝぎすのおりしりがほなるも、どこからどこまでといふ事も限もない世界に居て、火打箱で燒餅やかせらるゝは、いかゞ御苦勞なこと、

といふ意見を述べて居ります。太宰春臺の如きは、昔は禮樂刑政、天子より出づと云つたが、今は禮樂刑政、芝居から出る世の中だ、とまで云つて居る位ですから、「下手談義」が第一に芝居に對して註文をつけたのも、別にをかしい話ではないと思ひますが、時世論の方からいふと、又さうでないやう

に云つてゐる。

芝居をことのほかに能所じやと思食より、ひよんなお世話が出ます、色里、芝居はもとたわいもない遊所なり、

と輕く扱ひ、さういふワツケも無いものに、いろ〳〵註文をつけたところで仕方があるまい、と云つて、

江戸の芝居をば學問の稽古場に仕るか、

といふ設問までしてゐるのです。芝居の影響といふものは、見る人の物數寄によつたことで、一般の事ではあるまい、こゝは中人以上、中人以下といふことに拘らぬと云ひ、

芝居の風をあらため、人の手ほんとするおもひつきは、ほんの年寄のくどき泣といふものなるべし、芝居の風ぞく、平人へうつるやうなれども、武家、町ともに中人以上へうつること、すこしことをこのむ人のため、いはゞ上下によるべからず。

そんな理窟ばかり云つて、人の爲になるやうなことばかり仕組むとしたら、第一見物が無くなつてしまふ、其人たちの飯の種にしてゐることを、少しも構はぬことがあるだらうか、といふ疑ひを出してゐる。

狂言綺語に事よせて、人を善道に勸め給ふとは御殊勝に存ますれ共、世渡りといふ所に御心が附

ませぬか。

芝居も人の世渡りとしてやつてゐるのだ、そこを考へてやらなければならぬ、と云つてをります。

七一、尤もな「なづみ」の指摘

又神佛の開帳に就ていろ〳〵な議論をしてゐるが、あれだつて世渡りの爲にしてゐるので、「渡世の場なればゆるす事も有」と云ひ、大目に見なければなるまいと云つて居ります。

惣じて是も渡世といふ所に、おこゝろをつけられたるがよし、風俗のわるくなりしは、どうも時節といふものなるべし。

神佛を持出してまでも金儲けをすると云つても、それだけ世渡りの苦しい今日なのだから、結局時世がよくないといふ事になる。いろ〳〵な議論もそこから出るのに、それを差措いて理窟づめにするのは無理ぢやないか、といふので、「下手談義」の中の八王子の臍翁、卜者道千などといふ者の說得に對しても、なか〳〵簡單に承認しない。のみならずどうも小言を云ふ方の人が、自分だけの料簡で、口だけで用を足さうとしてゐるが、これは教訓者といふものゝ大體の弊風で、實踐躬行といふこと無しに、たゞ理窟立で押通さうとする。だから教訓がちつとも人を感孚させず、聞いてゐる者に對して透徹することが無い、と云つてゐるのは、大いに尤もな話であります。

御手前の御智惠自慢の樣におもはるゝ、孫吳の詭道は常變治亂のわかち、其變に應ずる事にして、わけあるやうにうけ玉りました、猥りに日用にこれを行へば、人を善道に入るゝの德はあるに似たれども、薰育涵陶する所、皆信實を仰いで古狐の人をばかす類なるべし、手まへは利口で、人は馬鹿とばかりおもわば、其害の甚しきことあり、あげかぞふべからず、底心の惡ひ所が御文章に見へます、惣じて手前の智惠でばかり行ものとおぼしめすは、すこし意味違か。

それから聞く方の人に就ても、たゞ我を張つて行きさへすればいゝ、自分にわかりさへすればいゝ、といふ氣持合でやつて行くのはどういふものか、と云つて居ります。

儒佛神の三敎のわけもなく、只意地をさへはり、俗說と愚痴とを口癖にあへまぜにして、なにもかもこれにておしつけてのみ、惣じて我をはりさへすれば、何どきも學問者の仲間入と心得、かへつて異端の大なるあやまちをしらずなり行は笑止千萬。

又話し上手、聞き下手のことを云つて、それには「なづみ」といふことの恐るべき所以を述べて居ります。

かたり上手の聞下手、似たやうな事で、つがもない、天地黑白の相違多し、わが器量の分限をしりて、愼に厚からんこそ道の一端なるべきにや、左はいへど學問はせぬがよい、講釋は聞ぬがよいといふにはあらず、たとへをとればたとへになづみ、又日本にうまれて我國をきらひ、格物窮

理も唐でなければならぬことゝおもひ、唐といふ字に大きなづみがついて、格物窮理の本をとりうしなひ、或は我國も天竺の出店と心得、とんでもない横丁へ這入て、跡へも先へも行かず、果は理屈のあぶれものと成て、我人のもてあましものとはなりぬ、唐好になると、もはや所替へから仕度なるは眼前なり、其時所に應じて用をなすも直ぐに格物窮理ならん。

支那の學問をすれば、支那ほどいゝところは無いといふので、直に唐好になる。佛書などを讀むと、その理窟に惚込んでしまつて、日本も天竺の出店のやうに思ふ弊風がある。畢竟知識に泥んでしまふので、この「なづみ」がいけない。「なづみ」といふことから、局學偏識といふことになつてしまふのだ。それは「下手談義」でも嫌つてゐながら、どうも理窟の方に傾きはしないか。芝居になづみ、淨瑠璃になづむといふ風に、なづみなづんで行くことは、己に迷つて物を追ふといふ言葉もある。このなづむといふことを、これだけ云つてあるのを見ますと、私どもは昔話のやうには聞かれません。私どもが世間の有樣を眺めましても、この「なづみ」といふことの爲に、日本人だか、外國人だかわからないやうになり行くのは、どうも恥しい話ではないかと思ひます。

くどふなく手短なるは異國の風じや、理のはやくあきらかなるは唐よりほかには御座らぬ、夫ゆへ幹共にも、ちと學問いたせとつねゝ申。

一番理窟のよくわかるのは唐の事だと云ひ、だから學問をしなければならぬと云つて、理窟立、智

慧立の學問を背負込ませる。さういふものを背負込むから、人を感孚させることも出來ず、透徹することも出來ない、上ッ面の話になつてしまふのであります。

七二、やはり一ッ穴の貉

談義物は中人以上、中人以下といふことに就て、以下の方に骨折る筈なのですが、この「返答下手談義」は「なづみ」の無いのを中人以上とし、「なづみ」のあるのを中人以下とする。談義物の方になると、「性相近し、習相遠し」といふところを押へて、その性の遠くないといふところと、習の近くないところから「中」といふことをきめて、そこを本にして教訓しようとする。「上智と下愚は移らず」と先哲も云つて居られるわけで、中人といふことになると、上へも下へも引張りやうで行ける人、といふことになる。中人といふものには善惡もあり、賢愚の差もあるが、それも大きくないものなら歩み寄らせることが出來る。即ち移すことの出來る者を中人とする。こゝで中人といふことを持出して、中人だからなづみが出來る、そのなづみといふことから教訓といふことにもなつて來る。大變なづみの議論をしてゐるやうですが、よく論じて行けば行くほど、「下手談義」や「雜長持」と同じことになつてしまふのです。

かういふ風に見て參りますと、一體この「返答下手談義」なるものは、駁擊したのか、反對したの

か、擁立したのか、保護したのか、わからぬことになつて來ます。大坂の淨瑠璃といふうちにも、近松歿後の作風で、恐らくは出雲や宗助あたりの影響を受けたものと思はれる「手代氣質」とか「世帶氣質」いふものゝ中には、裏と表とある人物が大變に出て來る。惡と見せて實は善なので、それが芝居の方で申すと、腹のある藝といふことになるのです。惡と見せても善といふならば、大變策略のある善人といふことになるのですが、「返答下手談義」といふものは、やはり反抗するやうに見せて、原作の「下手談義」や「雜長持」を引立てゝ行くやうになり行くところを見ますと、違つたやうで實は一ツ穴の貉のやうに思はれます。

八王子へ隱居した隲翁が、江戸を離れて大勢の子供に餘計な心配をさせる。しづかに暮すつもりで老夫婦だけで住つてゐると、老妻に餘計働かせるやうになる。やはり江戸にゐた方が、子供達も親に仕へることが出來るし、皆が苦勞しないでいゝぢやないかといふことを提議してゐる。自分の家族に安心させなくてもいゝといふやうな、理窟もあるまい、それは不理窟、我儘と云はれても申譯に困らう。自分の勝手な暮しをしたいといふことから、年取つた者が遠く家族と引離れてゐるのは若い者等に餘計な苦勞をさせるといふものです。

我身の老たるも死にちかきことも忘れ、子どもの安心せぬこと、他人の察(さつし)をもかへりみずして、山林に籠て風景を樂とは、人倫をみだるのもとひか、人の見聞せざる所の樂を求むる事は、彼小

人間居爲二不善一のたぐひなるべし、申さばおやぢ様からの御慎が第一でありそふものか、おかきものにばかり御異見の御手段にて、老年の人は手前勝手にいたすが能のか、今日わかき人、老にいたらんこと速なり、老若ともに身を全ふして道にすゝむやうな、ありがたい御談義はどふもできませぬか、とてものお世話に今少し能い所の、御說法願ます、あられもない狂言のお世話よりは、肝要な所の安心はどういたすがようござらう。

この中にも書いてありますが、親孝行を便利にさせる、同じ事なら骨折を尠く、若い者等が孝行者になれるやうに仕向けてやらなければ、道に至るといふものでない。こゝに「道に至る」といふ言葉が使つてあります。お互に都合よく、苦しまずに人道を全うする、それには安心して掛るのが第一、それ故に安心させるのが大事だといふこと、道に至るといふこと、これは吉宗將軍の奬學政策の中で、稍〻不足を感ずる事柄だつたのです。そこが吉宗將軍の奬學政策の一番力の弱いところなのですが、「下手談義」や「雜長持」は、そこを云つて見たところで、右左何ともなることでない、それよりも享保の奬學政策を眞直に押立てゝ行つて、教化運動の效果を擧げることが出來れば、そのところは論じないでも補塡することが出來る、と信じてゐたやうであります。

七三、活を入れられた三教論

談義物の作者は口を揃へて、神儒佛の三教のことを云つて居ります。その癖吉宗將軍は、神道に御無沙汰なされたのでもなければ、佛教を排斥されたのでもないのですが、談義物の作者が三教といふことに就ていろ〳〵云つてゐるのは、そこに物足らぬところを感じて、補ふ意味があつたやうに思はれます。

勸善懲惡にしたところが、常識だけで濟して行つて、理窟をつばめて押付けて行くことも出來る。それで世の中の治りがつかぬことは無い。理窟がつゞまれば世の中は治るわけですけれども、さうして治めて行つたのは形の上だけで、腹の中はさうは行かない。感孚とか、透徹とか、安心とかいふものは無いのです。落著の無いところに安心は無い。安心させるといふことの爲には、どうしても三教といふものを持出さなければならぬから、教化運動をする者で、大なり小なり三教の事を云はぬ者はありません。享保の奬學政策の弱點を衝かずに、身が修れば安心になると表面說いて置く。それは修行して行く道順であつて、安心の無い修身や愼獨は不愯なものである。たゞ斯うなければならぬといふだけでは根ツ子が無い。根ツ子が無ければ十分な生育が出來るものではないのです。

修身齊家といふやうなことも、身を修め家を齊へるといふことから、身修り家齊ふといふところへ往返するやうに說いてゐる。この因果關係を餘所に見てゐるやうなことはしてゐない。日本に生れて日本が嫌になるなどといふのは、已に迷つて物を逐ふといふやつです。この迷ひの無いやうに名教を

說いて行く。それは表面に見えて效驗がある。安心について參るのは裏側の方で、安心があつたところが、修身齊家が出來なければ仕方が無い。そこで修身齊家から安心に至るとも說き、安心から修身齊家が出來るとも說いて居ります。

三教の話をする時には、別に安心論を持出して居りませんが、自らそれが含まれてゐる。名教を說く場合のやうに表に出さないで、裏面に置くだけのことですが、どうしてもそれが隱れ勝になる。「返答下手談義」はその隱れ勝になつてゐるものを摘み出して、かうなつてゐるのはかういふ心持だ、といふことを云ひたい爲に、今まで誰も云はなかつた、奬學政策の裏面であるところのものを衝いた。これは敵だからさういふ行動をしたのかと云ふと、さうでもない。裏面にかういふものが隱れてゐるのは、かういふ風に働いてゐるのだ、といふことを考へさせる爲に、さういふことをやつたのです。こゝでダメを出したのは、妙ななづみの無いやうに、已を失ふことの無いやうに、三教論を持つて行つて安心することが出來るやうにしてあるのだ、といふことを見せようとしたのであります。

この非難によつて、教化運動に含んでゐるところの三教論は、活を入れられたやうに見える。それですから「返答下手談義」といふものは、恐しい敵のやうであつて、實は大變な味方であるといふ風に讀めるのです。

七四、江戸文學の根本

それから滑稽、洒落といふことになりますと、この本でもやはり相當やつて居ります。

こゝにつれ〴〵草講釋座料八銅、講師鵜殿退卜（獨活の大木）と云、書付ある行燈を近邊の隱居衆二三人つれて居られけるが、中に小利屈いひそうな老人、是はかわつたものずき漢文をちらしかきにかゝれた、何やら上にも文字があるが、老眼及びがたし、さて〴〵見事な手跡、まづ中から讀ませう、扨座料といふは唐の軍者に座料（臥龍）先生といふ人がありしと覺へた、一人の老人、なるほど〳〵、それは孔明がことじや、漢楚軍談に詳などゝの挨拶、八銅とは津輕八銅（方）のど（外）が濱といふ名所じや、講師とは何じや、はて文盲な事云はるゝ、あれは唐の聖人じや、鵜殿退卜とは合點が行かぬ、さて〴〵智の働かぬ人じや、定めてかうし（孔子）樣の醫學でもなされたとき、御名をかへさせられたのとみへた、念を入れてかくならば、かうし事鵜殿退卜とあるべき事なれども落字と見へた、次の老人、貴公方のいふやうでは、御名はいづれも唐人衆そうなるが、津輕は日本の中ではないか、又利屈ばりそうな親仁、なるほど日本の地なり、しかしながら雲州に松江といふ所、鱸の名物なり、唐にも松江の鱸といふて名物があるといへば、同じ名は唐にもあるべし、唐人の名寄と所書とを詩文に讀まれたを、唐本仕立に無點に書たものとみへ

た、なるほど〳〵道理じや。

かういふ風に洒落て居りまして、云廻しもなか〳〵上手にやつてゐる。これが前から申して居ります通り、江戸の各種の作品に行亙つて、諷刺の氣味がどれにもある。一九や三馬の諷刺が刺の無い薔薇だと云はれるやうになる因緣は、談義物が教化運動であつたからで、その因緣がありましたから、持つて廻つて滑稽本の中に「勸善懲惡稽古三味線」などといふ名前が出て來ても、一向不思議ではないのです。人の笑草になる、笑ひを取るのを目的とした滑稽本が「勸善懲惡」と名乘つたり、廢頽極る人情本の上に「教訓」の二字が冠せてあること等も、皆さういふ筋目から來てゐるのであります。

今「返答下手談義」のことを申したついでに、ちよつと申添へて置きたいのは、或先輩が洒落本のことを論じて、洒落本は黑本（くろぼん）の進歩した青本（あをぼん）と共同提挙して、江戸文學の基礎を固めたものだ、と云はれてゐる。私どもはその黑本の經過を全く無視するわけではありませんが、談義物が頭を擡げたといふこと、寶曆の教化運動によつて劃成されたところの江戸の作品が、あらゆる江戸の創作の母體となつたものと考へるのです。「下手談義」や「雜長持」のあとを追駈けて、類似した作品が續々出て參りまして、それが殖えれば殖えるほど、傾向や樣子が變つて來て、種々なる變化を來した、その根本をなすところの談義物の力の大きかつたことに比較して、黑本の發達を考へることは致しにくい。それよりも談義物の發達及感化の方が、遙に大きかつたことを思はずにはゐられないのであります。

七五、貨幣改鑄による動搖

それから「當風辻談義」これは敵か味方か、標題だけではわかりません。「返答下手談義」に對抗したものゝやうに見えますが、その行き方を見ると逆に說いてゐる。逆說だ。頭から遮二無二敎化しようと思つたつて、それは出來るものでない。さう行かぬのが時世である。だから是非とも效果を擧げようとするならば、時世を十分に腹に入れなければいけない、と云つて「下手談義」の行き方を直に受取らうとしない。

唯其時の氣を知つて衆生の氣に應ずるが誠の濟度方便、舍利無理に撓なほそふと思召とも迚もいかぬ事、强剛難化の白痴は何程異見いふても風俗を改て見やうと思ふ物じや御座らぬ。

それに追駈けて、時世が違へば風俗も違ふ。「下手談義」が尤も至極だと云つても、古風だといふことになれば、誰も相手にしなくなる、と云つてゐる。

下手談義の古風先生が叱りても、當風の町人は表を莊るが第一、

と云ひ、

古風に律義を說くと下手談義と號して嘲るが末世の凡夫、

とも云つて居ります。さうして今度は古風といふことに就て、

惣じて五十年も前の目で、今の凡夫を見て何か尤といわるべき、といふのです。五十年前といふところから勘定すると、どうしても元祿末頃になる。さういふ時代の眼から現在を見れば、一ツも至當なことは無い。現在は現在で、さうならねばならぬ時世だ、といふことを思はなければならぬ。その時世の隔りといふことから云ふと、

下手談義は百年も以前の人なら尤とも申すべし、今時あのやうな偏屈を云て誰か用ゆべき、

といふ批評を下す者がある、と云つて居ります。

五十年前の眼で見てさへ至當でないのに、百年前と云へば寛文頃の話になる。寛文度の人間でなければ承知出來ぬやうなことを、今日の時世に持出しては尙いけない。百年前といふことになれば、慶長の貨幣が流布通用した時代でありますし、五十年前だと元祿の改鑄で、惡貨の濫出した時代、さうして現在は文字金の行はれてゐる時代である。この百年前、五十年前、現在、といふ云ひ立から見ますと、前に申した貨幣の變動が、主として一般の生活を變動させてゐることが考へられます。他にもいろ〳〵の事情はありましたらうが、この時代までの世の中の動搖の一番大きかつたものは、貨幣を屢〻改鑄したことでありました。

世の中の事は如何なる思想がありましても、その時々の法律と、その時代の財理、この二ツに支へられてゐますから、世の中の形は、內心に持つてゐるところの思想そのまゝが出ることは必ず無いの

です。それですから法律と經濟と兩方から考へ合せれば、どういふ思想を持つた人間が多い時代か、といふことも判る。兩者からの壓力に苦しむ樣子を見て、內心に持つてゐるところの思想がどんなものであつたか、といふことも考へられる。江戸時代には法律の變化といふことよりも、貨幣による動搖の方が多かつた。これは江戸時代を通じて、一番考へさせられることだつたのであります。

七六、飛んでもない大腹中

それから又身持のことを述べまして、

下手談義のやうに身を持と無繩自縛とて、繩なしに吾身をしばりて、形ちすくみ、短い浮世を樂(たのしみ)もなく暮していかゐ損したと、死して後悔するとも埒のあかぬ事、

と云つてゐる。これは屈託することに堪へないで、自暴自棄に陷る。一寸先は闇といふ流儀の結論になるのです。一寸先は闇といふ氣持は、舶來の言葉で申したら、世紀末とでもいふことになるのでせう。江戸時代になつてからは、明暦前後の武士がさういふ自暴自棄の態度に陷つたことがある。その次は享保度になりまして、割引の生計を立てねばならぬといふところに落込んで、明暦前後ほどではないけれども、一寸先は闇といふ思想が出て來て、自暴自棄になつた者が大分あるやうです。

そこであまり屈託しないやうな暮しをしなければならぬ、それには腹の中を大きくしなくつちやい

けないといふので、

此已後和尚も粹に成らせられ、石で手を詰たやうな御勸化無用、世上は廣から「邪義」な物知りが出て、和尚の下手談義は見職が淺いの狹いのと嘲ります程に、大腹中に御捌なされ、と云つてゐる。この文章の中に「邪義」といふ言葉があります。さうして大腹中になれと云つて居りますが、その大腹中といふことがよろしくないと見てゐるのです。「下手談義」の中の八王子に隱居してゐる親父が、自分の末子の乙吉の身持が直つたやうであつたが、養子に遣つた先から追出されて、實家へ歸つてゐる間に、舊友の治郎藏といふ者に出逢つて、もとのドラに立返つた、といふことが又こゝに述べてある。それは全く舊友に誘はれて、變な知識に觸れた爲だといふのです。

わたくしが大念比な儒者、近い比上方から下りて大流行、門並に門弟と成し、麻疹先生と申て、肩をならぶる人なき古今未曾有の大學者、庭訓でも伊勢物語でも假名なしに讀れます、それ〳〵は器用な仁、俗名を葉鹿閣之進と申て、誰いやがらぬ者もなし、其譯はちと短氣であいしらひがわるいと、わるすりや投らるゝゆへこわがらるゝ、古風な古文三體詩を教へたり、朱子とやら云とろい人を慕ひ、四書の集註とやら、まだるい讀物する所へ金出すは、下手醫者に懸りて藥代出すとひとしく、財寶をつゐやして身の害を求むると申物、ひらに〳〵と誘引出され、彼先生の弟子になり、大に氣が反りて、扨も〳〵今までは知らぬ事とて、うか〳〵と窮屈な目を仕て居たが、

治郎藏坊が蔭で名師の教諭を蒙り、今は心廣體胖に見てくれ、何所もかも油ぎつて此肥滿したを見よと獨悦、毎日出歩行く片時も宿に尻がすわらず。

實家へ歸つてゐる間に、舊友の勸めに從つて新に先生に就いた。その先生といふのが「誰いやがらぬ者もなし」とありますから、筆者は十分にその人を拒否してゐるのです。それだから大腹中といふ流儀の思想や、一寸先は闇といふ學問は、飛んでもないものだといふことを、云はないで用が濟むやうになつてゐます。その先生の教へてゐる言葉の中にも「腹存分に氣儘して末に乞食せまいとはあつかましい」とか「其許の御器量で古下駄で焚た食もくはず、橋の下で死なぬといふは、いかにしても殘念」とかいふことがある。この言葉によつて、別に理窟を云はないでも用が足りるわけですが、隨分人を食つた言葉です。畢竟順に說かずに逆に說いたので、困りもの〻先生だといふことはこれだけでよくわかると思ひます。

七七、覺醒させる逆說の效果

逆說といふことは、隨分反間苦肉の計とでもいふやうな行方で、却つて眞直に說いて行くよりも、言葉少なに讀む人を覺醒する力は强いんぢやないかと思はれます。無緣坂の法界寺が師匠に答へる言葉にも「和尙や下手談義のやうに身をもつと皆よい人で皆金持になるべし」とあり、併しそれでは寺

には寺男が無くなる、駕籠に乘る人ばかりで駕籠舁が無くなる、といふやうなことを云つて、又一くさり辯じて居ります。

隨分下手談義を目くじらたてゝ打込、氣儘氣隨に身を持崩し、われらがやうな貧乏寺でも餓死せふより增ならめと恥を忘て見込、門番穴ほりとなる人澤山出來て不自由せぬが此方の德。

この短い文句も亦逆說でありまして、成程それでは困るといふ效果は、順に說くよりもこの方がいいかも知れない。時世違ひといふことは前にもありましたが、時世違ひであるからと云つて、談義物の說くところを、人が受付けぬやうなことが無い爲に、前に五十年前、百年前といふことを云つたのと同じく、時世違ひといふことも多く經濟關係から來てゐる、といふことを云つてゐるのです。制度としては階級が儼然として居りますが、財理財力といふ方から云へばさうでない。もうこの時分には「金銀は湧き物」といふ言葉が出てゐる。これは元祿以前には無いことでありまして、元祿當時に投機商ひが盛で、ボロい儲けが隨分あつた。その馬鹿々々しい儲けの迹を顧みて、この言葉が出來たらしく思はれます。

「金銀は湧き物」といふ心持からは、知足安分なんていふことはとても出來ない。ですから、

分外をせぬ者を尋たら二人か三人はありこそせめ、それは數萬人の中で三人あらば多分に付がよし、

と云つてゐる。これも逆說です。多數決で行くとすれば、分を守つて行くなどといふことは無い。そこで分を守らぬ例をこゝに書いて、淨瑠璃語りの虹太夫が、辨天樣に福を祈る言葉として、

わづか四五萬兩さへあれば、其上は欲と申物、ア、何に致しましよ、

と云はせて居ります。寛永度の江戸中には、三千兩持つた者は幾人といふ位しか無かつた。それが元祿の末には、奈良屋茂左衞門、冬木彌平次などといふ人達は、一代身上で四十萬兩と云はれてをります。一石一兩といふ積りに致しますと、四十萬兩は四十萬石です。四十萬石と申せば、大きな御大名と同じである。さうなつて來ますと、制度の保障した階級と財力とが、大變矛盾して參るわけで、分を守ると云つても、制度からの分と財力からの分との間に、馬鹿々々しい大きな開きを見ることになるのです。

士農工商抔とは飛んでもない話で、百姓は何時でも町人から侮られるやうになる。士も町人から侮られる。それもその筈で、財力から云へば到底敵對は出來ない。制度の上からは階級が保障されてゐますから、儼然として四民ですが、實際はなか〳〵さうでない。時世が變つたと申すのも、財力が出しや張つたと申す事なので、幕府は頻りに身分相應といふことを云つて居ります。奢りはその人の分限に從ふ。分相應ならば奢りでない。同じ百兩であつても、或者には奢りであり、或者には奢りにならない。その分限は制度の方から云ふか、財力の方から云ふかとなると、それが明白な決著を見て居

りません。だから錢任せといふことになつて、金さへあればいゝといふ意味になるから、その上にもその上にもと貪り求める。足ることを知るなんていふことは、とても出來ない。足ることを知らぬやつばかりが分限知らずに狂ひ廻るので、たゞ向うへ〳〵と出て行かうとするのです。

小使を三十年つとめて、勤續を表彰される。大變結構なことのやうだけれども、一方では進歩も發達も無い人間だと云つて嗤はれる。如何にも働きの無いやつだといふことになる。即今の分際に忠實で、職を職として行つて往つたといふことは考へる者が無いのです。これを昔の人はたゞ增長してゐる、奢りが强いとだけ云つてゐる。そこのところを一考へ考へさせたい、といふのが談義物の主なる心持だつたのであります。

七八、思ひもよらぬ勸懲の流れ

「當風辻談義」は「當風」といふ字を「イマヤウ」と訓んで居ります。時世といふことを押へる爲に、古風に對して當風、當世、今樣といふ言葉が出て來るのですが、これがとかく「下手談義」や「雜長持」の主として心配してゐることを妨げるやうに見える。併し「下手談義」も「當世」の二字を頭にかぶせて「イマヤウ」と訓ませてあるので、その他にも「當世返答下手談義」「當世花街談義」といふ風に、いくつも出て居ります。

「下手談義」も續篇の方は「教訓」の二字をかぶせて居りますが、同じに「教訓」の二字をかぶせたものに、「教訓雜長持」「教訓不辨舌」「教訓反古溜」「教訓差出口」といふやうなものがいろ〳〵出てゐる。中には又風俗の二字をかぶせた「風俗八色談」「風俗七遊談」といふ書名もある。この「風俗」といふのは當世の風俗といふことなので、當世の風俗なるものは主として談義物が心配し、苦勞してゐる本體だつたのです。

それがだん〳〵辯になつて、教訓、當世といふ言葉をかぶせることが多くなつたわけですから、後の人情本や滑稽本にまで、教訓とか、勸善懲惡とか書添へるのは、ちよつと見るとをかしいやうでありますが、不肖の子も賢者の裔であれば、やはりその名字を冒すやうに、その筋目であり、血脈でありますと、本人は大馬鹿者であつても、賢人、聖人の裔であるが故に、同じ名字を名乘る。さういふ立派な心持の文字を、後々まで持續させたといふことは、教化運動に携つた人々の德の現れでありまして、馬琴などは勸善懲惡がうるさいと云つて、後にはそれが爲に嫌はれることになりましたが、さういふ氣持を持つといふことは、決して馬琴ばかりではない、筋目から云へば總べての作家が持つてゐたのです。江戸のあらゆる作物の筋目は、他のところから來てゐないのですから、どうしてもさうなつて行くわけでもありました。

馬琴などより上手を行く狂言作者は、舞臺の約束もあれば幕數の關係もあつて、もつと窮屈な思ひ

をしながら、勸懲に嵌めて行く作物を書いてをります。一體戯作といふ名稱を生じたのも、勸懲といふ四角四面な型に入る窮屈を避けて、トボケた顏を突き出して我儘氣儘に書く心持から出たやうに思はれます。勿論戯作といふ言葉の中には、自分が氣輕に面白く書かうとするばかりでなく、皆に窮屈でなく受取らせたい、といふ心持があります。さういふ心持は好阿や單朴の書いたものにも十分見えて居ります。これは又中本が滑稽物として、そこへ流れて行く源をなすものでありまして、後來滑稽本といふものが、江戸の諸作品から類別される場合に「下手談義」を第一に擧げてゐるわけもそこに在るのです。

もう三馬や一九の時代になりますと、そんなに程遠いことではありませんが、談義物のことなどはちよつと思出されぬやうになつてゐるのに、どうかすると勸懲を持出すことがある。さういふ言葉はだしぬけに持出したやうでもあり、無理に持出したやうにも見えますが、筋目から尋ねて參りますと、教訓らしいことも時には云はねば濟まぬやうな氣味合もあり、自然と勸懲といふことを云つて見たくなるやうな工合もあつたらしいのです。それは必ずしも無理に云ふわけでもない。上から流れて來るものを受繼いだのですから、さういふことになり行くのではないかと思ひます。

七九、引合に出した豐後節

それから「當風辻談義」は、洲崎の辨天様の言葉として、次のやうなことを書いて居ります。

江戸產の恒原脇之進といふ男、殊外其方が一派の淨瑠璃信仰で、江の嶋の神勅を大に恨み、なにとぞ無理にも返答して我信ずる豐後節を再興せんと息勢張る……彼が云分には下手談義の作者は見識が淺い、豐後ぶしから人の風がわるふなるとは大きな見違、世間の人がわるさに豐後が流行といふたげな、アハ、ハ腹筋がよれてあいたゝた、其外土佐ぶしには切たりはつたり計なれど、土佐の流行し時に合戰した者もなしとは、豐後が流行るゆへ心中がたへぬと書し下手談義を謗るのじやが、聞て笑わぬ者もなし、いかふせつない、事を缺た辨ではあるまいか、人の人たる人は皆知て右流左がつて居た所へ、下手談義が出た程に嬉しがつたは、世をも人をも思ふ善人、又腹たてゝ惡口いふは卷鬢の塗下駄組、邪正善惡、三ツ子も合點しそふな事を文字をも知り、書をも取扱ふ脇之進が豐後に左袒も氣の毒。

これによつて見ますと、折角の「下手談義」にも無理がある、自作の無い豐後掾のことだから、大抵義太夫の文句に節をつけたので、さう惡い筈が無いなどと云つて居りますが、つまりは「下手談義」の文句をうけがふやうになつてをります。こゝで附けて申して置きたいのは、この豐後節をいゝ惡い、といふのは主として心中沙汰を取入れたのが惡いといふことなのです。その他に文句がつまらぬといふことはともかくとして、文句が惡いといふことはありません。それよりも惡いのは、唸り節と云は

れて居つた、あの節です。太宰春臺などは、淫心を動かすのは悲しみの聲より引動かすものだ、と云つて居る位で、豐後節に對する非難は、主としてあの節がいけないといふに在つたやうです。けれどもこゝでは、その問題には觸れて居りません。それよりも心中の事實を浮瑠璃にして、皆に語つて聞かせることがいけない、といふのでありますが、それに就て「下手談義」と「返答下手談義」とをつき合せて、評を加へたところがあります。

下手談義の作者殿も御聞あれ、ゆめ〳〵脇之進が辨を見て怒を起し、再反答など作らんとばしおもふべからず、老人じやげな、無益な諍を息めて同入和合海と出て、念佛申て居やるが年相應、脇之進も彼書くらいの假名草帋を見識が淺いの深いのとの沙汰に及ばぬ事、凡諸人の爲とて教訓を書た草紙も數々あれど、談義は詞ひらたふ、下品下生のこれや又衆の耳へ入るやうに書た故、終に金平本一冊讀た事なき者もよんで嬉しかつたに云破る志し、言語道斷おとなしからず、歴々の御衆が扨〳〵奇特千萬な、此方共は何程教訓したふても下々の情に通ぜず、假名草紙を作りて教化して見ても、すきとあちの耳に入らで利益がなひに、彼は下品の情を知りて委細の教を凡下の詞で書きつゞりしゆへ、下情に通じ餘程心懸もよふなつたと御ほめなさるゝ中で、云破てくれんと机によりて文房四友の手前も恥かしからぬかは、反答下手談義とは、ハレやくたいもない。喧嘩兩成敗とでも云ひますか、さういふ風に云つて來るかと思ふと、どうやら「返答」の方が叱ら

れたことになる。「返答」に對して再返答とでも出かけさうなところまで、先廻りして云つてをります。さうして他の箇所を見ると、盛に「下手談義」を褒めてゐるのです。

町人の愚な者の爲に教訓した眞實が屆ひて、世人の心にかなふたればこそ、書物屋共の咄を聞けば、近年出來た假名本の中では賣れ物であつたげな、それ程世人の請取た、下手談義を藁焚て見やるは學者ならば近比似あわぬ、都て書を作る事は、人の爲によいことをこそ綴れ、風俗のわるふなるといふ事を、諸人の氣の毒がる中で、いやわるい物じやないといふは、たとへば鰒は大毒としらぬものもないに、ナンノ鰒が毒であろふぞ、觀音の市で煮賣まで喰ふたが、終にあたつた事がないといふ樣な物。

さん〳〵褒めてまだ足りないで、今度は念入に賣行のいゝことまで吹聽してゐるのであります。

八〇、突止められぬ連絡問題

それから又開帳の寢釋迦の言葉として、こんなことも書いてあります。

惡洒落を發明と心得、律義を馬鹿の唐名と覺へ、戒律を保ものを小乘といやしめ、肴喰ふて惡所通ひするを大乘とは、嗚乎いかゐ戲氣、誓文已は其やうな事いゝもせぬに、佛道のみにもあらず、儒を說て人の身持を敎れば、又片脇から老莊の道じやとて大腹中な事を說て、身を持崩させ、身

體を棒に振せるが澤山ある、近い比大坂の醫者德孤子が靜觀房と替名して、東武の旅宿で、町人の身持に託して野浮圖を說て誹謗し、大腹中の放逸を勸む、彼積慶堂の主人は仁術たる醫を業とし、其間に下化衆生の下手談義、奇特千萬と、此比も藥師へ出逢ふて讚歎せしに、誹謗するは魔道の骨張、凡敎訓とある書に返答の出たと、祭りの客が辨當持て來たとは、我成道以來見ぬが、此度彼の下手談義に返答が出來た、此釋迦も我が批る。

「當風辻談義」は標題の下に「下手談義前後評判」と割書してあります。靜觀房の人物や著書を褒めるやうで、抑へるやうで、結局褒めることになるのは、前にも申した通りですが、この開帳佛の言葉も亦「下手談義」を褒めることに歸著して居ります。

寢釋迦は又これに續いて、

彼の下手談義は俗情に通じ、何所か一ツ、世人の害になると難すべき所なし……上人は奇特とほめ、中人以下は嬉しかつた、腹立しは豐後ぶしの仲間のみ、それを難じて返答仕るは、邪義邪見の摩訶邪見なり、

と云つて居ります。この後で俗山伏を叱つたのを、「辻談義」が指摘して居りますが、それでは「下手談義」を抑へる意味かと思つて見ると、却つて湯殿參りをする町の若い衆に就て、いろ〳〵弊害のあることを說明し、俗山伏であるところの大峯講の先達に戒程と得心させてをります。概して「辻談義」

の行き方は、いつも「下手談義」を抑へたやうで、尻は必ず褒めるやうになつてゐるのです。

それから又談義物の作者の連絡のことになりますが、どうもこの一團の教化運動者の間には、何か連絡があつたやうに思はれる。「辻談義」の中に辨天様のことを書いて、

辨天とさへ聞けば加留多筥程の宮居をも探て詣でける程に、まして江都の内は凡百五十ケ所か、惣鹿の子に漏た小社迄參りて、

とあるかと思ふと、「雜長持」にも、

並木の藤屋は江戸寄合茶屋の根元とかや、玉花子が惣鹿子に記したる名題程有て、假にも下品の會合なく、

と書いてある。この事は前にも申しました通り、奥村玉華子は寛延四年刊の「再訂江戸總鹿子新增大全」の自序に、

靜觀房が勸めを力に再び世上にひけらかし侍る、

と書いて居ります。何か少しの緣があれば、直に「江戸惣鹿子」を持出して、褒めたり吹聽したりしてゐるところを見ますと、この奥村玉華子も亦教化運動中の一人ではないか、といふ風に考へられるのですが、何分それを突止めて參ることの出來ぬのは、まことに殘念な次第であります。

八一、教化する側への影響

さてこの教化運動の同志と見るべきものは、「下手談義」「雑長持」「錢湯新話」「隨聞集」「返答下手談義」「辻談義」といふやうな五六種のものでありますが、思ひの外に世の中に取囃されましたのみならず、それが江戸文學の基礎となつて、江戸のその後のすべての作品が、皆談義物を母體として、枝も生えれば蔓も出るといふ風に、次第に繁茂生育して參りました。そればかりでなしに、奎運を西から東へ持つて來るやうなことにもなりました。これは談義物の後から出た種々の作品を、委しく分ければ分けるほど、明かになる事柄でありまして、別に文學史などを繰つて見るまでもありません。

併しながらそれは彼等の教化運動の目ざしたところのものではない。云はゞ彼等の運動に誘はれて出て參りましたもので、彼等の心持に合ひますものは、それ以前に在つては甚だ少かつたのです。然るに寶暦以降、江戸を終りますまで、自己の經驗を述べて教訓する著作が次々に出て參りました。それらの著者といふものは、儒者や學者でもなければ著述家でもない、固より戯作者ではありません。一作だけのものが多いので、著者の名前も知られてゐない「家内用心記」でありますとか、「商人生業鑑」でありますとかいふ商人の著作もその一ツでありまして、さういふものがなか〳〵澤山出てゐる。

古本屋で時々見かけますが、隨分種類が多いやうに思はれます。

さういふものも談義物の影響でありますが、その他に指導者とでも申しますか、教化する側にどう響いたか。一般世間に響いたことは、寧ろ目立つたものが少いのですが、教化する側にさし響いた方は、著しいことがありました。それは思ひもかけぬ江戸文學の發生とは違つて、好阿や單朴に取つても大いに滿足すべきことであつたらうと思はれる。

一般世間に彼等の教化運動が齎したものとしては、石田梅巖の心學が江戸へ移入するに當つて、大きな便宜があつたとも云へば云へませう。談義物が從來心學物と同じ扱ひを受ける因緣もそこに在るのですが、教化すべき側に及ぼした影響にはどんなものがあつたかと云ひますと、先づ寶暦二年に上野の淨名院の問題が起つて居ります。これは元祿年間に靈空和尚が兼學律といふことを唱へられて、公辨法親王がそれを御採用になつた。その兼學律の廢止問題でありまして、これが安永四年まで持越して安樂騷動となり、身分の高い坊さん達が處分を受けるといふ大騷動を生じました。

八二、先師尊敬の普寂律師

寶暦十一年には、目黑の新寺——長泉律院と申します寺の普寂律師が出られました。この普寂律師に就ては、先師嶋田南村先生は毎年一度必ず長泉律院に參詣せられ、晩年までそれを續けて居られま

した。先師の書いて置かれました隨筆――短いものですから、全文をこゝに載せて置きます。

律義

瑜伽論云、律儀一戒、不異聲聞

此文ニ依レバ攝善攝生ノ二戒ニ於テ、大小乘ニ不同アルモ、攝律義ノ一戒ニ於テハ聲聞所制ノ戒ニ違順アルコトナシ

善戒經云、不受五戒者、不能成就十戒、不受十戒者、不能成就具戒、不受具戒者、不能成就菩薩大戒、譬如人登重樓、不由初級者、不能上二級、不由二級者、不能上三級、不能上四級云々、又云此戒甚難、能爲沙彌大比丘及菩薩戒、而作根本、

人ノ禽獸ニ異ナルハ機智謀略ニアラズ、人ニ飲食男女ノ欲アリ、畜生ニモ亦此欲アリ、人ノ飲食スルハ此身ヲ養フ爲メナリ、此身ヲ養フハ道ヲ修スルタメナリ（道ヲ修スルニ世間、貴賤上下、其分に隨ヒ、其行ヲ異ニスルナリ）

夫婦ハ其子孫ヲ相續スルタメナリ、其欲、大ニ畜生ト同ジカラズ、

天下ノ人心ヲ維持スル事ハ、世間ノ法律ノ及ブ所ニアラズ、世間ノ法律ハ形迹ノ上ニ現ハレタル事ヲ制スルナリ、人心ヲ維持スルニハ他心ヲ感格スルニ在リ、他心ヲ感格スルニハ、自身ニ其行ヲ修シ、自心ニ其德ヲ證シ、然後自カラ他心ヲ感格スル事ヲ得ベシ、是ヲ自利利他トイフ、苟モ此ニ心ナキハ無道心トイフベシ、既ニ道心ヲ發起セザルハ畜生ト異ナルコトナシ。

當時の佛者の間に戒律の問題が起つて參りましたのみならず、各宗ともに律に關するいろ〳〵な動きが寶曆度に起つて居ります。談義物の作者は佛者に對して不滿を懷いて居りましたし、世間でも僧行に就て論議してゐる。何時でも佛敎排斥といふことは、僧行のよろしくないところから起ることが多い。先師が普寂律師を御尊敬になりました御心持は、律師の行狀記を讀んで見るまでもありません。律師は一向宗から淨土宗に替られた方ですが、その時一首の歌を詠まれました。

みにかけし法の衣は同じくも身はゞあはねばぬぎすてにけり

この律師の出られましたことは、大いに僧行に關係のあることでもありますし、好阿、單朴としても何程よろこぶべきことであつたか、察し遣らるゝ次第であります。

八三、古人憂慮の迹

談義物の作者は又儒者にも失望して居ります。儒者の方の畠にも詩文とか、風流とかいふことを仕事のやうに思つてゐる人が、だん〳〵多くなつてゐることを遺憾としたのですが、この方は佛者よりも後れまして、寛政の學制改革迄、どうにもならずに居りました。寛政の學制改革といふのは、後々まで異學の禁と云はれてゐる出來事であります。

異學の禁といふことは、保科正之が熊澤、山鹿の兩人を罰したのが最初でありますが、寛政のはそ

れとは違ひまして、幕府の學問所であるところに向つて改革したのです。德川一世以來、宋學を遵用して居つたのですから、祖法に違つてはならぬと違したのです。何しろ政府が官學に加へた改革なので、保科がやつた時のやうに、在野の學問に對して、幕府以外に居る者を彼是云ふのとは意味が違ふ。所謂三助の學風――栗山柴野彦助、二洲尾藤良助、穀堂古賀彌助、この三人を三助と申したのですが、又これを寛政の三博士とも云ひました。此等の學風を以て正學とし、それを採擇致したのであります。それに就きまして、寛政二年五月二十五日に林大學頭へ下された御沙汰書があります。

朱學の儀は慶長以來御代々御信用の御事にて、已に其方家代々、右學問維持の事仰付置かれ候儀に候へば、油斷なく正學相勵み、門人共取立申べく筈に候、然る所、近頃世上種々新奇の說をなし、異學の流行、風俗を破り候類これあり、全く正學衰微の故に候哉、甚相濟ざる事にて候、其方門人共の內にも、右體學術純正ならざるも折節これ有る樣にも相聞へ如何に候、此度聖堂御取締嚴重に仰付られ、柴野彦助・岡田清助儀も、右御用仰付られ候事に候へば、態々此旨申談じ、急度門人ども異學相禁じ、猶又自門他門に限らず申合ひ、正學講究いたし、人才取立候樣相心懸け申べく候事。

申すまでもございませんが、朱學は宋の朱熹の性理說で、朱子學とも宋學とも云はれてをりました。此朱學にも色々と學風がございまして、藤原惺窩の後に、道春以來の林家の風があり、木門と申した

木下順庵の一派があり、崎門と申して山崎闇齋の系統等がございまして、朱學宋學と申しても一概には辨へられません、精しく申しましたなら三つや五つの別け方では足りますまい。勿論藤樹、蕃山、仁齋、徂徠等の宋學でない學派を除いた勘定なのです。さて寛政の學制改革は新に擢任されて、事に當りました三助の學系を見ても知れる通り、朱學諸流の中でも闇齋の學風を採用されたのでありまして、當時の林家門人であつた雲室上人も「神祖以來、道春の學御信厚の處皆改り、山崎風の學者多くて、道春の血脈と共に學風も絶たりけり」と書いてをります。朱子學以外の學問を異學としたには相違ありませんが、實は三助の學風、即ち闇齋系統以外の學問は幕府の學問所で講述することを禁じたのです。これは今日で申せば、政府が官立大學を改革整理するのと同樣ですから、今日の事として考へても、多少興味のある問題だと思ひますが、それはともかくとして、好阿、單朴の儒者に對する不平不滿は、こゝに至つて除かれたわけなのです。

好阿、單朴の教化運動は、即ち談義物の刊行でありまして、これは思ひもよらぬ江戸文學の發生となりましたが、その本途の心持といふものは、かういふ風に紆餘曲折致しまして、何分の效果を擧げて居る次第であります。

今日私どもは、教育勅語を拜戴致して居ります。その上に「幼學綱要」や「明治孝節錄」をも拜見致して居りますし、元田永孚先生の書かれた「聖諭記」や、井上梧陰先生の書かれたものも拜見して

居ります。さういふものを拜見しながら、寶曆度に於ける談義物の作者達が、彼是心配致した迹を考へますと、まことに感慨に堪へぬものがあります。殊に彼等の教化運動は、七十を越えた老後の事であつたと思ひますと、尙更古人が世の中を大事にされたことに思ひ當ります。彼等としては思ひもよらぬわけでありましたけれども、豫期した、しないに拘らず、江戸文學なるものが談義物によつて發生し、だん〳〵進んで來たといふ事實を考へます時、今日の操觚者は如何なる態度に出られるか、又如何なることを考へて居られるか、改めて御尋ねしたい氣も致す次第であります。

教化と江戸文學　終

教化と江戸文學　索引

（ア）—（オ）

東能坂東聲……一八八
闇齋學……二四八
穴……六
惡口僧諦道……七五
惡對を家の藝……一七〇
惡對上るり……一七二
蟻の立所……一五四
天野信景の習合論……一四二
雨森芳洲の感歎……一三七
淺野吉良喧嘩の根本……一三
朝談義晝談義夜談義……八〇
石田梅巖の心學……七
生田五郎兵衛の十萬人講……六三
伊勢流神道……七一
伊藤單朴……一二九
田舍莊子……一三九、一五二
伏齋樗山……一三八
穿ち……六、一八四
浮世草子の新趣向……一三
浮世三分五厘……八三
江戸の神道講釋……六九
江戸仕掛……一八
江戸言葉の發生……一八九
繪入の小學讀本……四五
お長屋文學……七
お手前の御智惠自慢……二八
岡場所……一〇一
溫知政要……一二九
奥村似嘯……一三六
落噺……一九〇
押掛往生、押成成佛……一五五

（カ）—（コ）

河童……一八五
籠字の墨子……一六九
嘉例のつかみ合……一六九
歌舞伎のツラネ……七四
金廻り……九〇
金貸婆……一〇九
海商……九一
高札の文面……一六三
駈落……一〇二
鳥金、車貸……一〇九
學問大名、本讀み侍……八
學校は御無用……二八
假名字書きの教訓書……一三六
解剖……四八
勸善懲惡……一三

寛政の三博士……二四六
鳩巣の奬學異見……二四
祇空の溫泉茗談……六四
奇談小說……一三
競組の眞似……一六八
金賤物貴……一七
金平淨瑠璃……一九九
金銀は溺き物……二三三
狂講……九九
享保元文の際……一七
京都修行……八四
敎訓反古溜……一二六
喰へぬ燒物……二〇六
儉約政治の勉强……二〇
喧嘩腰の法談……七二
御當家の流儀……一一
小柳町の孝子……二七
渾天儀……四八
五臟明辨……四六
五倫名義……一二三
後世派……四六
古方家……四六
孝義錄……二一〇
聲色入の講說……七二
聲色上手の圓隨……七一
コリヤ又組……七四
コジツケ……一九一、二〇三
（サ）——（ソ）
坐頭の居催促……二一〇
ザマを見ろ……一八三
細民文學……一九二
佐前佐後……一五
酒落本……一八六
女子の讀物……一九
初學課業次第……二一
式內染鑑……四六
司天臺……四八
朱子學と陽明學……五三
淨土宗の曇海……七七
駿臺雜話……五四
時勢生活……八五
時世相應……八六
四言敎講義……六五
始末……一〇三
神道研究の二種……六八
神祇四姓……六八
神書相傳の科……二一〇
宿狀宅狀……九八
水利……四八
數學……四八
菅野兼山の俗受……六七
粹料理……二〇六
折裏派……四六
戰國の生殘……六〇

靜觀坊好阿……二七、二八
徂徠の和解……三六
徂徠學……四七
祖惠の遠島……六二
僧巫法度……八〇
葬儀屋の引札……一七三
俗山伏……二四〇

（タ）——（ト）

爲永春水……三
太宰春臺の豫言……一九
潭北の民間分量記……六四
談義物……六
談義物の經界……一四四
田沼さんの社會政策……一八
大腹中……三三〇
中本の滑稽……六
町人の文學……七
町家の婦女……一〇四
町人憎み……八五
知足安分……八六
中から下……二〇八
天文學……四八
出來物語……九三
泥坊を働く武士……二七
道學眞妄圖……五九
當世今川狀……八八
當世辻談義……三七
土佐節……二〇七
渡世……二一六

（ナ）——（ノ）

泣本……二一
難信燈佛說……六三
なづみ……二一八
二種の賞罰……三九、五四
日蓮宗の鐵城……七七
人證書證……五八
日本流がよし……一六九

（ハ）——（ホ）

八笑人……六
八文字屋の沒落……一四七
旗本の風俗……二八
旗本に素讀……三〇
葉隱……七
薄利多賣……一〇四
幕府に大不敬の罪……一〇三
馬場文耕の批評……七七
拜伏念佛の法念……一〇四
膝栗毛……六
火札……一〇三
普寂律師……二四三
武家相違……一六四
物產學……四七
佛法叱……七〇
分度生活……九二

深井志道軒……九七
藤掛邸を襲撃……七二
風流本……一四六、二二三
豐後節……三四
下手談義……一〇
米價の亂高下……三一
辨道書、辨々道書……六五
返答下手談義……一二九
坊主學問……一〇
法律類寄……二九
細井廣澤のきみまくら……四四
法律の世の中……五八
本朝異學問答……六五
木門の五先生……一三九
（マ）——（モ）
町寺佛敎……七
町坊主秀天……七九
升屋大藏……一四八
水野忠之の儒者嫌ひ……一一
身祿の富士講……六三
見立……一九一
娘節用……三
梅曆……三
無兵の亂……四
無筆の目學問……一一
增喰ひ女房喰ひ……一〇一
宗春卿……一八
ム ダ……二〇五
明君家訓……三五
名目金……一〇八
妻敵討……一〇一
持乞食、金の番人……一四
（ヤ）——（ヨ）
山寺佛敎……七
山脇東洋……四六
雇ひ談義……七九
山本善五郎か……二六
夢の跡……一二九
吉宗將軍の新敎育策……一〇
吉宗將軍の位牌……一三〇
吉田順庵……四〇
吉原の上客……一〇九
讀み本の系統……二一
（ラ）——（ロ）
律學……四七
理窟のあぶれもの……二六
曆學……四八
浪人學者……八
六諭衍義の和解……一〇
六項目の元文律……三八
老子の道……一六

(出文協承認
あ80186號)

—大東名著選 36—

昭和十七年七月十五日初版印刷
昭和十七年七月二十日初版發行（四千部）

配給元　東京市神田區淡路町二丁目九番地
日本出版配給株式會社

教化と江戸文學

定價一圓八十錢

著者　三田村鳶魚

東京市芝區芝公園七號地十番
發行者　岩野眞雄

東京市神田區三崎町二ノ二二
印刷者　堀内文治郎

東京市芝區芝公園七號地十番
株式會社　大東出版社
振替東京一九四七一番
電話芝三九四四番
會員番號一一六五三六

堀内印刷・芳林社製本

齊藤家藏

◇大東名著選◇

文學博士 鈴木大拙著

禪の諸問題 1 ¥1.80

禪學界の第一人者が禪の本質をあらゆる角度より考證探求した名論集。

加藤咄堂著

日本風俗志（四卷） 2.18 11.25

一卷總論・關東地方　二卷東北・中部地方　三卷北陸・近畿地方　四卷中國・九州地方

一卷 ¥1.80　他各 ¥2.00

醫學博士 諸岡存著

茶とその文化 3 ¥1.60

茶に就ての一切の研究、考證、嗜好等の文化面を各項に分ちて詳述す。

岡本綺堂著

歌舞伎談義 4 ¥1.50

吾が傳統的國劇に對しての正しき理解と鑑賞を示唆する芝居入門書。

文學博士 椎尾辨匡著

佛教要領十講 5 ¥1.80

佛教學界の泰斗椎尾博士が深遠な教理の大綱を平易に總述する。

文學博士 木村泰賢著 文部省編纂

印度思想史 6 ¥1.80

我が印度哲學界の巨星により其の要と隨とは明瞭に表出さる。

三田村鳶魚著

江戸の風俗 江戸の生活 7 20 各¥1.80

江戸時代の興味深い生活の數々を著者獨特の觀察と評言を以て詳々と物語る。

上司小劍著

生々抄 求道物語り 8 ¥1.70

著者の犀利なる批評眼を通じ、悩みを信の道によつて解決した人々の解脫物語。

◇大東名著選◇

送料各二十錢

正宗白鳥著

空想と現實 9 ¥1.70

文壇の巨匠白鳥翁の最近の評論感想集。その情理兼ね備はる達人の境地を見よ。

岡本かの子著

散華抄 10 ¥1.60

一代の才媛かの子女史の代表著作。眞理の風光は全卷に躍如として漲る。

後藤朝太郎著

硯と筆 12 ¥1.80

硯の研究、鑑賞に於て最高權威たる著者が、和漢に亘りその史と實とを物語る。

文學博士 辻善之助著

日本人の博愛 13 ¥1.80

日本民族の博愛を示す幾多の代表物語を叙し、更に之を基礎づける史料を示す。

山上八郎著

兜の研究 上、下 14 23 各上下 ¥1.80

著者は甲冑研究で學士院賞を授與された權威者。その興深き研究の成果に見よ。

直木三十五著

日本劍豪列傳 15 ¥1.80

古來著名な日本劍法の諸豪を物語として描き、その技術と精神とを究明す。

文學博士 志田義秀著

日本の傳說と童話 16 ¥2.00

我が國民性を象徴する代表的傳說並に童話の五天譚等の原型由來を叙述す。

森銑三著

書物と江戸文化 17 ¥1.80

江戸時代を飾る重要にして興味ある書物を時代順に紹介す。悉く未見貴重の書。

◇大東名著選◇

送料各二十錢

田山花袋著
近代の小說 19 ¥1.80
明治大正の時代推移とそれに關聯する文壇の人物と作物を批判展望する。

文學博士 福井久藏著
連歌の道 21 ¥2.00
我國文學史上重要なる地位を占むる連歌の發達、內容、意義等を明にす新著。

黑木勘藏著
近松門左衛門 22 ¥2.00
國民的劇詩人としての近松翁の生涯と藝術を縱橫に解剖研究せるもの。

大野靜方著
浮世繪と版畫 24 ¥2.30
我國純粹藝術の精華たる浮世繪及版畫をあらゆる角度より究明す。

文學博士 高須芳次郎著
水戸學の人々 26 ¥2.00
明治維新に重大な役割を持つ水戸學の主要人物の生涯を描ける名篇集。

井上瑞枝、ペイ・マイエット、ガレット・ドロバーズ著 高橋梵仙編
日本人口統計史 27 ¥1.80
上代より近世に至る我國人口統計の事實を明にせる何れも定評ある研究論策。

醫博・慶大教授 林髞著
研究室秋冬 28 ¥2.00
我國生理學界の權威林博士の自選になる自然科學論策及び研究室隨筆の珠玉篇。

鳥羽正雄著
城郭と文化 29 ¥1.80
日本の城は軍事以外に我國民生活に影響する所多い。本書は城の文化面を闡明す

◇大東名著選◇

送料各二十錢

岡本綺堂著

明治の演劇 30 ¥2.00

自から經てきた劇壇の見聞を物語る、滋味溢るゝ明治梨園風俗志話。

文學博士 鷲尾順敬著

鎌倉武士と禪 31 ¥1.80

武士道精神を唱はれる鎌倉武士と當時の佛教の精髓たる禪との史的研究。

森銑三著

近世の畫家 32 ¥2.00

近世の主なる畫人二十家を著者獨特の流麗なる筆致を以て各角度から描く。

丸山三造著

日本柔道史 33 ¥2.00

柔道の原流を究め、その變遷を考覈し、現狀と海外發展の狀況を敍述す。

文學博士 木村泰賢著

佛教學入門 34 ¥2.50

著者晩年の最も圓熟せる思想內容を盛り結構の雄大斬新なるを以て定評あり。

文學博士 鈴木大拙著

無心といふこと 35 ¥1.80

本書は既に我思想界に一石を投じた名著今回著者の改訂成つて再梓す。

三田村鳶魚著

教化と江戸文學 36 ¥2.00

江戸文學發生期の史的根據に立つて、教化的文學の實相を說く權威者の新研究。

中島悅次著

神話と神話學 37 ¥2.50

廣く世界の例を擧げ、顧みて我國古典神話の特異性を闡明する神話學入門書。

東亞文化叢書

B6判 美裝

1. **近代日支文化論** 早大教授 實藤惠秀著 一圓八十錢 送十五錢
近き八十年來の日支文化關係を檢討吟味し、將來に於ける文化工作の方針を示唆す。斯界の權威者實藤教授の最新刊。

2. **南洋の民族と文化** 井東憲著 一圓六十錢 送十五錢
東亞共榮圏の一翼たる南洋の重大性を、民族とその文化の方面より闡明す。時局下の好讀物。

3. **康熙大帝** 西本白川著 中山優解說 二圓五十錢 送二十錢
支那歷代治政の理想境たる康熙大帝の德行を解剖して王道を註釋し、東方道義國家の再建を力說す。滿洲建國の先聲をなせる著

4. **西太后繪卷 上** 德齡女士著 一圓八十錢 送十五錢
支那近代の女傑西太后の公私生活を侍女德齡姫が描く。その豪奢と、その哀愁を湛へた優婉な實錄物語の中に、民族の性格と文化を暗示する清末の宮中繪卷

5. **西太后繪卷 下** 實藤惠秀譯 一圓五十錢 送十五錢

6. **支那風物志 一** 後藤朝太郎著 二圓五十錢 送、二十錢
——支那風景篇
支那の風景、支那の名園勝地、支那の庭園の三章に分ち支那獨特の風景とその趣致を著者一流の該博平明な筆を以て物語る。

7. **水滸傳と支那民族** 井坂錦江著 二圓 送二十錢
支那四大奇書の隨一水滸傳を解剖して、そこに含まれた社會性、民族性を究明す。近代支那の國土國民を知るに絶好の研究讀物

支那、劇、大、觀

波多野乾一著 A5判四五〇頁 四圓八十錢 送三十錢

舞臺寫眞三十數葉

前篇に支那劇の構成・役柄・衣裳・音樂・名優傳・觀劇手引を。後篇に代表的名劇六百篇を解說す。